

羽 熊 遺 跡

—福岡県京都郡豊津町大字節丸所在遺跡の調査—

福岡県文化財調査報告書 第144集

2000

福岡県教育委員会

国道496号線関係埋蔵文化財調査報告 1

は ぐ ま い せ き
羽 熊 遺 跡

－福岡県京都郡豊津町大字節丸所在遺跡の調査－

福岡県文化財調査報告書 第144集

2000

福岡県教育委員会

序

ここに報告する羽熊遺跡は、国道496号線道路改良工事に伴って発見・調査された遺跡です。平野部から山間地へ移行する丘陵上の弥生時代の集落跡で、小型貯蔵穴を主たる遺構とするなど、近郷でも希な遺跡でした。弥生文化の内陸部への浸透を示す好資料といえるでしょう。

発掘調査・報告書作成にいたる間には福岡県行橋土木事務所・豊津町・同教育委員会の諸機関をはじめとして、地元有志の方々の御協力を得て、これを無事に終了することができました。深く感謝する次第です。

また、本書が教育・研究、文化財愛護思想の普及にわずかなりとも寄与できれば望外の喜びとするところであります。

平成12年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光安 常喜

例 言

- 1 本書は、国道496号線改良工事に伴って発掘調査を実施した、福岡県京都郡豊津町大字節丸に所在する羽熊遺跡の報告である。
- 2 発掘調査・報告書作製は、福岡県土木部道路建設課の執行委任を受けて福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。
なお、調査・報告書作製に関して福岡県行橋土木事務所、豊津町・同教育委員会の多大なご協力を得た。
- 3 出土遺物の中、土器類は福岡県立九州歴史資料館において、文化財保護課整理指導員岩瀬正信の指導の下で、整理・復原を行った。
- 4 掲載した図は、遺構を飛野・中原博（現行橋市教育委員会）・植山智保子・内野陽子・山県栄が、遺物は飛野・西田美代子・岡泰子・辻啓子・原富子・丸山小夜子・大野愛里が作製したものを、豊福弥生・原カヨ子が製図を行ったものである。
なお、石製品の一部は豊前市教育委員会栗焼憲児・九州歴史資料館杉原敏之氏の実測・製図によるほか、石材鑑定は大阪大学院生上田健太郎氏の御教示をえた。
- 5 掲載した写真は、遺構を飛野が、遺物は九州歴史資料館において同館参事補佐石丸洋氏の指導の下、文化財保護課北岡伸一が撮影したものを使用した。
なお、空中写真は㈲フォト・オオツカによる。
- 6 使用した方位は主として磁北である。それ以外については特記した。
- 7 本書の執筆・編集は飛野が行った。

本文目次

	頁
I はじめに	1
II 位置と環境	3
III 調査の内容	7
(1) 竪穴式住居跡	8
(2) 土坑	15
(3) その他の遺構と遺物	52
IV おわりに	64

図版目次

図版 1	1：上空から北（節丸地区）を望む	2：上空から東（祓川）を望む
図版 2	1：全景（西上空から）	2：住居跡群全景（西上空から）
図版 3	1：1号竪穴式住居跡（北から） 3：3号竪穴式住居跡（北から）	2：2号竪穴式住居跡（北から） 4：4・5号竪穴式住居跡（北から）
図版 4	1：4号竪穴式住居跡（南から） 3：14（左）・13号土坑（北から）	2：5号竪穴式住居跡（南から） 4：27号土坑（南西から）
図版 5	1：28（左）・29号土坑（北東から） 3：58号土坑（北東から）	2：80（右）・81号土坑（北西から） 4：87号土坑（南西から）
図版 6	1：P4（北から） 3：国道496号から遺跡を望む（北から）	2：P81（南から） 4：遺跡から南東（犬丸地区）を望む
図版 7	出土遺物 1（住居跡）	
図版 8	出土遺物 2（土坑出土土器；D6・9・16・18・20・27・28）	
図版 9	出土遺物 3（土坑出土土器；D42・44・46・47・54・57・68・75・78・83・91・93・106・108）	
図版 10	出土遺物 4（土坑出土土器；D111、石製品；石庖丁）	
図版 11	出土遺物 5（石製品；石庖丁・石斧・砥石）	
図版 12	出土遺物 6（石製品；凹石・その他）	
図版 13	出土遺物 7（石製品；その他）	
図版 14	出土遺物 8（石製品；その他打製石器）	

挿図目次

	頁
第 1 図 周辺地形図（1/10,000）	2
第 2 図 周辺遺跡分布地図（1/25,000）	4
第 3 図 遺構配置図（1/300）	6
第 4 図 地形測量図（1/1,500）	7
第 5 図 1号住居跡、82・119号土坑実測図（1/60）	8
第 6 図 2号住居跡実測図（1/60）	9
第 7 図 3号住居跡実測図（1/60）	9
第 8 図 4・5号住居跡実測図（1/60）	10
第 9 図 住居跡出土土器実測図（1/4）	11
第 10 図 住居跡出土石製品実測図1（1/2）	12
第 11 図 住居跡出土石製品実測図2（1/2）	13

第 12 図	土坑実測図 1 (1~16号、1/40)	14
第 13 図	土坑出土土器実測図 1 (2~17号、1/4)	16
第 14 図	土坑実測図 2 (18・20~24・27号、1/40)	20
第 15 図	土坑出土土器実測図 2 (18・20号、1/4)	21
第 16 図	土坑出土土器実測図 3 (23~37号、1/4)	22
第 17 図	土坑実測図 3 (28・29・32~45号、1/40)	26
第 18 図	土坑出土土器実測図 4 (38~48号、1/4)	28
第 19 図	土坑実測図 4 (46・47・49~56・58号・63号、1/40)	30
第 20 図	土坑出土土器実測図 5 (49~83号、1/4)	32
第 21 図	土坑実測図 5 (57・59~62・64~70号、1/40)	34
第 22 図	土坑実測図 6 (71~74・76・77・79~81・86号、1/40)	38
第 23 図	土坑実測図 7 (83~85・87~94号、1/40)	42
第 24 図	土坑実測図 8 (91・92・94~104・117号、1/40)	44
第 25 図	土坑出土土器実測図 6 (87~105号、1/4)	46
第 26 図	土坑実測図 9 (105~116・118号、1/40)	48
第 27 図	土坑出土土器実測図 7 (108号・その他、1/4)	50
第 28 図	溝状遺構出土土器実測図 (1/4)	52
第 29 図	柱穴実測図 (4・81号、1/15)	52
第 30 図	柱穴出土土器実測図 (1/4)	53
第 31 図	土坑等出土石製品実測図 1 (石剣・石鏃等、1/2)	54
第 32 図	土坑等出土石製品実測図 2 (石庖丁、1/2)	54
第 33 図	土坑等出土石製品実測図 3 (石斧、1/2)	55
第 34 図	土坑等出土石製品実測図 4 (砥石、1/2)	56
第 35 図	土坑等出土石製品実測図 5 (凹石、1/2)	57
第 36 図	土坑等出土石製品実測図 6 (その他、1/2)	58
第 37 図	土坑等出土石製品実測図 7 (その他、1/2)	59
第 38 図	土坑等出土石製品実測図 8 (その他、1/2)	60
第 39 図	土坑等出土石製品実測図 9 (その他、1/2)	61
第 40 図	土坑等出土石製品実測図 10 (その他、1/2)	62
第 41 図	土坑等出土石製品実測図 11 (その他、1/2)	63
第 42 図	調査風景スナップ	65

I. はじめに

一般国道496号線は、福岡県行橋市の国道201号線を基点とし、北部九州の霊峰英彦山の付近を通って大分県下毛郡山国町の国道212号線へ通ずる。福岡県側ではその多くの部分が二級河川祓川に沿って山間の集落を通ることから狭隘な部分が多く、以前から改良の必要性が叫ばれていた。この国道の大規模な改良工事は豊津町節丸地区の県営圃場整備事業に伴って開始された。圃場整備事業に伴って「穴開け」する部分に近い、祓川左岸の低段丘上で大規模な縄文時代後期の集落が、そして丘陵部に入って北垣古墳群が平成2・5年度に豊津町教育委員会によって発掘調査が実施され、それぞれ報告書はすでに刊行されている。

平成6年5月、福岡県行橋土木事務所から福岡県教育庁京築教育事務所に対し、当該年度工事箇所についての文化財の有無について照会がなされた。対象地は北垣古墳群とは小さな谷を挟んで南側に位置する標高100mほどの丘陵地で、谷部を除いた試掘対象地は約6,800㎡であった。それを受け、教育事務所担当者は同月に直ちに試掘調査を実施した。その結果、尾根線上はかなり削平されたようで遺構・遺物ともに確認できず、緩斜面で弥生土器および柱穴を検出したことから調査区を設定、発掘調査が必要である旨の回答を行った。実際の発掘調査は同年7月から開始した。その夏は非常な早魃となり、山頂の調査現場は遺構検出が困難で、発掘も埋土が硬く、加えて小型の袋状土坑が多くあったりと非常な困難を伴った。

この国道496号線改良工事の予定路線は中世豊前に大きな足跡を残した宇都宮氏の膝下にあった犀川町木井馬場地区の東山麓を縦断する。同氏関連の遺跡やこの羽熊遺跡よりさらに山間部に位置する周知の弥生遺跡（弓馬場遺跡）など、今後の調査も大いに期待される。

発掘調査、整理・報告書作成に係る関係者は以下の通りである。なお、平成10年度に県教育庁の大規模な機構改革がなされた。それ以前の「指導第二部文化課」が「総務部文化財保護課」となり、「文化財保護室」は廃止。「調査班」が「調査第一係」・「調査第二係」に分けられた。以下の記述では部・課・室・係の異動については触れない。

福岡県教育委員会	平成6年度	11年度
総 括		
教 育 長	光安 常喜	光安 常喜
指導第二部長	丸林 茂夫	
総 務 部 長		岩本 誠
文化財保護課長	松尾 正俊 (文化課長)	柳田 康雄
同 参 事	柳田 康雄 (兼文化財保護室長)	井上 裕弘
		橋口 達也 (兼課長技術補佐)
同 課 長 補 佐	清水 圭輔	角 伸幸 (兼管理係長)
同 参 事 補 佐	井上 裕弘 (兼室長補佐)	児玉 真一 (調査第一係長)
	橋口 達也 (兼調査班総括)	中間 研志
	馬田 弘稔	
	池辺 元明	

庶 務

文化課管理係長

柴田 恭郎

角 伸幸

同主任主事

高田 裕康

佐藤 雅二

調査・報告書作製

技術主査

飛野 博文 (京築教育事務所)

飛野 博文 (北筑後教育事務所)

整理担当

主任技師

重藤 輝行

主任技師

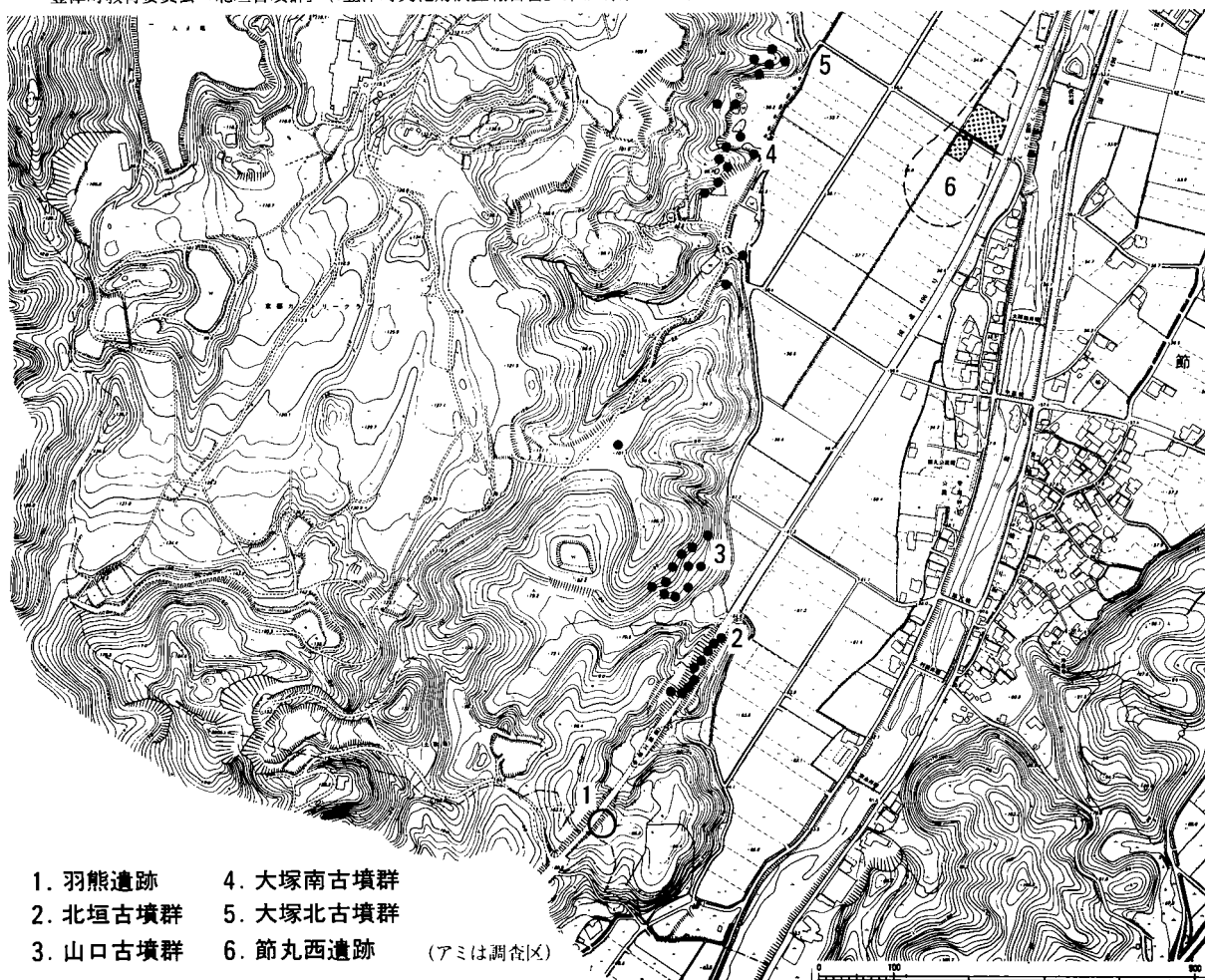
吉田 東明

なお、発掘調査から報告書刊行にいたる間には、行橋土木事務所、豊津町・同教育委員会、京築教育事務所・北筑後教育事務所、地元節丸区をはじめとする関係各位の御理解・御協力をえることが出来た。また、いうまでもなく、発掘調査・整理作業に携わっていただいた多くの方々の参加があつてはじめてなした事業でもある。殊に、炎天下の発掘作業に従事していただいた作業員には深く感謝する次第である。

註

1 豊津町教育委員会「豊前国府および節丸西遺跡」(『豊津町文化財調査報告書』第9集、1990)

豊津町教育委員会「北垣古墳群」(『豊津町文化財調査報告書』第14集、1995)



第1図 周辺地形図 (1/10,000)

II 位置と環境

福岡県京都郡豊津町は福岡県東部の二級河川祓川・今川に挟まれて位置する人口10,000人弱の農村といってよい町であるが、東九州の幹線道路である国道10号線バイパスが域内東部を縦断し、東九州自動車道のインターチェンジが計画されるなど、交通の拠点として変貌しつつある。

ここに報告する羽熊遺跡は、豊津町でも最南部、大字節丸と犀川町大字内垣に跨って広がる低丘陵上に位置するが、主要部が属する大字節丸の字名をとって遺跡名としたものである。

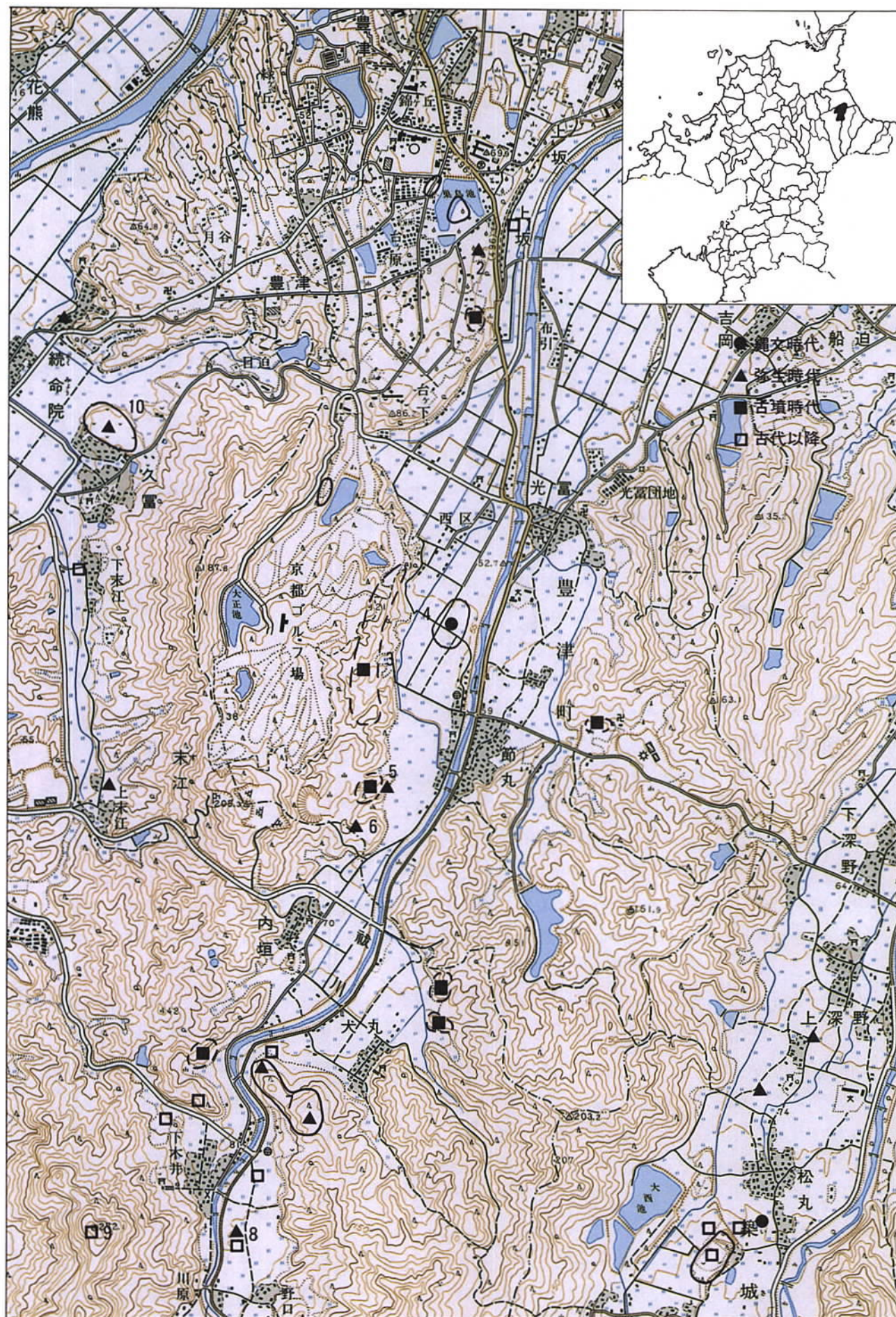
周辺の丘陵部には古墳群や中世山城が位置し、また眼下の水田地帯では大規模な縄文集落も発見されている。これらの遺跡を形成した人々の生活はいずれも祓川に大きく依存していたと思われる。祓川は英彦山に近い犀川町野峠付近を源流として山間部を北流し、この節丸付近までいくつかの小盆地を形成する。その後行橋市道場寺付近まで明瞭な段丘を形成し、流域に豊富な遺跡を育んできた。豊津・犀川両町では大規模圃場整備事業が終了し、流域の遺跡もほぼ把握されている。以下では地域の歴史的環境について簡単に記す。

流域で最古の遺物は豊津町川ノ上遺跡^{註1}で採集されたナイフ形石器である。また、行橋市鬼熊遺跡^{註2}でも同様の石器が数点出土するが、いずれもプライマリーな状況ではなかった。

縄文時代の集落としてはこの節丸地区の祓川にほど近い低段丘上に位置する節丸西遺跡^{註3}が調査された。3,000㎡ほどの調査区内で30軒前後の住居跡、パンケース300個に上る大量の出土遺物をみた。また、当地から10kmほど上流の犀川町上伊良原地区では、標高200mを越える狭隘な山間地で後期の集落跡と思われる遺跡が発見されていて、当時の生活圏が非常に広がったことを示している。そのほか、遺構を伴わない状況で早期以降の各時期の土器が随所から出土している。

地域最古の弥生時代の遺跡は海岸砂丘上に位置する長井遺跡^{註5}であるが、実体は不明のままである。近年、祓川下流域の辻垣地区の遺跡^{註6}でも板付Ⅰ式に並行する遺物が発見されたが、遺構は必ずしも明瞭ではない。その後、板付Ⅱ式の段階には微高地・段丘・低丘陵の各所に集落が拡散する。豊津町祓川流域の川の上・神手遺跡^{註7}・豊前国府推定地下層^{註8}（金築遺跡）、行橋市鬼熊遺跡、そして犀川町タカデ遺跡^{註9}・弓馬場遺跡などが知られる。タカデ遺跡は現在のところ前期の中では最も上流域に位置する遺跡で、無軸羽状文を主体とする壺や如意形口縁の甕、刻目突帯文・条痕文土器などが住居跡などに伴う。また、弓馬場遺跡は丘陵上に位置し、中心部は未調査であるが、丘陵裾の上屋敷遺跡^{註10}・古屋敷遺跡^{註11}などで同様の遺物が採集されていて内容の一端が窺える。中期の遺跡としては川の上遺跡下流の段丘上にある豊津町居屋敷遺跡^{註11}で土壌墓群が調査された。狭小な調査面積であったが、密度の高い遺跡である。瀬戸内海に面した福岡県東部では全般的に中期後半～後期中葉の遺跡が疎である。反面、後期後半以降は再び増加する。先に挙げたタカデ遺跡や川ノ上遺跡では集落、鏡鑑を有する墳墓も併せて調査されている。特に川ノ上遺跡では墳墓の変遷が辿れ、舶載鏡など7面の豊富な副葬品が発見されている。豊津町平遺跡^{註12}でも石棺墓から夔鳳鏡片・複数の鉄鏃を出土した。また、先の辻垣地区遺跡などでは古墳時代前期にかかる外来系土器なども出土し、瀬戸内海に面する当地の地理的位置を如実に示した。

祓川流域では先の川の上遺跡で初期の小規模墳が現れるが、中期には柱松古墳^{註13}が築かれる。正式な発掘調査を経たものではないが、その1基は墳丘直径28mの二段築成の円墳で、大型の箱式石棺を主体部としていたという。仿鏡2面、鉄製品（刀剣・蕨手刀子・針・附?）などを出土している。



- | | | | | |
|---------|----------|----------|----------|----------|
| 1. 上坂廃寺 | 2. 平遺跡 | 3. 節丸古墳群 | 4. 節丸西遺跡 | 5. 北垣古墳群 |
| 6. 羽熊遺跡 | 7. 弓馬場遺跡 | 8. タカデ遺跡 | 9. 神楽城 | 10. 辻垣遺跡 |

第2図 周辺遺跡分布地図 (1/25,000)

後期になると勢力が増したようで、辺長46×36m、高さ9.5mで三段築成、全面に葺石を施した甲塚方墳が造営される。周溝・周堤を含めた規模は72×63mにおよぶ。石室は一部破壊されるが巨石を用いた壮大なものであった。近接する彦徳甲塚古墳は二重に周溝を巡らせた直径55mほどの大型円墳である。また、これらに近接して八景山古墳群が位置し、北の丘陵には1,000基を越えるといわれる竹並横穴墓群が位置する。これらは大型古墳、散在中規模古墳、密集する小型古墳・横穴墓といった階層差を反映するように見える。

生産遺跡としては先の居屋敷遺跡で初期の須恵器窯跡1基が発見された。空白をおいて、築上郡築城町船迫窯跡群では6世紀後半以降に須恵器生産が始まり、その後瓦窯へと移行してやがて国分寺瓦窯として使用されるにいたる変遷が辿れ、工房跡も発見されて近年国指定史跡となった。

やがて先の古墳群の東の微高地に豊前国府が設置される。南に現存する豊前国分寺とともに発掘調査を経て、現在は広大な遺跡公園が整備されている。国分寺に先立つ白鳳期の寺院跡が町内上坂で発見されているが、詳細はなお不明である。県史跡に指定された巨大な塔心礎が水田下に埋もれている。

犀川町木井馬場の神楽城は平安時代の北部九州一円に勢力を張った大蔵一族の板井氏が豊前税所職として居城していたが、鎌倉時代になって没収、関東御家人の宇都宮氏に与えられた。律令制崩壊時、なおこの地域の地政学上の重要性が窺える出来事である。

註

- 1 福岡県教育委員会「徳永川ノ上遺跡」Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（『一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』第4・7・9集、1995・96・97）
- 2 行橋市教育委員会「鬼熊遺跡」（『行橋市文化財調査報告書』第27集、1999）
- 3 豊津町教育委員会「豊前国府および節丸西遺跡」（『豊津町文化財調査報告書』第9集、1990）
- 4 犀川町教育委員会が圃場整備事業に伴い発掘調査。
- 5 定村貴二・小田富士雄「福岡県長井遺跡の弥生土器」（『九州考古学』25・26号、1965）
- 6 福岡県教育委員会「辻垣ヲサマル遺跡」（『一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』第1集、1993）
福岡県教育委員会「辻垣畠田・長通遺跡」（『一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』第2集、1994）
- 7 福岡県教育委員会「神手遺跡」（『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』-6-、1992）
- 8 豊津町史編纂委員会『豊津町史 上巻』、1998
- 9 犀川町教育委員会「城井遺跡群」（『犀川町文化財調査報告書』第3集、1992）
- 10 犀川町教育委員会「城井遺跡群Ⅱ」（『犀川町文化財調査報告書』第4集、1994）
- 11 福岡県教育委員会「居屋敷遺跡」（『一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』第6集、1996）
- 12 児玉真一「福岡県京都府豊津町平遺跡発見の箱式石棺墓副葬品」（『九州考古学』第55号、1980）
- 13 豊津町教育委員会「幸木遺跡」1976に「総社古墳」として所収
- 14 豊津町教育委員会「甲塚方墳」（『豊津町文化財調査報告書』第13集、1994）
- 15 豊津町史編纂委員会『豊津町史 上巻』、1998
- 16 豊津町教育委員会「八景山山麓古墳群」（『豊津町文化財調査報告書』第21集、1999）
- 17 竹並遺跡調査会『竹並遺跡』、1979
- 18 築城町教育委員会「船迫窯跡群」（『築城町文化財調査報告書』第4集、1997）
築城町教育委員会「船迫窯跡群」（『築城町文化財調査報告書』第6集、1998）
- 19 豊津町教育委員会「豊前国府」（『豊津町文化財調査報告書』第3～10集、1985～93）
豊津町史編纂委員会『豊津町史 上巻』、1998
- 20 豊津町教育委員会「史跡豊前国分寺跡」（『豊津町文化財調査報告書』第16集、1995）
- 21 酒井仁夫・高橋章「豊前地方の8世紀代の軒瓦について」（『九州考古学』第59号、1984）



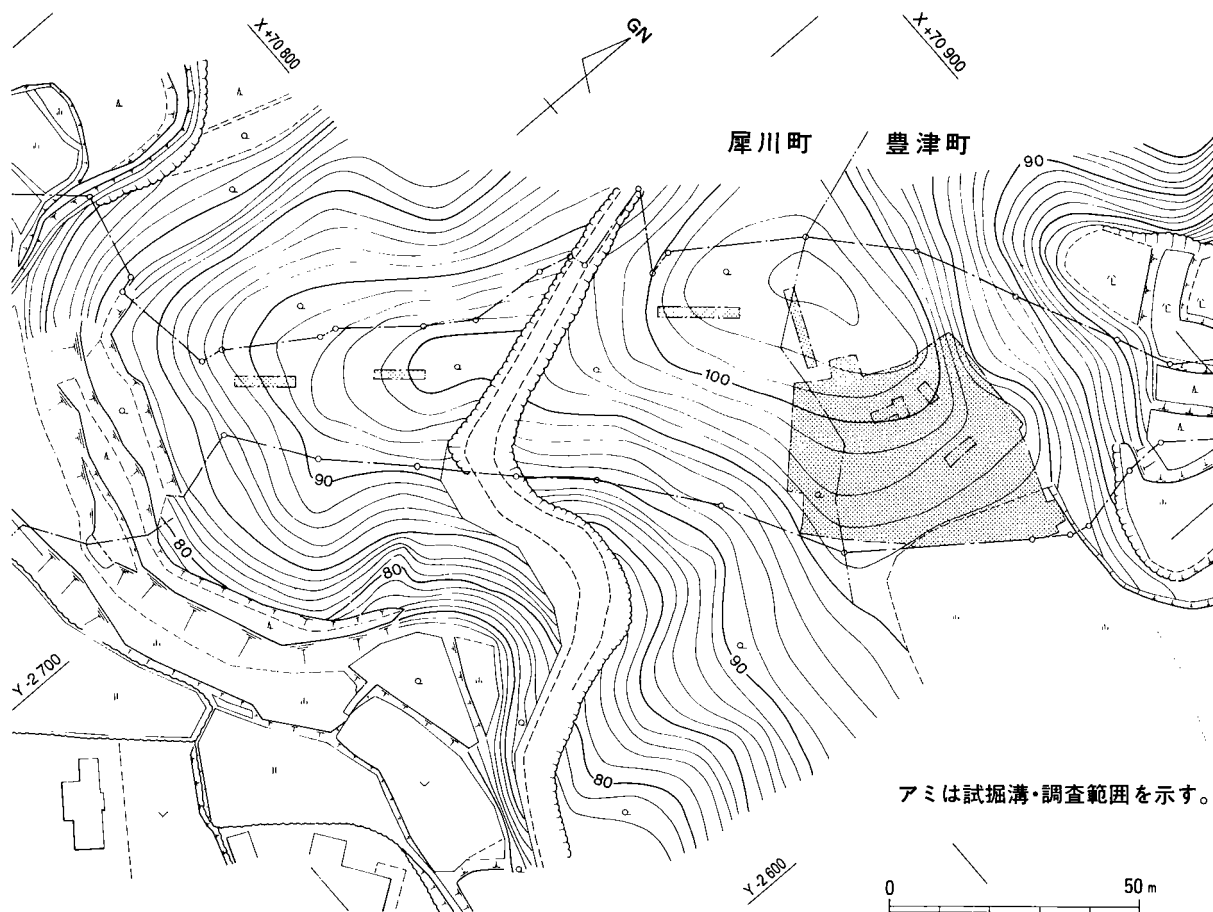
第3図 遺構配置図 (1/300)

Ⅲ 調査の内容

羽熊遺跡は犀川町中心部といわゆる木井（城井）谷を含む祓川流域を隔てる山塊の中、祓川に向かって張り出した支丘の頂部に位置する。周辺の水田との比高差は約30mほどを測り、斜面は非常な急傾斜となり、発掘時にも苦勞した。丘陵の南は末江峠^{すえ}によって開削され、南西部の城山（中世山城）は良質の花崗岩が採掘されるといい、現在は無惨な山容を晒す。また、遺跡の北西部一帯はゴルフ場として20数年以前に開発された。当時のこと、むろん発掘調査はなされていないが、地形から見てやはり弥生時代の遺跡が存在したことであろう。幸いに山麓の古墳群はかなりの部分が保存されている。また、本遺跡に先立って調査された北垣古墳群では後期古墳9基、小石室4基、そして弥生時代の方形周溝墓1基や石棺・石蓋土墳墓など14基が報告されている。

発掘調査は、試掘調査の所見として尾根線は開墾のために大きく削平されているとの判断から主として斜面部で実施した。ここも既に開墾されていて、荒れてはいるが畑の形状を残していた。開墾のため、遺構の分布には偏りがある。住居跡は調査区中、最も高位に集中し、柱穴は中段の東側に密集する。柱穴の中には非常に深く掘り込まれたものもあるが、密集することも災いして建物跡と確信を持てるものは見出せなかった。

以下で発掘調査の内容を記述するが、袋状竪穴を含む土坑は遺構・遺物をそれぞれにまとめて図示する。



第4図 地形測量図（1/1,500）

(1) 竪穴式住居跡

1号竪穴式住居跡 (図版3、第5図)

住居跡の中で最も南に位置し、大きく削平されるとともに、南半は里道(?)のために破壊される。掘り込みは北半の一部で確認できるが、深さは0.2mに満たない浅いもので、また北東部では幅・深さとも0.1mほどの浅い周壁溝と思われるものを確認している。以上から復原される平面規模は直径4.2m前後の小規模なものであり、平面形はほぼ円形を想定できる。

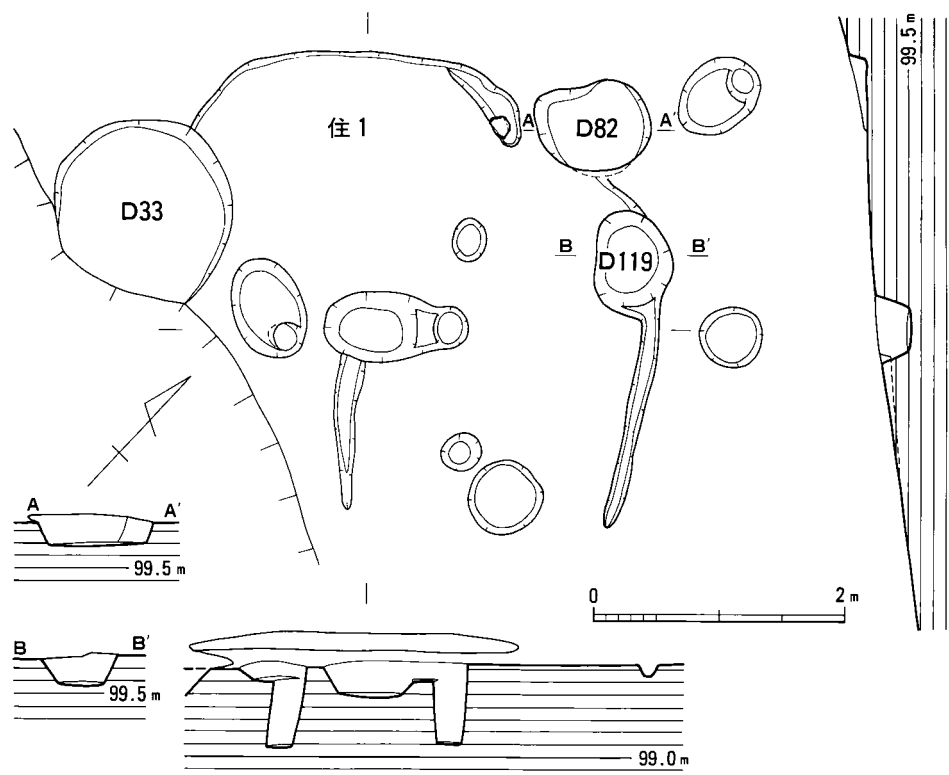
中央を想定できる位置に長軸約0.8m、短軸0.6m、深さ0.3mを測る楕円形の土坑が位置し、その長軸に並んで2基の柱穴が隣接する。両柱穴間の距離は心々でおよそ1.3mを測る。中央土坑の埋土の記録を怠っているが、そこから地形的に下位に向かう幅0.2m、深さ0.1mの小溝を1.2mの長さで確認している。なお、重複する位置にある土坑との先後関係は確認できていない。

出土遺物 (第9図1~4)

中央土坑およびその北に連続する柱穴から若干の土器が出土している。図示した底部は1がほぼ、他は完周する資料である。いずれも器表が荒れる。

2号竪穴式住居跡 (図版3、第6図)

1号住居跡の北、3mの距離を置いて位置する。弧状溝の存在から住居跡を想定したが、溝以外にそれと思わせる徴証は得られておらず、住居とするにはいささか不安がある。住居とすれば、2条の小溝の存在から、あるいは同一箇所建て替えが行われた可能性がある。



第5図 1号住居跡、82・119号土坑実測図 (1/60)

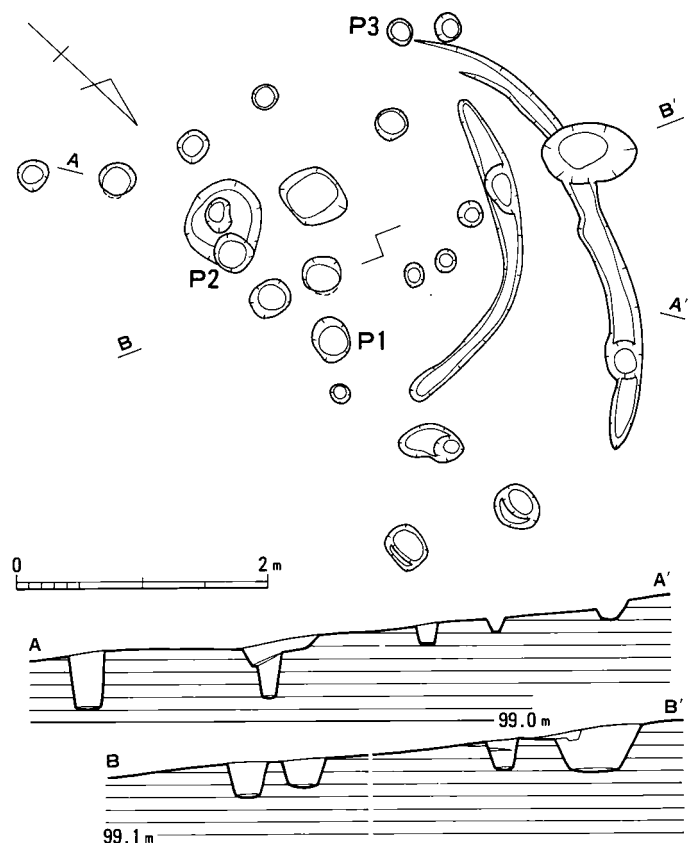
住居を想定する範囲に若干の柱穴や小型土坑が集中する傾向があるが、その配列も決して規則的とはいえないものである。

出土遺物

これも若干の土器が出土した。また、注記不十分であるが、「2号住居跡？」と記された石製品などがあり、ここで紹介する。

土器（図版7、第9図5・6） 5は内側の溝中から出土したもので、図示した部分はほぼ完周する。底部が上げ底となるが、厚みは薄い。よく焼けて赤く変色する。6はP2出土で、これも完周する小型品。

石製品（図版7、第10図1・2） 1は赤紫色凝灰質砂岩で、いわゆる「立岩」産石庖丁である。背は断面矩形に近いが、稜は丸みをもつ。2は灰黄色を呈する珪質層灰岩製の石斧片。風化が進む。



第6図 2号住居跡実測図（1/60）

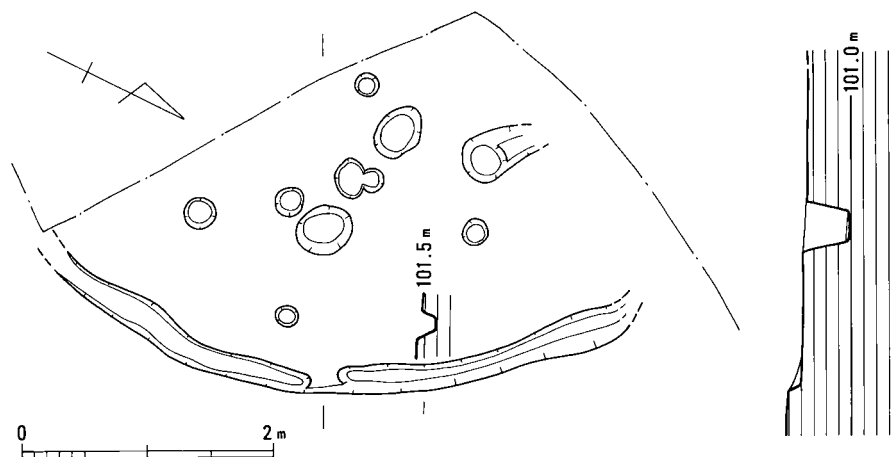
3号竪穴式住居跡（図版3、第7図）

1・2号住居跡の西、調査区中最も高位に位置する。住居跡全体のほぼ1/4を発掘した。西端部が最も残りがよく、深さは0.2mを測るが、東端部では周壁溝も削平されている。溝の規模は最大で幅0.3m、床面からの深さ0.05mほどの浅いものである。

埋土は灰褐色を呈する不明瞭なものであった。

出土遺物

土器（図版7、第9図7） 図示したものは甕の口縁部片で、図上反転したものである。いわゆる跳ね上げ口縁を有し、頸部直下に突帯を付す。磨滅が甚だしく、本来は口端部のつまみ上げ、突帯と



第7図 3号住居跡実測図（1/60）

もにより突出していたと思われる。

石製品（図版7、第10図5） 暗灰色粘板岩製の砥石。図上面は非常によく使用され、つるつるとなる。下面は一部に擦過痕が見えるが、断面で見るように弧状を呈していてほぼ未使用といえる。左右両側面は破面であるが、ここでも部分的に使用痕が見える。

4号竪穴式住居跡（図版3・4、第8図）

調査区北端近くにあつて、5号住居跡と重複する。埋土は灰黒色土を呈し、その堆積状況から見て、5号住居跡が先行するようである。

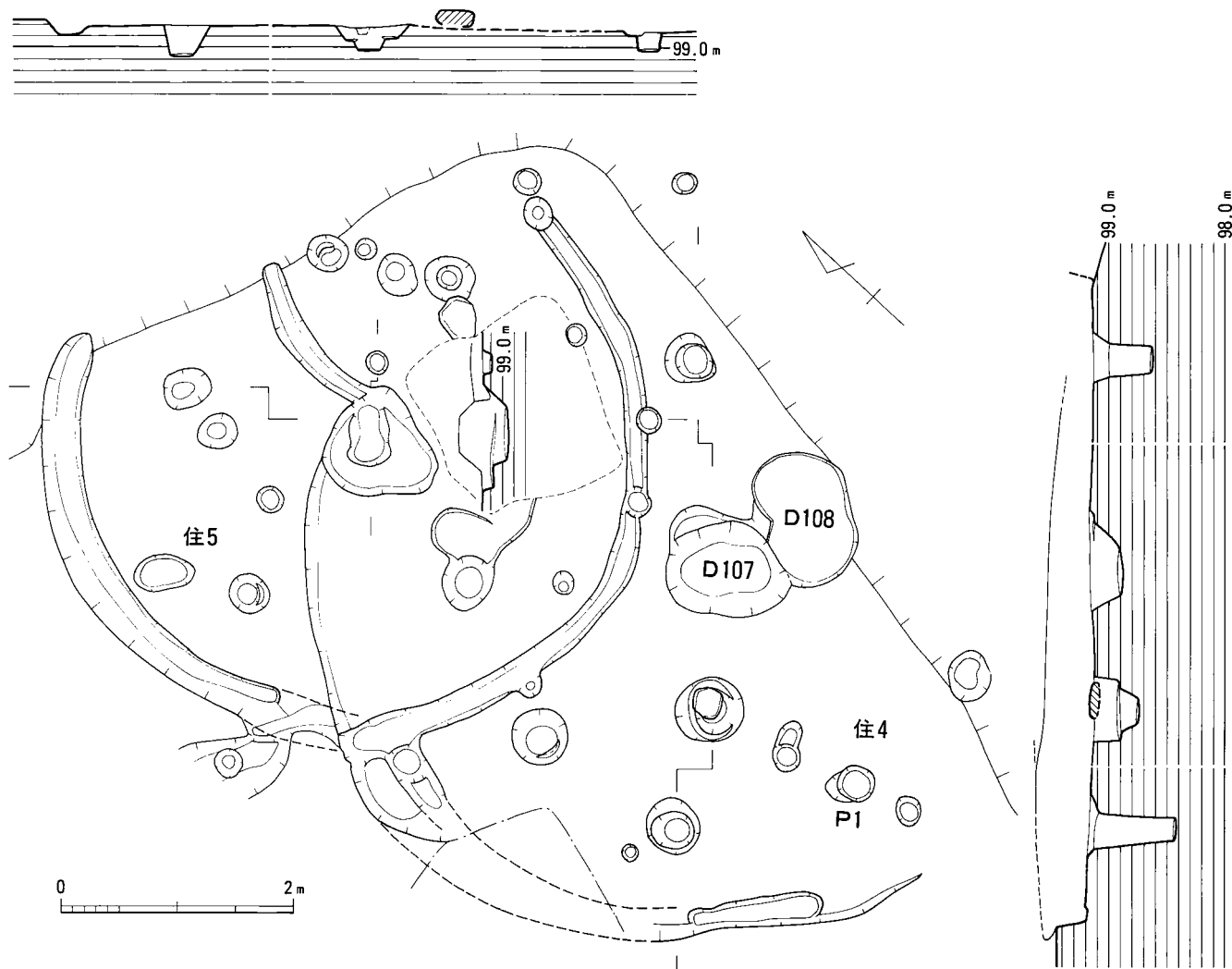
107号土坑としたものは断面形状が摺鉢状となり、炭・灰層といった顕著な状況は見られないが、炭小片を含んでいた。残存する壁体からほぼ3.5mと相近い距離をもって位置することから中央に設置された炉跡と見てよからう。その場合は、直径6mほどの規模を有していたとできる。

108号土坑とした遺構との先後は層位的には未確認であるが、出土土器から判断すれば土坑が先行する。

出土遺物

かなりの量の土器・石製品が出土したが、特に土器では細片化して図示できるものは少なかった。

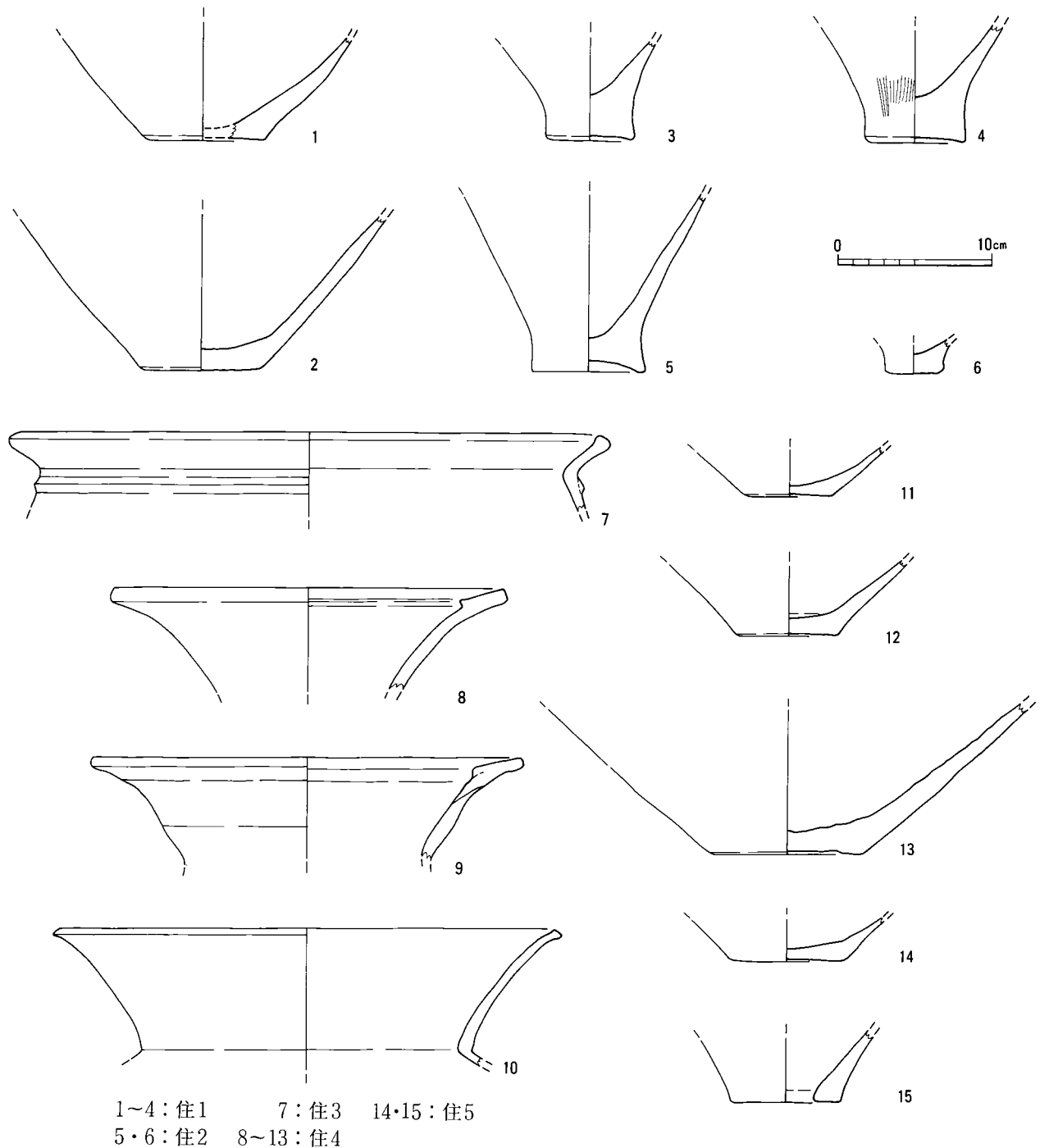
土器（図版7、第9図8～13） 10・12はP1、他は埋土中出土である。これもいずれも器表の残



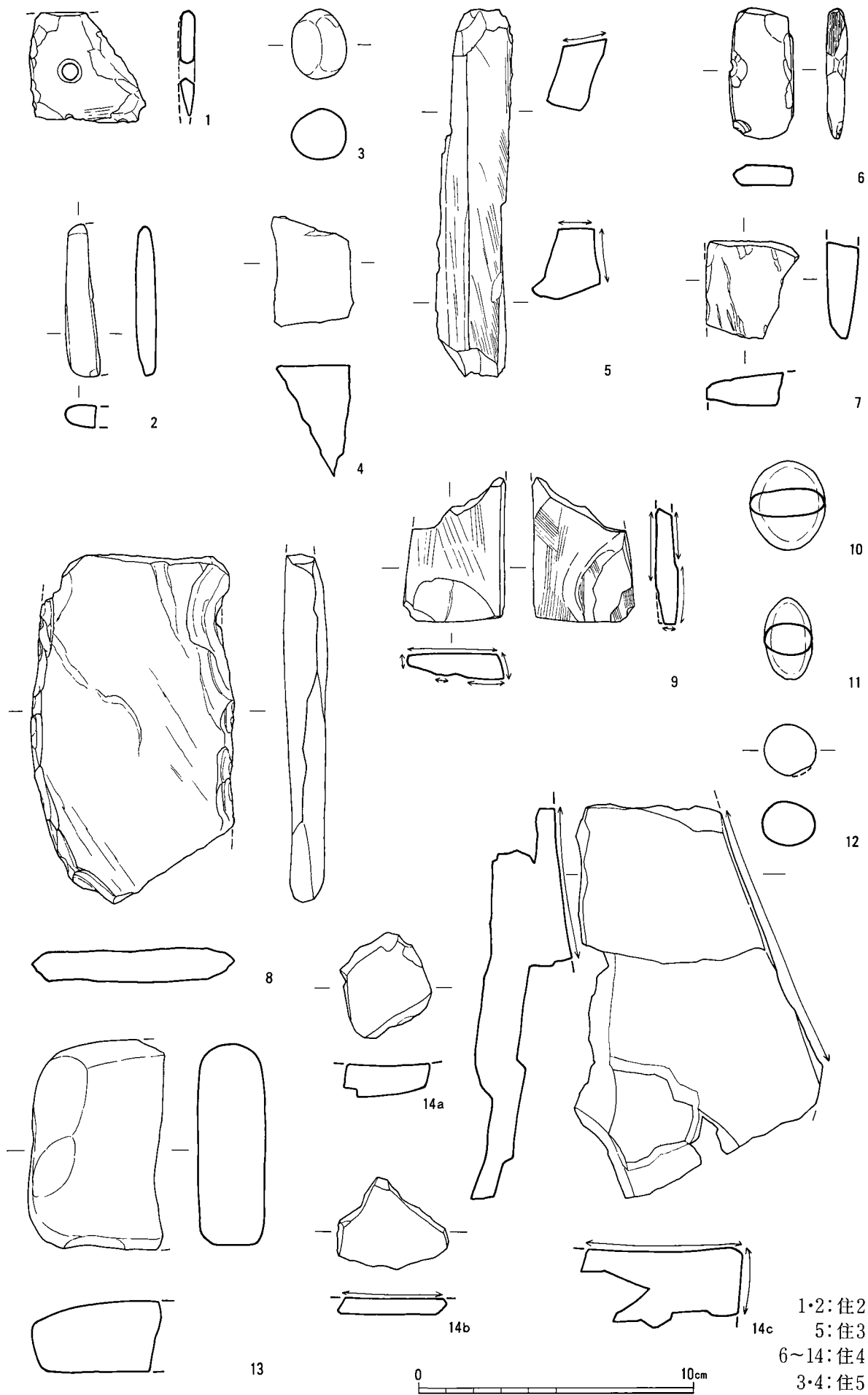
第8図 4・5号住居跡実測図（1/60）

りが悪い。8・9は鋤先状口縁の壺。8では外面のラインが頸部から口端部まで連続的で、肥厚部が内傾するとともに、硬直化した観がある。9は8に比して口縁部がやや発展的な形態を示す。しかし、なお内傾が著しい。10は広口壺で、端部が断面矩形に造られる。11～13は底部で、これらはいずれも完存に近い。

石製品（図版7、第10図6～14・第11図15・16） 6は赤紫色凝灰質砂岩製の石斧だが、図左縁辺に穿孔があって、石庖丁の再加工品であることが判る。7は図上面および左側面を丁寧に面取り

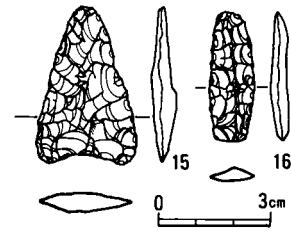


第9図 住居跡出土土器実測図（1/4）



第10図 住居跡出土石製品実測図1 (1/2)

研磨する。恐らく扁平磨製石斧片であろう。明灰緑色を呈する片岩製。8は緑色変岩製の扁平打製石斧。基部・刃部を欠く。9は黄白色～黄褐色を呈する細粒砂岩製の砥石。折損部を除く5面が使用されるが、図右側に図示した面は中央に大きな段があつて、あまり使用されていない。10は小豆色を呈する小石で、特段使用痕といったものは認められないが、全体にツルツルとなっている。土器の制作に用いられたものと思われるがあるいは投弾として使用されたものかも知れない。11も同様のツルツルの小石。灰黄色硬質の砂岩で、7.8gを測る。12は灰白色の風化安山岩の小石で、触るとざらつく。5.8g。13は灰白色多孔質の安山岩で、特に使用痕は見えないが、手触り感は滑らかである。14a～14cは茶褐色砂岩製の砥石で細片化して出土した。図上面および右側面のみが本来の面を留め、非常に滑らかとなる。



第11図 住居跡出土石製品
実測図2 (1/2)

第11図15は姫島産黒曜石を素材とする、最大長4.1cm、最大幅2.6cm、最大厚0.5cmを計る大型の製品である。両面を丁寧な押圧剥離で成形するが、先端部・基部端部は意識的に丸く仕上げられている。同16は最大長3.4cm、最大幅1.2cm、最大厚0.4cmを測る両面加工石器。基部は直線的に、先端部は丸く仕上げられる細身の製品である。両面調整尖頭削器として差し支えないと考えられる。これも石材は姫島産黒曜石。

5号竪穴式住居跡 (図版3・4、第8図)

上述したように4号住居跡と重複し、重複部分の埋土が4号住居跡のそれと同様であることから本住居跡が先行すると考えている。ちなみに本住居跡の埋土は赤褐色を呈していた。

これも中央部に二段の掘り込みを有する土坑が位置するが、炭・灰といった顕著な層は見られなかった。なお、ここでは中央土坑から住居跡外へ続くと思われる幅0.2～0.3m、深さ0.2mほどの溝が掘削されている。

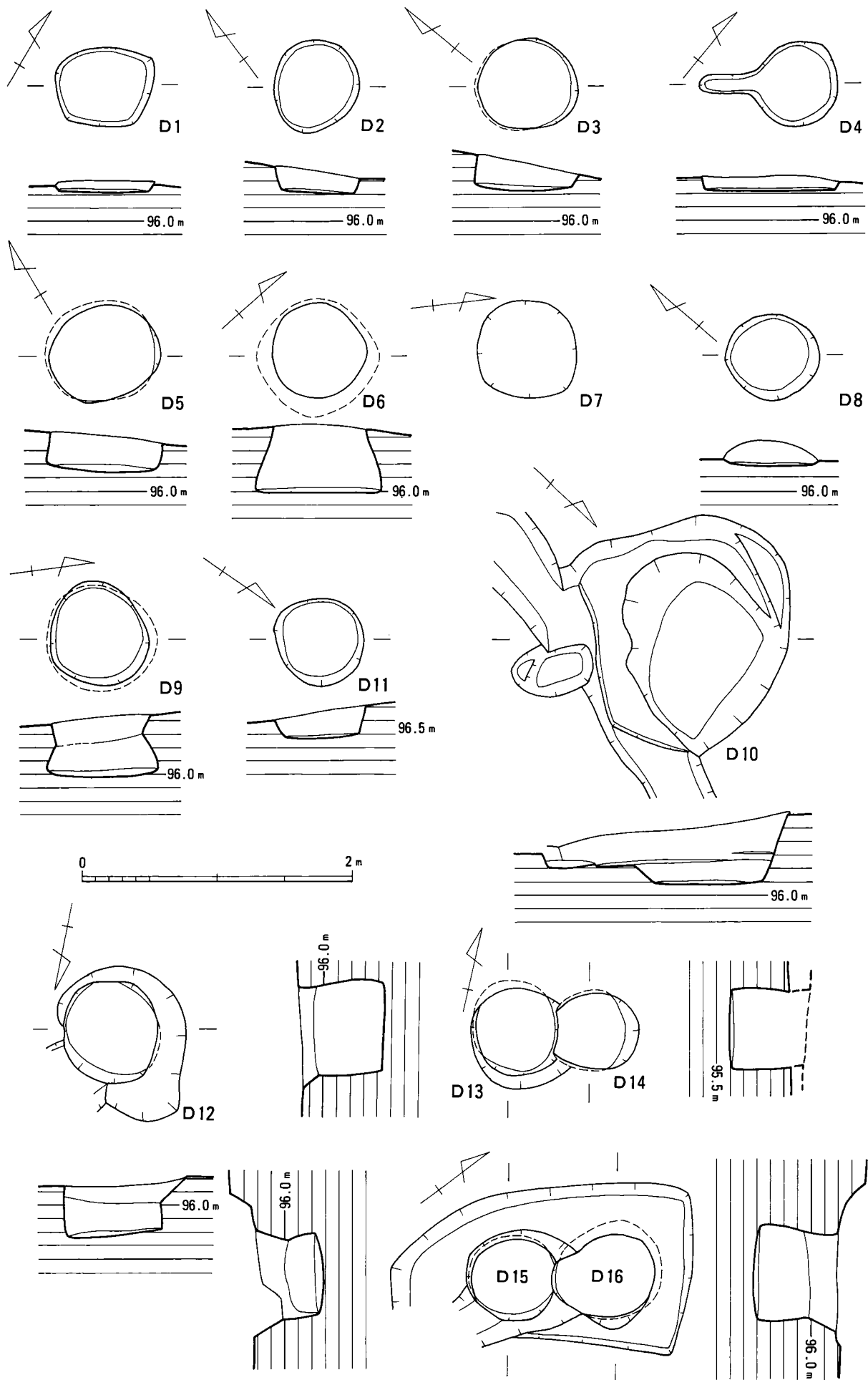
住居跡の外周にはいわゆる壁溝が掘削され、その外側で計測した住居跡の規模は直径5.2mほどとなる。支柱穴は円形に配され、6本に復原できる。

出土遺物

これも遺物は少なく、土器も図示にたえるものは乏しい。

土器 (第9図14・15) 14は図示部が完周する。風化が著しい。15はほぼ1/3が残存する。これも風化・磨滅が進み、判然としない部分があるが底に焼成前の穿孔がなされたようである。

石製品 (図版7、第10図3・4) 3は灰白色安山岩で、器表の風化が著しい。使用痕等は全く窺えないが、土器制作道具あるいは投弾のような使用法が考えられる。長さ2.5cm、直径2cm、重量は98gである。4は中央土坑から出土したもので、図上面の手触りはざらざらだが、平滑化している。石皿の残片であろう。



第12図 土坑実測図1 (1/40)

(2) 土 坑

今回の調査では大小様々な形態の土坑を多数検出した。中で注目すべきは、いわゆる貯蔵穴と俗称される袋状の土坑である。通常のそれは床面径、深さともに2～3mを測るのであるが、ここでは深さはともかく、床面径が1mに満たない小規模なものが一般的である。後世の削平を考慮しても通常の規模のものが存在しないことは間違いなく、この遺跡の一大特色となっている。

本来袋状を呈していたとしても、自然崩壊などの理由によって断面円筒形あるいは摺鉢状に近く形状を変えたものが想定されることもあり、ここでは特に袋状堅穴を区別せずに「土坑」として一括して取り扱う。

また、遺構の大小に拘わらず、遺物は全体に乏しい。出土遺物を図示しないあるいは遺物の有無を記さない遺構においても、遺物が皆無ではないことを予め記しておく。

1号土坑 (第12図)

調査区南隅に位置する。平面形は0.6×0.7mほどの歪な方形を呈し、深さは0.1m前後と浅い。

2号土坑 (第12図)

1号土坑の西に近接する。平面形は底径0.5～0.6mの扁円形を呈し、深さは約0.2mである。

出土遺物

土器 (第13図1) 甕の底部片で、図示部は完周する。外面は非常によく焼けて赤色に変化し、内面には焦げの跡がある。器表は荒れる。

3号土坑 (第12図)

2号土坑の北に隣接する。これも平面形は底径0.7m前後の円形、深さは最大で0.2mほどであった。断面形状は図で見るように袋状を呈する。

出土遺物

土器 (第13図2) これも甕の底部で、図示部は完周する。器表は荒れる。

4号土坑 (第12図)

1号土坑の北東、調査区境に近く位置する。円形土坑と小規模な溝状遺構が重複したものと思われる。円形部は底径0.5m強、深さ0.1m強である。

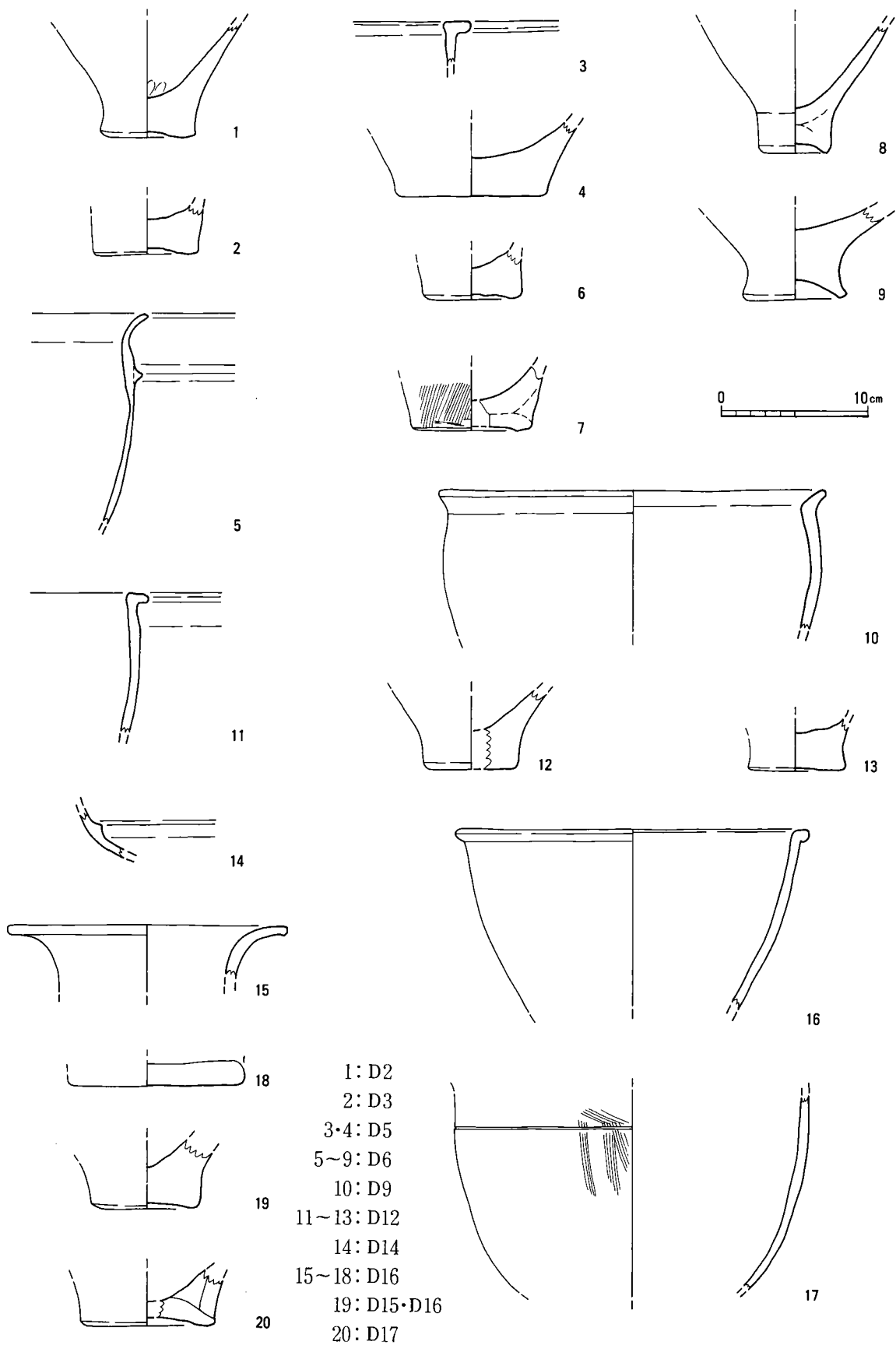
5号土坑 (第12図)

4号土坑の北に接する。平面形は底径0.7～0.8mの円形を呈し、深さは約0.3mを測る。断面形は袋状を呈する。

出土遺物

土器 (第13図3・4) 3は甕口縁部の小片。口端部外面に粘土紐を付して水平な面をつくる。器表は非常に荒れる。4は壺の底部で、図示部はほぼ完周する。これも器表が荒れる。

石製品 (図版11・12、第33図2・第34図1・第36図15) 第33図2は淡灰緑色を呈する磨製石斧



第13図 土坑出土土器実測図1 (1/4)

で、緑泥変岩製。基部・刃部の両端を欠く。仕上げの研磨は丁寧になされ、重量感がある。第34図1は灰黄色～灰褐色を呈する砂岩製砥石。図上下両面、左側面および下側面の上端角付近が非常によく使用され、図右側面の下半は未使用に近い。使用面は非常に滑らかで、若干の粗い条線を除いてほとんど痕跡が見えないほどに細かい。第36図15は灰黄色多孔質の円盤状を呈する安山岩。形状は整い、少なくとも片面は触ってツルツルと感ずるほど使用されている。

6号土坑（第12図）

5号土坑の北に近接する。床面形状は直径0.9mほどの円形となり、口径は0.7mで、明瞭に断面袋状となる。深さは最大で0.7m。

出土遺物

土器（図版8、第13図5～9） 5は如意形口縁部を有し、頸部下位に断面三角突帯を付すものだが、器表の大部分が剥離するため細部は不明である。6～8は底部が小さく上げ底となる。9は極度の上げ底となるもので、内面が丁寧に調整され、体部の開きが大きいことからあるいは通常の甕ではない可能性もある。

石製品（図版14、第41図5・7） 第41図5はサヌカイト製の剥片で、風化はすすんでいる。下縁部にのみ両面から細部調整を行う。図左右側縁の折れは古い時期ものである。同7はサヌカイト製剥片でさほど風化は進んでいない。板状の石核から剥離された不定形剥片を素材とし、上下両端は素材剥離後に「折断」されている。右側縁端部付近に微細剥離が連続する。

7号土坑（第12図）

6号土坑の西に近接する。口径は0.7m前後の円形を呈するが、個別の図化を失念していて細部は不明である。

8号土坑（第12図）

5号土坑の東に近接する。底径0.5～0.6mの円形平面を有し、深さは最大で0.2mに満たない。

9号土坑（第12図）

8号土坑の北にあって、床面は径0.8mの円形を呈する。上端が壊れているが、下半の断面形状は明らかな袋状を呈する。深さは最大で0.5m弱である。

出土遺物

土器（図版8、第13図10） 約1/4が残存する甕の口縁部片。口縁部は如意形といってもよいが、通常のものに比べて短い。また、体部に張りをもつ。

石製品（第36図16・第38図31） 第35図14は灰白色を呈する風化安山岩の残片だが、石質は緻密である。表面の風化が進み、使用痕は見えない。第37図31は灰黄色を呈する多孔質の風化安山岩。これも使用痕らしきは確認できない。

10号土坑（第12図）

9号土坑の北に近く位置する。耕作に伴うと思われる溝に切られるが、上端で長軸1.7m、短軸1.5mの規模を有し、深さは最大で0.5mを測る。ただ床面は不整形。

出土遺物

石製品（第36図14） 多孔質の風化安山岩の丸石。火熱を受けていて、赤褐色あるいは灰黒色に変色するが、それは破面までおよぶ。使用痕は見えない。

11号土坑（第12図）

9号土坑の北西に近接する。底径0.5～0.6mのやや歪な円形を呈し、深さは0.2m強である。

12号土坑（第12図）

8号土坑の東に近接する。底径0.7m弱の円形平面を有し、部分的にオーバーハングする様が窺える。深さは最大で0.4m強である。

出土遺物

土器（第13図11～13） 11の体部は張りが弱く、内彎して立ち上がる。口端部外面に粘土紐を付して水平な面を形成するもので、5号土坑出土品と同様である。拡張部はなお小さい。12・13は器表が荒れる底部。さほど厚底とはならない。

13号土坑（図版4、第12図）

12号土坑の北東に近接し、14号土坑と重複するが、明瞭な先後関係は確認できていない。底径0.6～0.7mの円形プランで、深さは0.6mほどである。部分的に断面袋状を呈する。

14号土坑（図版4、第12図）

13号土坑と重複する。床面は径0.6mほどの円形プランを有し、深さは0.45mを確認するが、遺構検出のために0.1m強を調査時に掘り下げている。これも断面袋状を呈する。

出土遺物

土器（第13図14） 三角突帯を付す壺の肩部小片。器表荒れて細部は不明。

15号土坑（第12図）

13・14号土坑の北に近接する。次に述べる16号土坑との周辺には黒色土の落ち込みがあり、それを掘り下げて2基の土坑が現れた。しかし、重複する16号土坑との先後は確認できずに終わった。底径0.6mほどの円形プランを有し、深さは0.7mを測る。断面は袋状を呈する。

16号土坑（第12図）

底径0.7～0.8mの円形プランを有し、深さは0.8m。これも断面は袋状を呈する。

出土遺物

土器（図版8、第13図15～18） 15はほぼ1/2が残存する、大きく開く壺の口縁。16はほぼ1/3が残存。砲弾形の体部を有し、口端部を外側へ巻き込むように造作する甕である。17は口縁部を欠くが、頸部下にシャープな篋描沈線を1条付すもの。よく焼けている。18は壺の底部であろう。円盤状に残る。

19は15・16号土坑のいずれに帰属するか不明であるがここで紹介する。完周する甕底部で、小さな上げ底となり、器表は荒れる。

石製品（図版10・11、第32図1・第34図3・第37図21・第41図9） 注記には「D15・16」とあっていずれの遺構から出土したか判然としないものであるが、ここで紹介する。第32図1は暗灰色を呈する凝灰質頁岩製石庖丁の残片。背は明瞭に面をなし、孔に向かって厚みを増す。孔の直上に弱い稜線が入るが、以下は刃部まで滑らかな曲線を描いている。図下面は中央付近が浅く窪んでいて、仕上げの研磨がおよばないままである。したがって、縦断面形は表裏非対称である。穿孔は丁寧になされる。第34図3は灰黄色砂岩製の砥石で、図上部および下面を欠失し、細片化する。残存する3面はよく使用され、ツルツルとなっている。非常に目が細かい。第37図21は青灰色の多孔質安山岩。触ると非常にザラザラするが、硬質である。

第41図9は安山岩製の礫器である、図のように左側縁を両面から加工して刃部を作り出す。刃部は一部つぶれており、使用痕と考えられる。

17号土坑

16号土坑の北東に近接する。土坑の名称を付したが、発掘の結果2基の柱穴が隣接するものとなり、欠番とする。

出土遺物（第13図20）

いずれの柱穴に伴うかは不明であるが、実測可能な土器があるので紹介する。約1/4が残存する底部片。底部外周が高台状をなし、上げ底となる。成形法は、体部から連続する部分に円板を添え、最後に内面を補強するようである。

18号土坑（第14図）

16号土坑の北に近接する。長軸1.2m、短軸0.6mの三角形に近い平面形を有し、深さは0.1m強である。

出土遺物

土器（図版8、第15図21・22） いずれも器表の磨滅が著しい小片である。21は肩部に4条の篋描沈線がかすかに見える。22は約1/4が残存する甕で、器表は荒れる。口縁部は如意形に外反し、頸部に近く篋描沈線を1条刻む。体部はやや張りをもち、頸部外面には指押さえ痕が明瞭に見える。

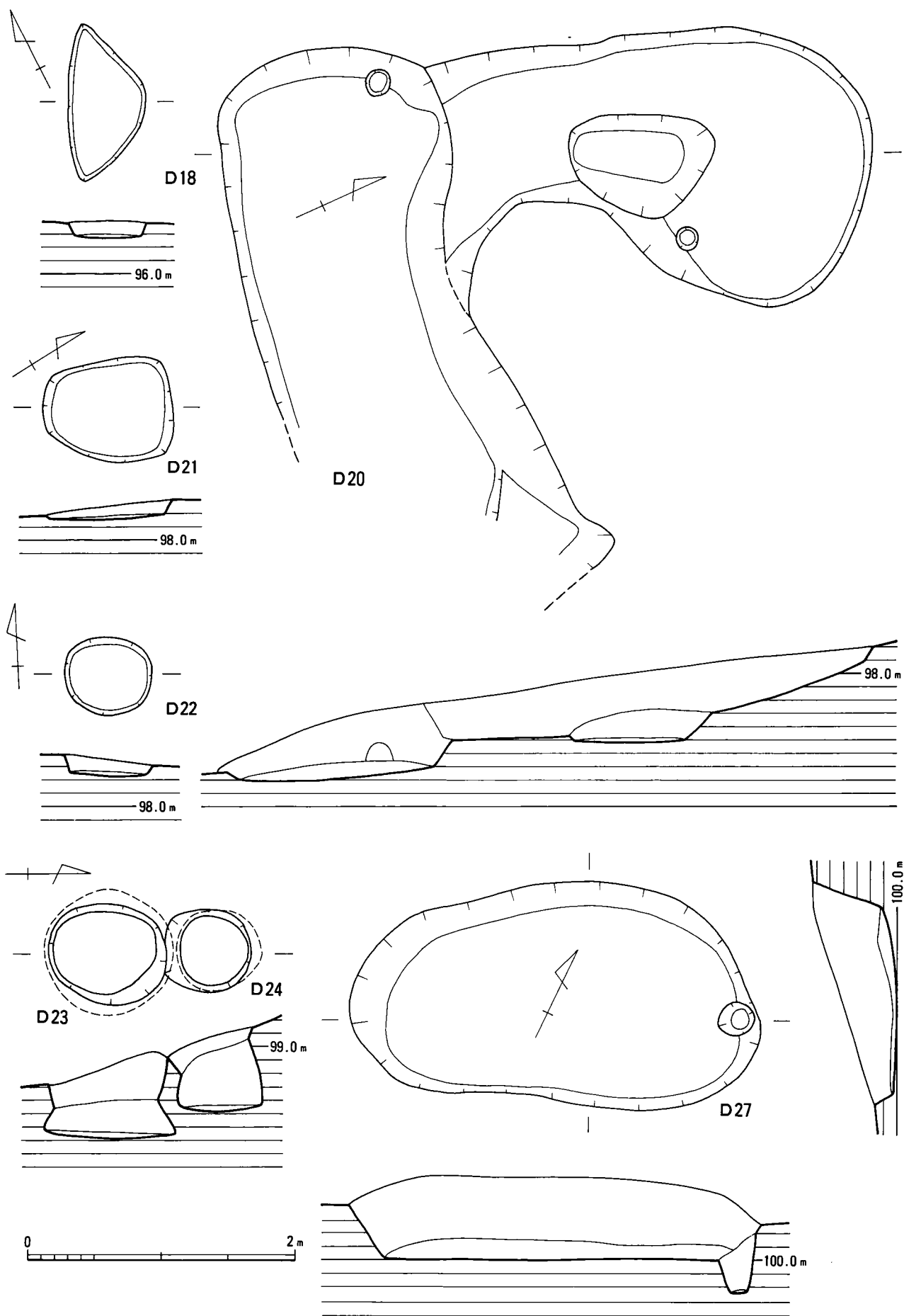
20号土坑（第14図）

調査区南辺に近く位置する大型の落ち込みで、完掘していないために土坑あるいは溝状遺構であるのか、性格を把握できていない。遺構は南北方向にのびる部分と東西方向に長くのびる部分からなり、本来は別個の遺構であった可能性もあるが未確認である。

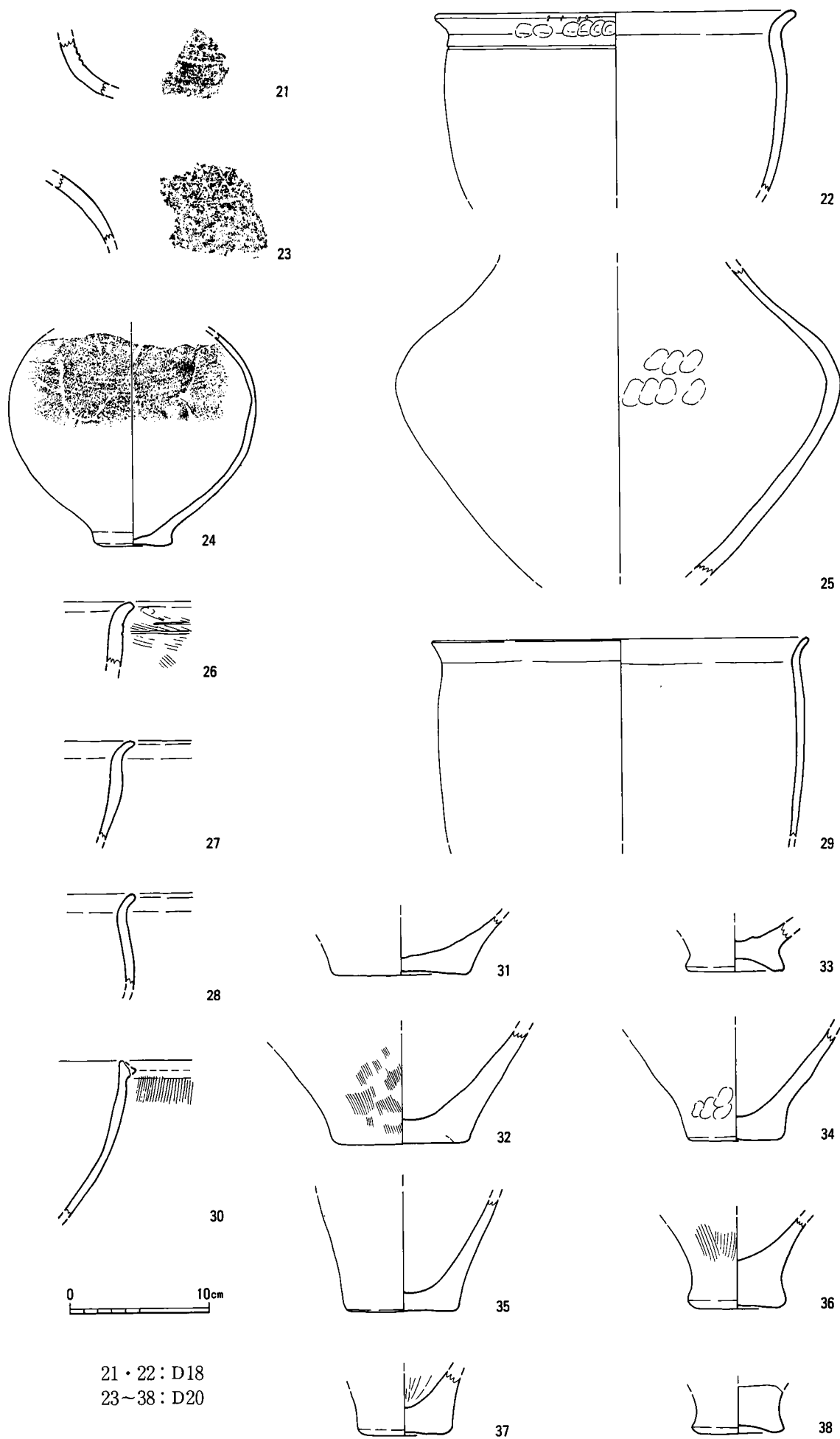
東西方向に走る部分の東壁では上層に茶褐色土がレンズ状に、下層に暗茶褐色土が堆積していたが、両者は大きく異なるものではなく、一気に埋没した観があった。

出土遺物

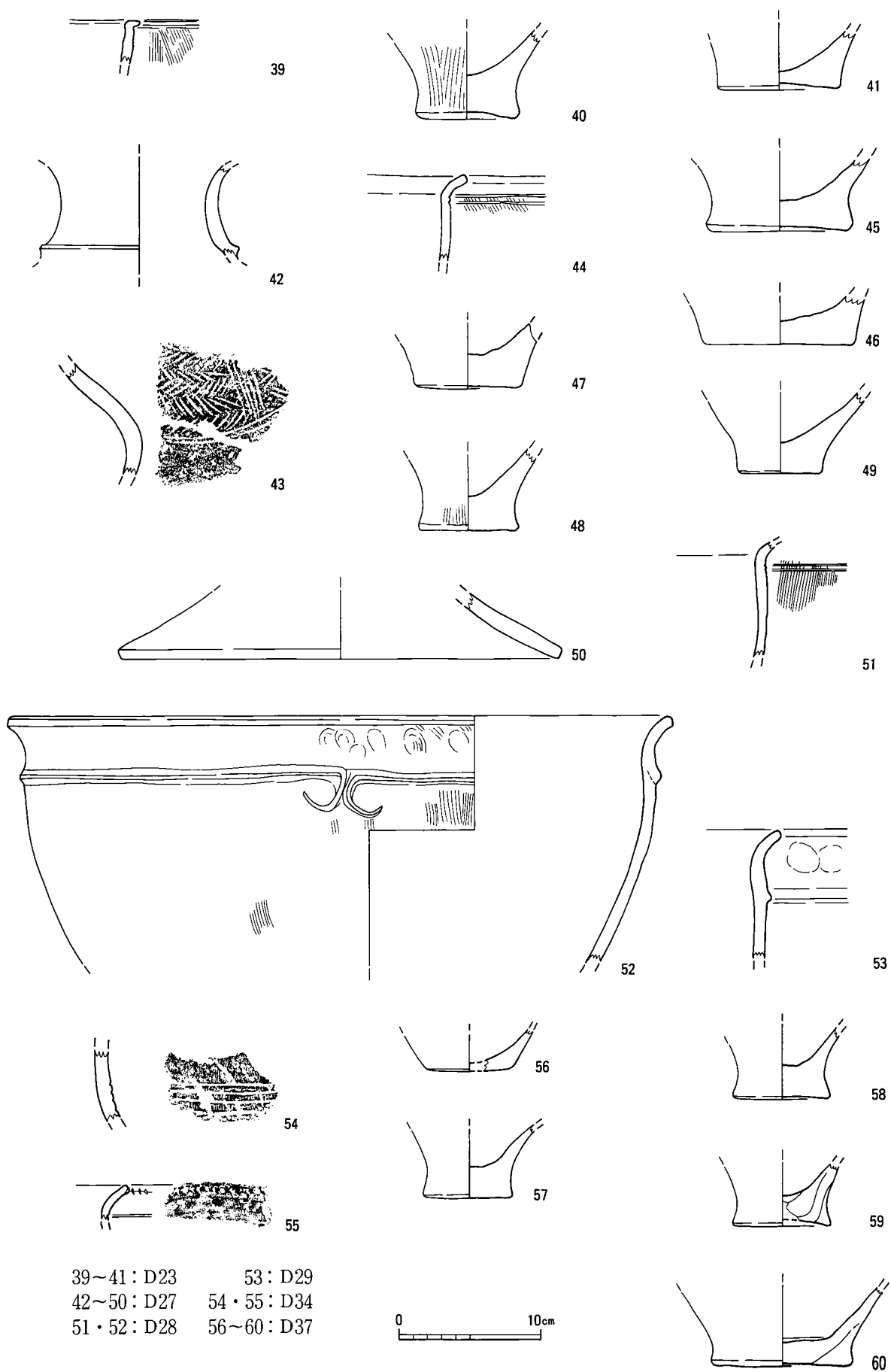
土器（図版8、第15図23～38） 23は体部上半の文様帯で、横方向に2条の篋描沈線があり、それを底辺とする正三角形に近い篋描文様を2段に配する。これも器表が非常に荒れる。24は縦方向にはば1/2が残存する。体部は球状をなし、器表はボロボロであるが、肩部に6条ほどの篋描沈線らしきがかすかに見える。25は体部が非常に張る壺の残片。肩部が内彎気味に立ち上がる点で先の2者と異なる。文様帯に界線は見えず、貝殻腹縁を使用した弧線文が配される。内外面の多くが篋



第14図 土坑実測図2 (1/40)



第15図 土坑出土土器実測図2 (1/4)



第16図 土坑出土土器実測図3 (1/4)

磨きで調整されるようで、外面下半には黒色顔料が塗布されたような痕跡も見える。

26～30は如意形口縁の口縁部片。26では篋描沈線が刻まれる。29は非常によく使用されて外面は赤く変色し、内面には焦げ付きが残る。30は体部から口縁部にかけて内彎して立ち上がり、口端部直下に断面三角突帯を付すもの。器表が磨滅していて、突帯上に刻みがあるかなどは不明である。底部の中、31・32は壺であろう。32に使用された刷毛目は非常に細密なものである。甕では35のような薄手のものから、36～38のような厚手のものまである。33は蓋の可能性もある。

石製品（図版10、第31図7・第34図2） 第31図7は漆黒色黒曜石製の石鏃で切先の一部を欠く。剥片を使用し、下面は同一剥離面のままで断面三角形をなす。細部調整は丁寧に行うが、稚拙な観がある。重量1.2 g。第34図2は灰黄色砂岩製の砥石片。表面の風化は進むが、図上面のみが使用される。

21号土坑（第14図）

20号土坑の北東に近接する。床面は長軸0.8m、短軸0.7mほどの不整長方形を呈し、深さ約0.1mの浅いものである。

22号土坑（第14図）

21号土坑に近接する。床面形状は0.5～0.6mの扁円形を呈し、深さは0.2mに満たない。

23号土坑（第14図）

20号土坑の北西に位置し、24号土坑と一部で重複するが、これも先後は未確認。底径0.9m強の円形プランを有し、深さは最大で0.85mを測る。中位以上は崩落するが、以下はよく原状を留めるようである。

出土遺物

土器（第16図39～41） 39は口端部に粘土紐を付して、小規模な平坦面をつくる小片。40・41は図示部が完周する。いずれも小さな上げ底となるが、40では外周が面をもち、高台状となる。40はやや厚底、41は薄手。

石製品（図版12・14、第35図7・第36図2・6・7・9・第38図32・第41図6） 第35図7は灰白色安山岩を使用する。石質は緻密な感があって、全体に滑らかな面となるがその一つの面に非常に研磨された部分が観察できる。第36図2は茶褐色を呈する投弾形の小石。45号土坑出土の丸石ほどの滑らかさはなく、本来的に窪みがあるようである。現状で重量は10.4 gを測る。同6は黄白色の風化安山岩の小石で、形状は不整。多孔質で顕著な使用痕は見えず、重量は23.3 gを測る。同7は淡青紫色を呈する風化の進んだ安山岩の小石で、これも形状は不整。重量は14.6 gで、表面は非常に脆い。同9は黄白色の風化安山岩の石で、触るとザラザラする。47.5 gを測る。第38図32は灰白色の風化安山岩で、形状・器面は整うが、風化が進行するなど使用痕は見えない。

第41図6はサヌカイト製の板状の剥片を素材する。図下端に細部調整を行うが、裏面には行っていない。また、右側縁上半は裏面でやはり部分的に細部調整を行う。

24号土坑 (第14図)

床面は直径0.6mの正円を呈し、深さは0.65m。これも上端を除き、袋状の断面形状をよく残す。

出土遺物

石製品 (図版10・12・13、第31図9・第32図4・5・第36図17・第39図33) 第31図9はサヌカイト製の打製石鏃片で、基部付近のみが残存する。細部調整は浅く、粗雑である。第32図4は淡灰色の凝灰質頁岩製の石庖丁と思われる残片。図下面は全面が剥離する。仕上げの研磨はごく丁寧。同5は赤紫色砂岩製。背は丸く、側縁では比較的明瞭に稜をもつが、刃部では滑らかな局面となる。図左側の孔は大部分が敲打で穿たれたようで、貫通部も正円を描かず、滑らかではない。ただ、図下面および右側の孔では敲打部が多いものの、部分的に研磨された様を呈する。第36図17は黄褐色多孔質の風化安山岩。使用痕は見えず、触ると非常にざらつく。重量は94.9 gを測る。第39図33は厚みがほぼ一定する灰黄色の安山岩。多孔質で特に使用痕は見えないが、全体に触るとツルツル感があり、磨れているようである。

27号土坑 (図版4、第14図)

調査区南西隅に位置する大型の土坑。平面形状は長円形を呈し、規模は上端で長軸3.1m、短軸1.7mを測る。長軸線上で床面はほぼ水平となり、短軸線上では緩く中窪みとなる。

なお、幅広となる西小口床面で小型の柱穴を検出している。土坑との先後関係を確認できていないが、仮に土坑と無関係に掘削されたものとするれば、柱穴の平面規模に比していささか深すぎるようにも感じる。本来的に土坑に伴うと考えた方が良さそうである。

埋土は赤褐色～黄褐色系の埋土がレンズ状に堆積していて、埋没は自然になされたようである。ただ、上層近くに炭を多く含む薄い層が観察された。

出土遺物

土器 (図版8、第16図42～50) 42は肩部に断面三角突帯を付す壺で、口頸部は大きくC字形を描く。43は肩部文様帯の小片で、篋描で無軸羽状文を刻むが、精美なものではない。

44は如意形口縁を有し、頸部に2条の篋描沈線を刻む。45・46は壺、47～49は甕であろう。47は接合面で剥がれる。小さく上げ底となるものもあるが、概ね薄手である。ただ、48のように底部側縁がくびれるものは新しい要素である。

50は蓋として図示したが、やや不安がある。1/5が残存する。

石製品 (図版11・13・14、第33図4・第37図22・第40図38・第41図1) 第33図4は濃い灰緑色を呈する緑泥変岩製の扁平打製石斧片。図上面では大きな剥離痕が見えるが、下面では細部調整がほとんど見えず、非常に粗雑な観を受ける。第37図22は灰白色の緻密な安山岩。全体に滑らかとなるが、明瞭な使用痕は見えない。図下端の小口面があるいは使用した痕跡かも知れない。第40図38は淡黄緑色の風化安山岩で、石質は多孔質。器面は滑らかであるが、触るととてもざらつく。また、図下面は破面で、無数の敲打したような凹凸が見られるが、意図的なものとの確信はない。

第41図1は偏平楕円礫を素材とする礫器である。自然面は風化が進み黄白色だが、素材剥離面をみる限りは透明感のある茶褐色である。下端は、使用によりかなりつぶれている。

28号土坑（図版5、第17図）

27号土坑の北西に近接する。床面は直径0.55mのほぼ正円を呈し、深さは最大で0.2m余である。

出土遺物

土器（図版8、第16図51・52） 51は口端部を欠くが、如意形口縁部を有し、頸部に2条の篋描沈線を刻む。52は大型の鉢で、1/4強が残存する。口縁部は如意形を呈し、頸部下位に断面三角突帯を付すが、その一部が図のように釣り針状となる。結び目を表現したものであろうか。往々にして目にする形状である。なお、体部内面は上半で横方向の、下半で縦方向優位の篋磨きで処理するように、丁寧に造られた観がある。

29号土坑（図版5、第17図）

28号土坑の北に近接する。口径0.6m、底径0.8m、深さ0.6mで、断面形は袋状を呈する。

出土遺物

土器（第16図53） 甕の口縁部小片。口縁部は如意形を呈するが、反転が弱く、短い。なお、端部に面をもつ。頸部下方に断面三角突帯を付す。頸部外面に指頭痕が見えるが、体部内面は篋磨きで仕上げるようである。突帯以下は器表が荒れる。

31号土坑

27号土坑の東に位置するが、発掘の結果明確な遺構ではなく、シミ状の落ち込みと判断したために図示していない。

出土遺物

石製品（図版13、第36図8・第39図37） 第36図8は風化した白色安山岩の小石で、形状は不整。これも明瞭な使用痕は見えず、手で触るとザラザラするが、図示した面の中央付近で一部滑らかとなる部分がある。重量は13.7 g。第39図37は淡灰色多孔質の安山岩。わずかであるが部分的に磨られた痕跡がある。

32号土坑（第17図）

27号土坑の東にあって、里道に切られる。口径約0.5m、深さ約0.1mの小規模な遺構である。

33号土坑（第17図）

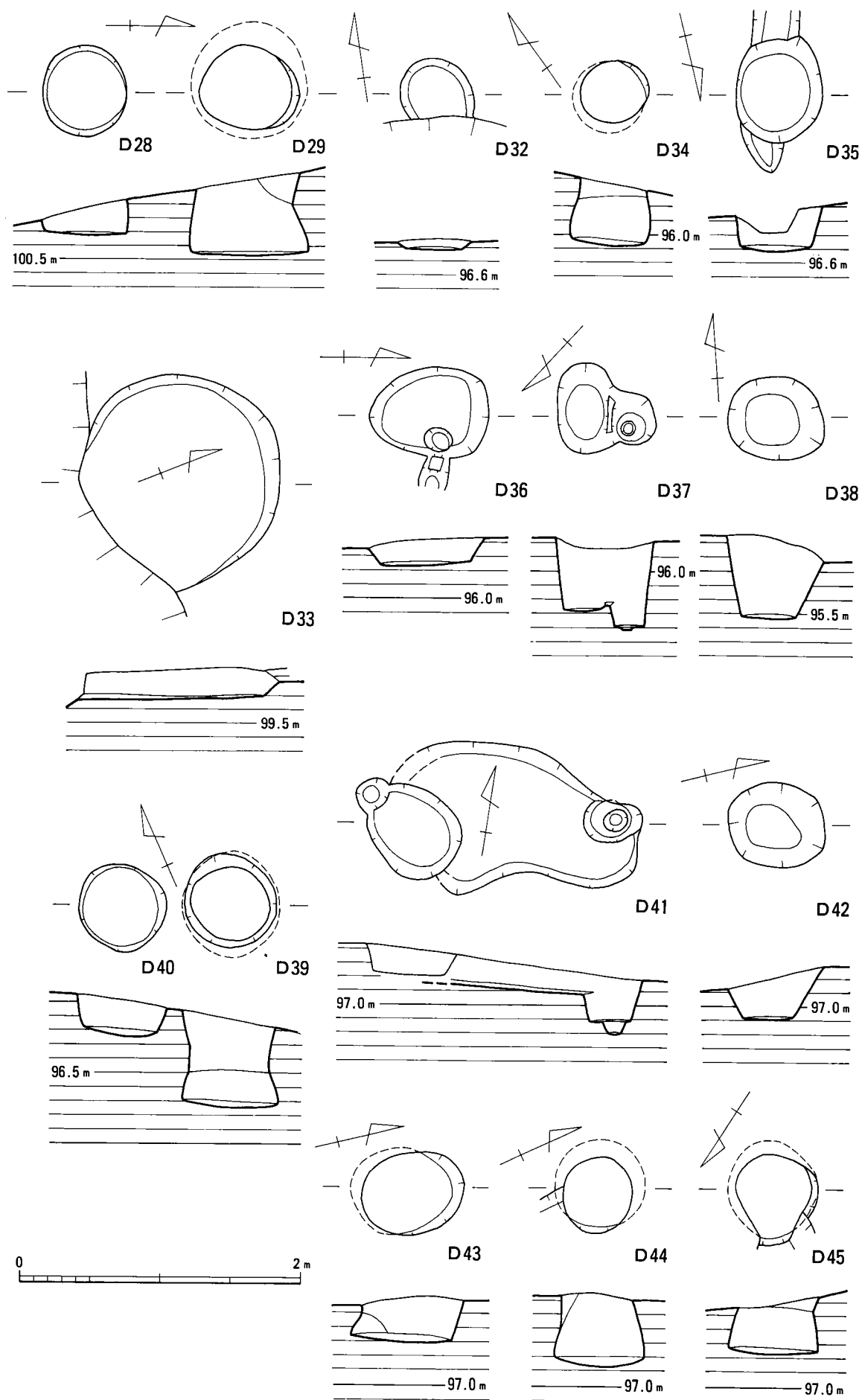
32号土坑の東に位置し、1号住居跡と重複する。また、里道に一部を切られる。底径1.3～1.4mを測り、平面形は円形を呈する。深さは最大で0.2mを測るに過ぎない。

34号土坑（第17図）

18号土坑の北に隣接する。口径0.45m、底径0.5m、深さ0.5mの小型土坑であるが、断面形は典型的な袋状を呈する。

出土遺物

土器（第16図54・55） いずれも小片。54は4条の篋描沈線が残存する壺の頸部片。地に縦刷毛がよく見える。55は口端部下位に刻みを付す如意形口縁部片。下端に篋描沈線がわずかに見える。



第17図 土坑実測図3 (1/40)

35号土坑 (第17図)

34号土坑の北、6mほどに位置する。平面形はやや長円となるが、底径0.5～0.55m、深さ0.3mを測る。

36号土坑 (第17図)

34号土坑の北東5mほどに位置する。床面規模で長軸0.6m、短軸0.5mの長円形に近い平面を有し、深さは0.2mほどである。

出土遺物

石製品 (図版12、第36図3) 全長4cm、幅2cm、厚さ1cmの暗褐色を呈する砂岩の小石。重量は13.3gを測る。全体に非常に滑らかで、ツルツルとなる。

37号土坑 (第17図)

36号土坑の南東に近接する。底径0.3～0.5m、深さ0.5mほどを測るが、柱穴とした方が適当であるかも知れない。

出土遺物

土器 (第16図56～60) 56は中期須玖式の底部片。57～60はいずれもさして厚底ではないが、底部側縁が強くくびれ、内面も平底を意識するように造られる。60は大型の甕であろうか。

38号土坑 (第17図)

37号土坑の東に隣接する。底径0.4m、深さ0.6mほどの規模で、平面形は円形を呈する。

出土遺物

土器 (第18図61) 小さく上げ底となり、底部側縁が強くくびれる底部。

39号土坑 (第17図)

36号土坑の北約10mに位置する。底径0.7m、深さ0.7mを測る。多くの部分が崩壊するが、床面付近はよく袋状の形状を保つ。

出土遺物

土器 (第18図62～64) 62・64は底部側縁が強くくびれるもの。62は約1/4の残片で、内面はほぼ剥落する。63は先の2者に比べて側縁のくびれがほとんどない前期的な底部である。

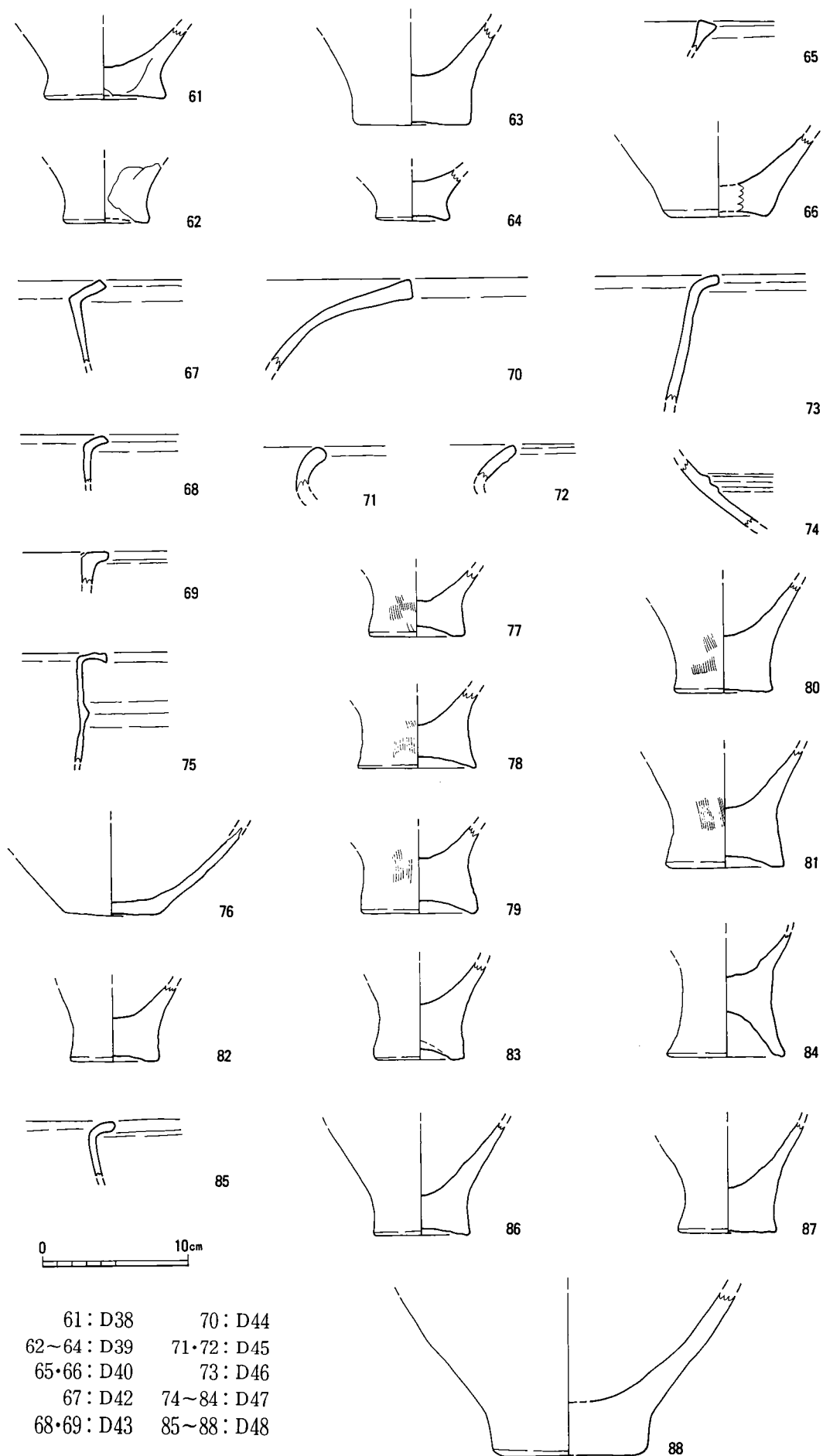
石製品 (図版10・12、第31図5・第35図1・第36図13) 第31図5は磨製石鏃片。基部はシャープに面取りされ、図左側縁は刃部となる。厚さは最大で2mm。灰黄色細粒砂岩製。第35図1は灰褐色風化安山岩を用いた凹石で、使用の痕跡はごくわずかである。第36図13は灰白色の風化安山岩の小石で、材質は緻密な感がある。表面は風化が進み、触るとザラザラするが、器面は整う。重量は124.8g。

40号土坑 (第17図)

39号土坑に近接する。床面0.5mほどの円形プランとなり、深さは0.3mほどである。

出土遺物

土器 (第18図65・66) 65は口端部が断面三角形になる特異な土器。器表が非常に荒れる。



第18図 土坑出土土器実測図4 (1/4)

66は前期的な底部で、器表が荒れるが外面は篋磨きのようである。

41号土坑（第17図）

40号土坑の西に位置する不整形土坑。床面は長軸1.6m、短軸0.8m前後を測る。深さは最大で0.2mほどである。

42号土坑（第17図）

41号土坑の北に近接する。底は直径0.3mほどの円形が想定され、深さは0.4mほどである。

出土遺物

土器（図版9、第18図67） いわゆる跳ね上げ口縁の甕の小片。口縁部は比較的明瞭にく字形を呈し、磨滅のために図では顕著に表れていないが、口端部内面が本来はより強く上方に摘み上げられていた筈である。

43号土坑（第17図）

42号土坑の西に位置する。床面は直径0.6～0.7mの長円形を呈し、深さは0.3m強である。南半ではよく袋状の形状を保つ。

出土遺物

土器（第18図68・69） いずれも小片。68はく字形に外折するが、口端部が小さく垂下する。69は口端部を外方に拡張して平坦な面を形成するが、なお未発達である。

44号土坑（第17図）

43号土坑の北に近接する。口径0.5m、底径0.6m、深さ0.5m強の規模で、よく旧状を保つ。

出土遺物

土器（図版9、第18図70） 口縁が大きく開く広口壺の小片で、口端部が肥厚気味である。器表は非常に荒れる。

石製品（図版11、第33図3・第37図26） 第33図3は淡灰緑色を呈する凝灰質安山岩製の磨製石斧。これも基部・刃部を欠く。表面は微少な凹凸が全面に現れ、重量感がある。第37図26は淡灰色の緻密な安山岩で、上部の欠損は古い。表面は比較的滑らかであるが、明らかな使用痕は見えない。

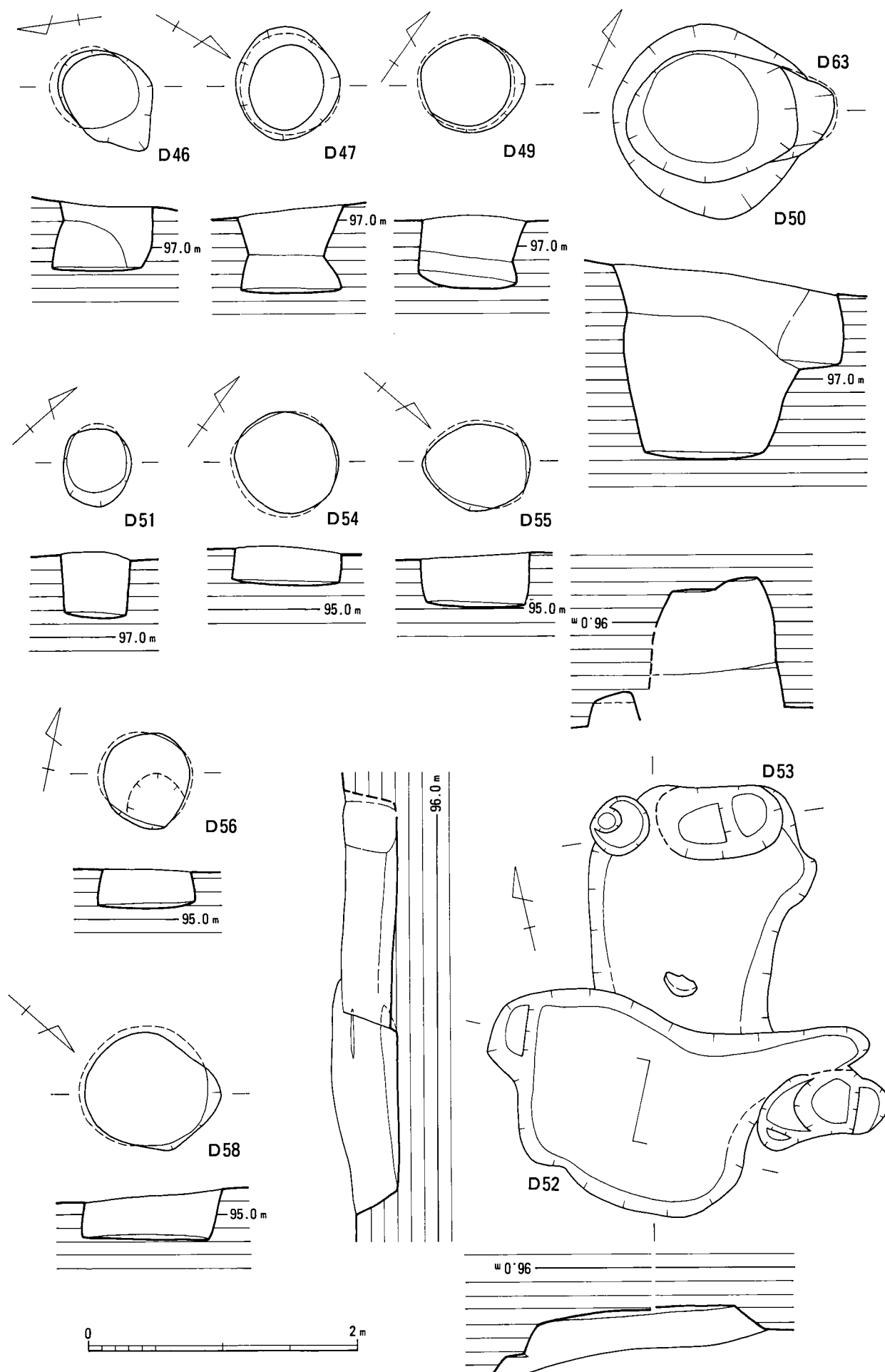
45号土坑（第17図）

44号土坑の北に位置する。これも上端付近を除きよく旧状を保っている。底径0.7m前後、深さ0.4mを測る。

出土遺物

土器（第18図71・72） 71は前期的な壺の小片。口縁部・頸部が明瞭な段階のものであろう。72は甕の小片で、刻み等は見えない。

石製品（図版12、第36図1） 灰黄色を呈する緻密な丸石で、砂岩と思われる。全体に非常にツルツルとなる。このような小石が遺跡全体で数10点ほどが出土しており、かなり一般的なものであったと思われる。確たる根拠はないが、土器製作時の篋磨き原体あるいは投弾として使用したもの



第19図 土坑実測図4 (1/40)

であろう。重量は5.0 g。

46号土坑（第19図）

44号土坑の東に位置する。底径0.6～0.7m、深さ0.5mの規模で、北半部ではよく袋状の形状を保つ。

出土遺物

土器（図版9、第18図73） 甕の口縁部小片で、傾きにはいささか自信がない。装飾のない如意形口縁で、体部の張りも弱い。器表が荒れるが、内面の調整は丁寧になされる。

石製品（図版10、第32図3） 灰白色を呈する砂岩製の石庖丁片。全体に破損が著しいが、図右端は原形に近いと思われる。器壁が厚いが、仕上げの研磨はごく丁寧である。

47号土坑（第19図）

41号土坑の南5mほどに位置する。底径0.7mほど、深さは0.6mが残存する。上半は崩落するが、下半ではよく形状を保つ。

出土遺物

土器（図版9、第18図74～84） 74は肩部に断面三角突帯を2条連続する壺の小片で、器表が非常に荒れる。76も壺の底部であろう。薄手で立ち上がりが浅い、須玖式に属するもの。

75は如意形というよりはL字形に外折する甕の口縁部小片で、器表剥離のために図では不明瞭であるが、口端部は上方へ摘まれる。頸部からやや下がった位置に断面三角突帯を付す。77～83は強弱があるもののいずれも底部外縁をくびれさせ、多くが厚手・上げ底となる。84は極度の上げ底とする特異な土器である。

石製品（図版12・14、第36図12・19・第41図8） 第36図12は多孔質の風化安山岩の小石で、灰黄色を呈する。明瞭な使用痕は見え、触るとザラザラする。重量は58.3 g。同19も黄褐色安山岩で、風化はあまり進んでいない。緻密な感があり、全体に滑らかであるが使用痕は見えない。第41図8はサヌカイト製のエンドスクレイパー。不定形剥片の一边のみに両面から細部調整を行う。風化はすすんでいる。

48号土坑

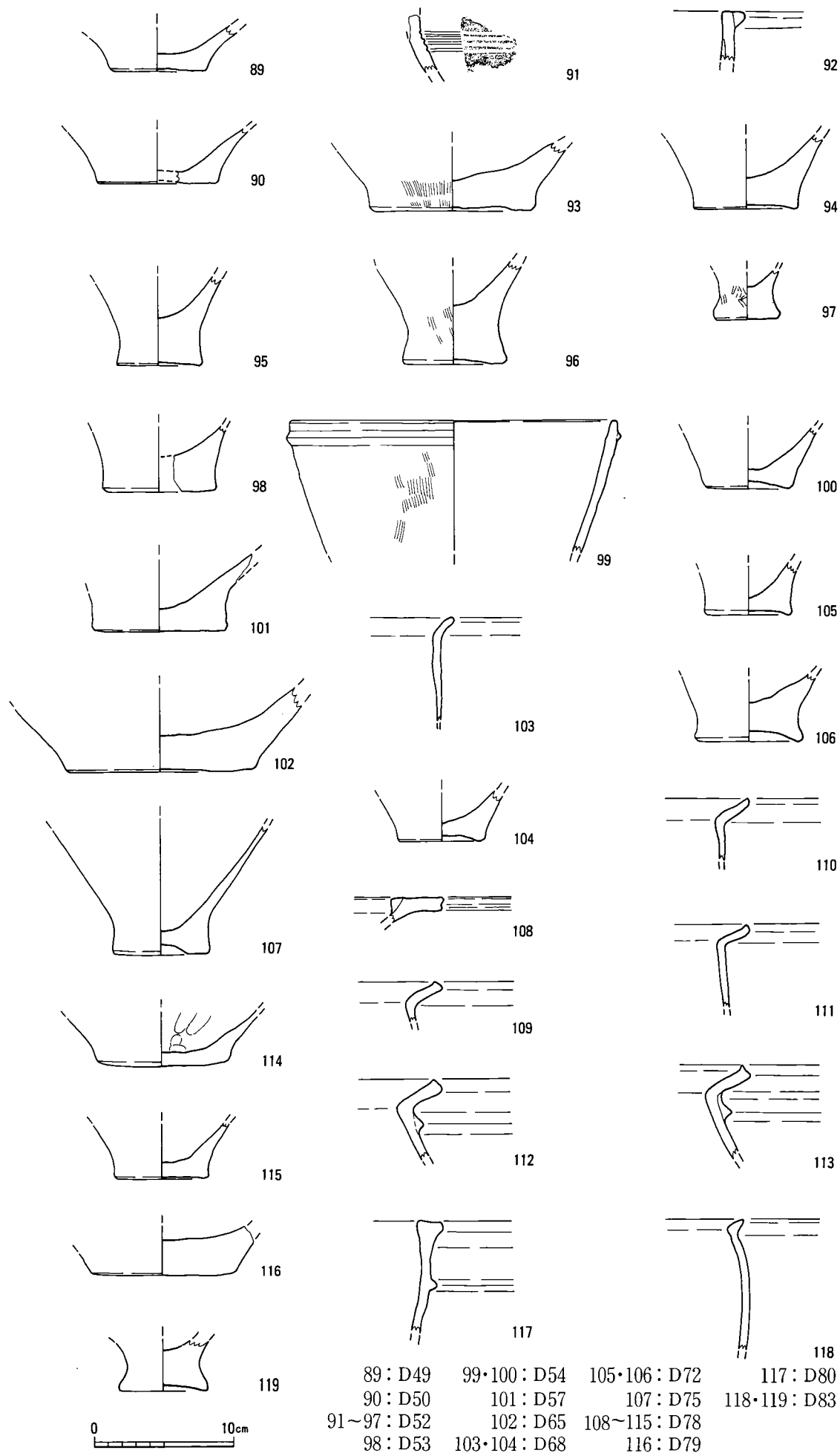
47号土坑の西に広がる浅い不整形土坑を48号土坑としたが、個別図は略している。

出土遺物

土器（第18図85～88） 85は短い如意形口縁の甕小片。口端部が小さく肥厚、垂下する。86・87は相似た甕の底部片で、底部側縁を強く横撫でしてくびれさせる。

88は壺であろうか。約1/4の残片で、器表は荒れる。

石製品（図版12・13、第35図2・第40図39） 第35図2は灰黄色の風化安山岩を使用する凹石で、石質は緻密である。図上下両面の中央付近が緩く窪む。第40図39は灰黄色多孔質の安山岩で、硬質な感がある。図のように比較的均質な厚さで、図上面は平坦面となる。多孔質であるがこの面は手触りが滑らかでツルツル感があるとともに、中央付近にはわずかに敲打したような部分が見える。図下面はやはり滑らかとなり磨ったのは間違いないと思われるが、大小の凹凸があつて、これ



第20図 土坑出土土器実測図5 (1/4)

については使用の結果生じたものとの確信は持てない。

49号土坑（第19図）

10号土坑の北西に位置する。底径0.7m、深さ0.55mの規模を有し、床面付近は袋状を呈する。

出土遺物

土器（第20図89） ほぼ完周する底部片。内定面を平らにする意図が見え、胎土も精選される。

50号土坑（第19図）

45号土坑の北に近接する、本遺跡では唯一といってよい大型円形土坑である。大型といっても、他遺跡ではなお小規模の部類に属するものである。上端は径1.4mの円形プランを有し、底径では0.8mほどに減じる。中位から上位にかけての稜線はそれ以上が崩落したことを示すが、残存する状況からは袋状を想定することはできない。土層の断ち割を行っていないが、床面には厚さ10cmほどの粘土が堆積していた。

なお、小規模な63号土坑と重複するが、先後を把握できていない。

出土遺物

土器（第20図90） 小片のために径には不安がある。89同様に内底面を平らに作り、胎土も精選される。

石製品（図版10・13、第31図4・第39図34） 第31図4は有茎族のような形状の石製品であるが、刃部は先端の6mmのみで、側縁にかけては面取りがなされる。図下端は茎が存したようで、突出する。あるいは斧あるいは鑿のようなものかも知れない。石材は暗灰色を呈する凝灰質細粒砂岩。第39図34は灰黄色多孔質の安山岩で、凹面となる図左側面以外は触るとツルツルとなる部分があり、磨られたようである。

51号土坑（第19図）

50号土坑の東に隣接する。床面規模で0.45m前後の円形を呈し、深さは0.45mを測る。

52号土坑（第19図）

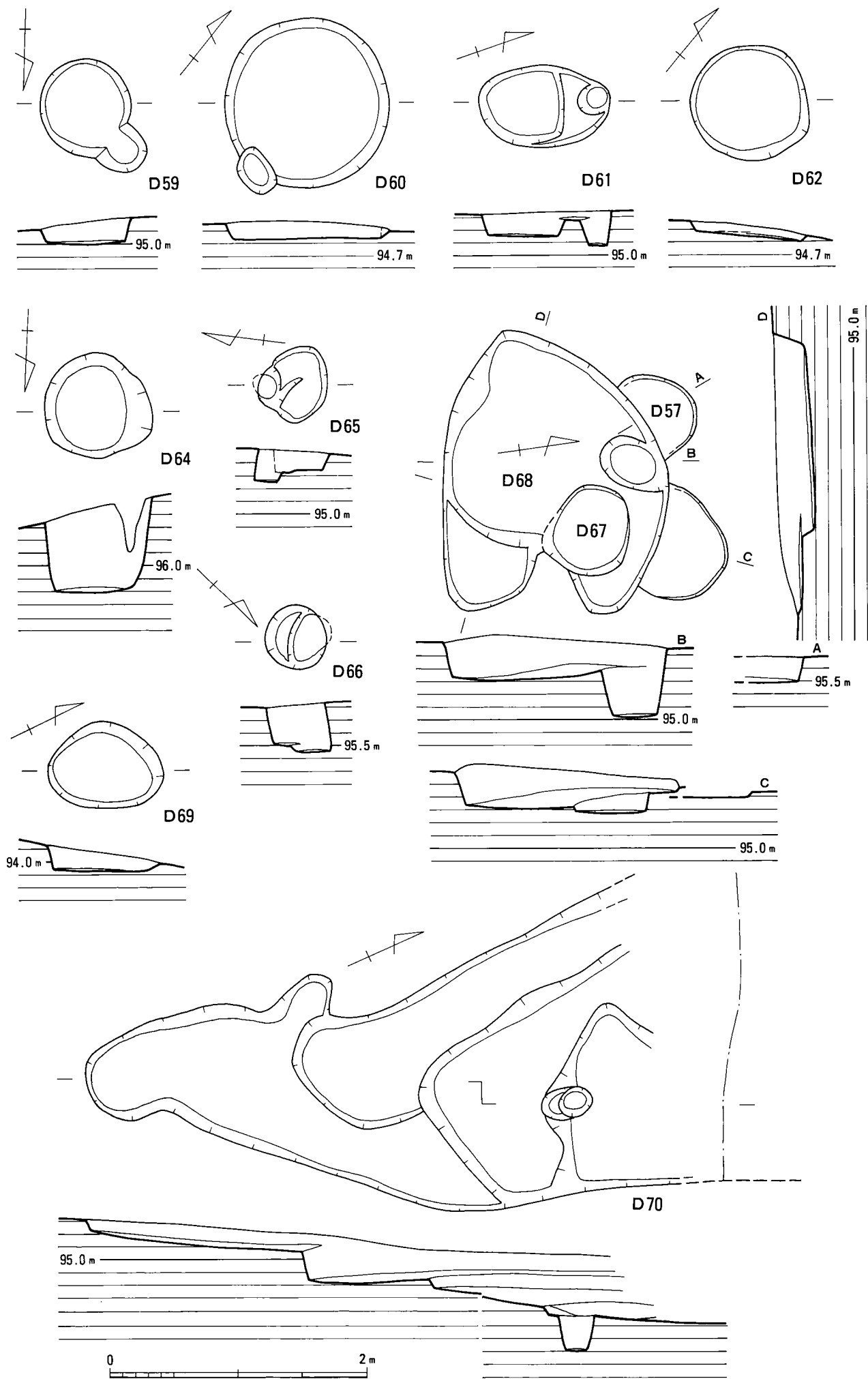
36号土坑の北に近接する不整形土坑。床面規模は長軸が最大で2.4m、短軸は同1.2mを測り、深さは0.5mほどとなる。

出土遺物

土器（第20図91～97） 91は4条の篋描沈線を刻む壺の小片。92は口端部外面に粘土帯を付して断面三角形にしようとしたらしい。器表が荒れて細部が不明であるが、内面は丁寧に仕上げている。ほかに三角突帯2条を付す肩部小片もある。

93は壺であろう。底部外周が高台状をなす。94は外面を篋磨きで仕上げるようである。95～97は底部側縁をくびれさせるもの。97は胎土が精選されている。

石製品（図版10、第31図14） 暗灰色を呈するチャート質の石材を使用する。基部の一部が欠損するようであるが、全体は大きく変わらない。細部調整の単位が大きく、雑な感を受ける。また、形態的には基部中央付近が異様に厚く作られている。重量は0.9g。



第21図 土坑実測図5 (1/40)

53号土坑（第19図）

52号土坑に切られて1×1.8mほどの方形に近い土坑があるが、それを完掘して後に北辺で深い土坑を検出している。北辺の下層土坑は床面中央に段を有し、柱穴状の形態を見せるもので、上面からの深さは0.95mを測る。

出土遺物

土器（第20図98） 甕の底部片で、ほぼ1/3が残存する。器表は荒れる。

石製品（図版10、第31図1） 石剣と思われる小片。破損が著しく、図上面では右下の一部のみ、図下面では刃部付近のみが原形をとどめる。細粒砂岩製。

54号土坑（第19図）

調査区東端の最も低い部分の南端付近に位置する。底径0.8m弱の整った円形プランを有するが、深さは0.3mに満たない。断面形状はややオーバーハングする傾向を見せ、大きく削平されていることが窺える。

出土遺物

土器（図版9、第20図99・100） 99は小片のため、傾きについてはやや不安がある。体部がごく弱く内彎して立ち上がり、口端部下位に断面三角形の突帯を付すものである。器表は荒れる。100はいわゆる碁笥底のような形態の底部で、非常によく焼けている。

55号土坑（第19図）

54号土坑の東に近接する。これも底径0.7～0.8mと54号土坑に近い規模を有する。深さは0.5m。

56号土坑（第19図）

55号土坑の北に接する。底径0.7m、深さ0.3mを測る。断面は袋状を呈する。

57号土坑（第21図）

56号土坑の北西に位置する。また、ここは少なくとも4基の土坑が重複していて、57号土坑は68号土坑に切られていた。底径0.6m前後、深さは0.2mである。

出土遺物

土器（図版9、第20図101） 非常によく焼かれた底部片で、器表はボロボロ。図上端は擬口縁をなす。

58号土坑（図版5、第19図）

56号土坑の北に位置する。床面は径0.9mの正円を描き、深さは0.4mを測る。断面形状は袋状を呈する。

59号土坑（第21図）

58号土坑の北に位置する。柱穴と重複するようで、一部の形状が乱れるが、およそ底径0.6m、深さ0.2mを測る。断面形状は袋状を思わせる。

出土遺物

石製品（図版12、第35図3） 灰白色の風化安山岩を使用する凹石で、石質は緻密である。下面がより大きく窪む。図右側の窪みは破損したものであろう。

60号土坑（第21図）

59号土坑の東に位置する。これも床面は径1.1～1.2mの整った円形プランを呈する。深さはわずかに0.1mほどである。

61号土坑（第21図）

59号土坑の北西に位置する。形状は正円とならず、長円形で中央付近に段を有する。最深部は長軸・短軸ともに0.5mほどで、深さは0.2mに満たないが、内部から炭化したドングリ類（?）を多く出土した。

62号土坑（第21図）

60号土坑の北西に近く位置する。底径0.8mほどの円形プランを有するが、深さは0.1mに満たず、大きく削平されている。

63号土坑（第19図）

50号土坑に重複する。床面は全体の1/2ほどが残存し、底径0.5m前後に復原できよう。深さは0.55mほどが残存し、断面形状は袋状となる。

64号土坑（第21図）

53号土坑の北東に位置する。口径は0.8mほどの円形を呈するが、底径は0.55～0.65mの扁円形を呈する。深さは最大で0.7m強を測る。断面形状は袋状を呈しないが、本来的なものか断定できない。

65号土坑（第21図）

54号土坑の南西に隣接する。床面は軸長0.3～0.5mの歪な形状となり、北隅に柱穴が穿たれるが、確実に伴うものか確認できていない。深さは0.2mほどである。

出土遺物

土器（第20図102） 中央付近でほぼ正立した状態で検出した土器である。図示部は完周するが、器表は荒れる。

66号土坑（第21図）

65号土坑の南に位置する。土坑としたものの柱穴とした方がよいような遺構である。

67号土坑（第21図）

57号土坑と重複する土坑群の中であって、後述する68号土坑を完掘して後に気付いた遺構。先

後関係は未確認。床面は軸長0.5～0.6mの長円形に近い平面形を呈し、深さは最大で0.1m強を測る
出土遺物

石製品（図版14、第41図4） 黄褐色～茶褐色を呈する珪質岩製のスクレイパー。無調整打面を加撃して幅広剥片を作り出し、剥片端部に刃部加工を施す。

68号土坑（第21図）

57号土坑を切ること確認しているが、67号土坑および東南方に張り出す土坑状の遺構との先後は把握できていない。床面は不整形で、長軸1.7m、短軸1.4mほどの規模を有し、深さは最大で0.4mほどを測るものの、床面の高さも一定しない。

出土遺物

土器（図版9、第20図103・104） 103は如意形口縁の甕小片。器表の荒れがひどく、細部は不明。104は約1/2の残片。両者ともによく焼けている。

石製品（図版10・14、第31図2・3・第41図3） 第31図2は石剣の再加工品であろうか。図左側縁は丸くなって刃部をなさず、上面のみに弱い鋸を有する。穿孔は丁寧になされる。淡灰色細粒砂岩製。同3も石剣を想定して図示した。図左側縁はほぼ端部のようなのであるが、図下面がすべて剥離しているために鋭利さのほどははっきりしない。これも鋸を有し、表面には擦過痕が顕著。凝灰質細粒砂岩製。

第41図3は黄褐色～茶褐色を呈する珪質岩製のスクレイパー。無調整打面を加撃して得られた素材剥片の右側縁に鋸歯状の二次加工を施す。剥片端部はヒンジフラクチャーを起こしている。背面の剥離は多方向であり、求心状剥離を行う技術の存在が想定される。

69号土坑（第21図）

調査区北東隅に位置する。平面形は三角形に近く、床面は長軸長0.8m、短軸長0.5mの規模を有する。深さは0.2mを測る。

70号土坑（第21図）

これも調査区北東隅に位置する。土坑としたが、床面がほぼ水平な段を形成することからあるいは遺跡への上り道であった可能性もある。

71号土坑（第22図）

41号土坑の北東に近接する。これも土坑と呼称したが、床面の柱穴が非常に深く、形状から見て柱穴とした方がよいであろう。

72号土坑（第22図）

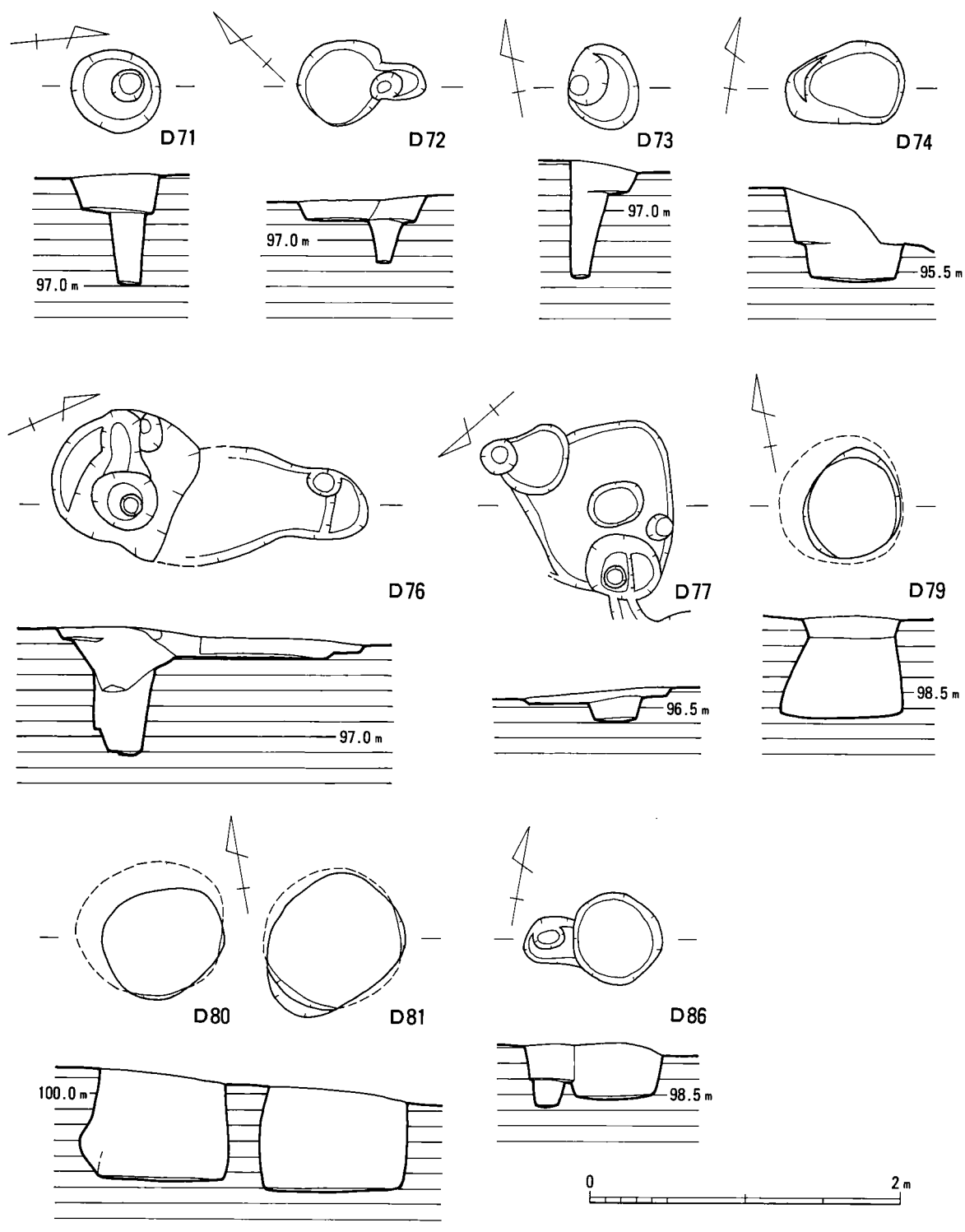
50・51号土坑の東に位置する。柱穴と重複するが、本来は底径0.5m前後、深さ0.2mほどの円形プランを有したようである。

出土遺物

土器（第20図105・106） 105は1/4が残存する。小さな上げ底で、底部が薄い。106は完周するもので、底部側縁が大きくくびれ、上げ底となる。

73号土坑（第22図）

72号土坑の南に近接する。これも結果的には柱穴と呼ぶが相応しい遺構である。



第22図 土坑実測図6（1/40）

74号土坑 (第22図)

52号土坑の東、開墾時の段落ち部に位置する。東半が削平されているために本来の形状ははっきりしないが、現状では西小口に小さな段を有し、床面は軸長0.4～0.6mの卵形に近い平面形となる。深さは最大で0.6mを測り、西小口の段はそのほぼ中位に設置される。

75号土坑

調査区北東端の片付近にある。すぐ隣は比高20m近い急斜面となる。この遺構は2×3mほどの長方形プランとして遺構配置図に図示するが、明確な掘り込みを確認できず、遺構としての確信は得られていない。ただ、破線で示した径0.5mほどの範囲が焼けて赤く変色していた。ここで火を焚いたことは間違いない。

出土遺物

土器 (図版9、第20図107) 完周する底部。外底面は大きな高台状を呈し、中心付近が薄くなる。器表荒れるが、内面に焦げ付きが見える。

76号土坑 (第22図)

50号土坑の南に近く位置する。複数の遺構が重複しているが、不整形の浅い遺構をこう呼称している。

77号土坑 (第22図)

53号土坑の北東に位置する。これも複数の遺構と重複するが、77号土坑としたものは一辺長1mに満たない、浅い落ち込みである。

78号土坑

4・5号住居跡の北東、一段下がった部分にある。この部分は大きく見れば谷状の地形にあり、表土掘削で剥ぎ足りなかった部分を一部掘り下げたものである。その範囲は3×4mの規模であった。結果、検出した遺構は図のような幅0.3m、深さ0.3mの小さくカーブする溝だけであった。溝の南北では地山に0.2mほどの比高差があり、あるいは住居跡の壁溝の可能性も捨てきれないが、柱穴等を全く確認していないことから住居跡ではないと考えている。

出土遺物

土器 (図版9、第20図108～115) 108は鋤先状口縁の小片。上面は水平な面をなし、硬直化した観がある。109～111は磨滅して不明瞭となるが、いずれも口端部内面を摘む跳ね上げ口縁の甕小片。112・113は跳ね上げ口縁を有し、頸部直下に断面三角突帯を付すもの。これも小片。

114・115はいずれも胎土が精良な底部で、114では内面に指撫で痕が顕著に残る。

石製品 (図版11・13、第32図11・第34図5・第40図41) 第32図11は灰黄色砂岩製の石庖丁。図左端の大部分を欠くが、下端付近は原形を保っていて、本来的に長方形に近い形状であったと思われる。ほかの例と大いに異なる。背は丸く、刃部には明瞭な稜を付す。材質によるものか、条痕は不明瞭。第34図5は淡灰色砂岩製の砥石で、多くの部分で剥離する。図示した面で使用部が残存するのは上端付近のみで、図下面も多くで剥離するが、現状を残す部分はほとんど未使用である。また、わずかに残る図上側面は非常によく使用され、下側面および左側面は未使用あるいはほとんど

使用されていない。第40図41は灰白色～黄白色安山岩で、材質は緻密である。全体に滑らかとなるが、図左側の斜面となる部分はいつそうツルツルとなる。明瞭な使用痕といったものは見えない。

79号土坑（第22図）

調査区中央付近のやや南、2号溝状遺構とした遺構の中で検出した。口径は0.6～0.7mとやや歪であるが、底は径0.8mの正円を呈する。深さはほぼ0.6mで、断面形は袋状を呈する。

出土遺物

土器（第20図116） 円盤状の壺底部で、内面は全体に剥離するようである。

石製品（図版11、第33図1） 柱状片刃石斧と思われる小片。両側縁は原形を保ち、刃部は先端を欠く。黄白色粘板岩製で、器表が荒れる。

80号土坑（第22図）

1号住居跡の北に近接する。これも口径はやや歪となるが、床面は0.85～0.95mの円形プランとなる。深さは0.7mが³残存し、断面は袋状となる。

出土遺物

土器（第20図117） 甕口縁の小片。口端部外面に粘土帯を付して断面三角形に近く肥厚させ、ほぼ平坦な面をつくる。口縁部・体部の境は明瞭でなく、口縁部界に断面三角突帯を付す。

石製品（図版12・13、第35図5・第36図10・第37図23・24） 第35図5は風化安山岩を使用し、図示した部分が緩く窪む。石質は荒い感があり、全体に赤味を帯びるが、本来的には淡灰色を呈するようである。第36図10は淡灰色の風化安山岩で、石質は緻密である。使用痕は見えず、全体に滑らかではあるが、触るとザラザラとする。重量は65.0gを測る。第37図23も風化安山岩で、石質は緻密である。明瞭な使用痕は見えない。全体に熱を受けたようで黄褐色に変色し、図下面を除く全体に浅い剥離が見られる。同24も多孔質の風化安山岩で、風化が進む。形は柱状で比較的整っているが、これも明らかな使用痕は見えない。

81号土坑（第22図）

80号土坑の東に近接する。これも80号土坑とほぼ同大の規模を有し、底径0.9m、深さ0.65mを測る。断面形状は袋状を思わせる。

82号土坑（第5図）

1号住居跡の肩に位置するが、先述したように先後は確認できていない。平面形は不整円形を呈し、軸長は0.7～0.8m、深さは0.2m強を測る。

83号土坑（第23図）

2号住居跡の西側には大小さまざまな土坑が集中する。83号土坑はその中でも南よりに位置し、床面は1.3～1.5mの不整円形を呈する。深さは最大で0.5mを測る。現状の壁体の立ち上がりを見る限り、袋状を想定することは困難である。ただ、床面に小ピットが3基あり、そのあり方は通有の貯蔵穴に類似する。

出土遺物

土器（図版9、第20図118・119） 118は口縁部を小さく肥厚させてく字状に反転する、やや変わったタイプ。部分的に煤が付着する。119は完周する甕底部で、これも側縁を強く横撫でする。

石製品（図版10、第31図8・11） 8は灰白色半透明の姫島産黒曜石を用いた石鏃で、基部を欠く。両面ともに全面に細部調整を行う丁寧な作りである。残存重量は0.9g。11はサヌカイト製の打製石鏃で、図右の逆刺を欠損する。細部調整は粗雑で、形状も不整。残存重量1.3gを測る。

84号土坑（第23図）

83号土坑の西に近接する不整形土坑。上端規模は長軸長2.8m、短軸長1mほどであるが、床面は同1.9m、0.7mを測る。深さは最大で0.4mほどである。

85号土坑（第23図）

84号土坑の東に近接し、浅い溝状遺構と重複して位置する。床は0.6～0.7mの扁円形を呈し、深さは0.15mほどで、壁体の断面形は摺鉢状となる。床面中央に柱穴が1基配され、その規模は直径0.1余、深さ0.2mほどである。

出土遺物

石製品（図版10・12、第31図6・第36図4） 第31図6は図左右両側片が刃部をなすので磨製石鏃と思われる。図上下両面の全面に粗い条痕が見える。暗灰色砂岩製。第36図4は青灰色砂岩製の丸石。表面は手で触るとザラザラ感があって、45号土坑出土品などに比べると劣る。

86号土坑（第22図）

2号溝状遺構の南に位置する。底径0.5mの円形を呈し、深さは0.3m。

87号土坑（図版5、第23図）

2号住居跡の南西に接する。本遺跡で検出した土坑のほとんどが円形平面を呈する中で、本遺構は数少ない長方形プランをもつ。北東辺小口が丸味をもつのは上手に発掘できなかったせいで、本来は南西小口のように明瞭な矩形となっていたと思われる。

南西小口に張り出しがあって階段状とり、床面は長軸1.6m、幅1mの規模を有する。長さは発掘ミスを勘案すれば本来は1.2mほどであったろうか。深さは0.4m強である。

埋土は赤褐色・黄褐色系を主体とし、概ねレンズ状に堆積していた。特異な層としては中位やや上方で炭を含む黒褐色土層が間層として入っていた点である。

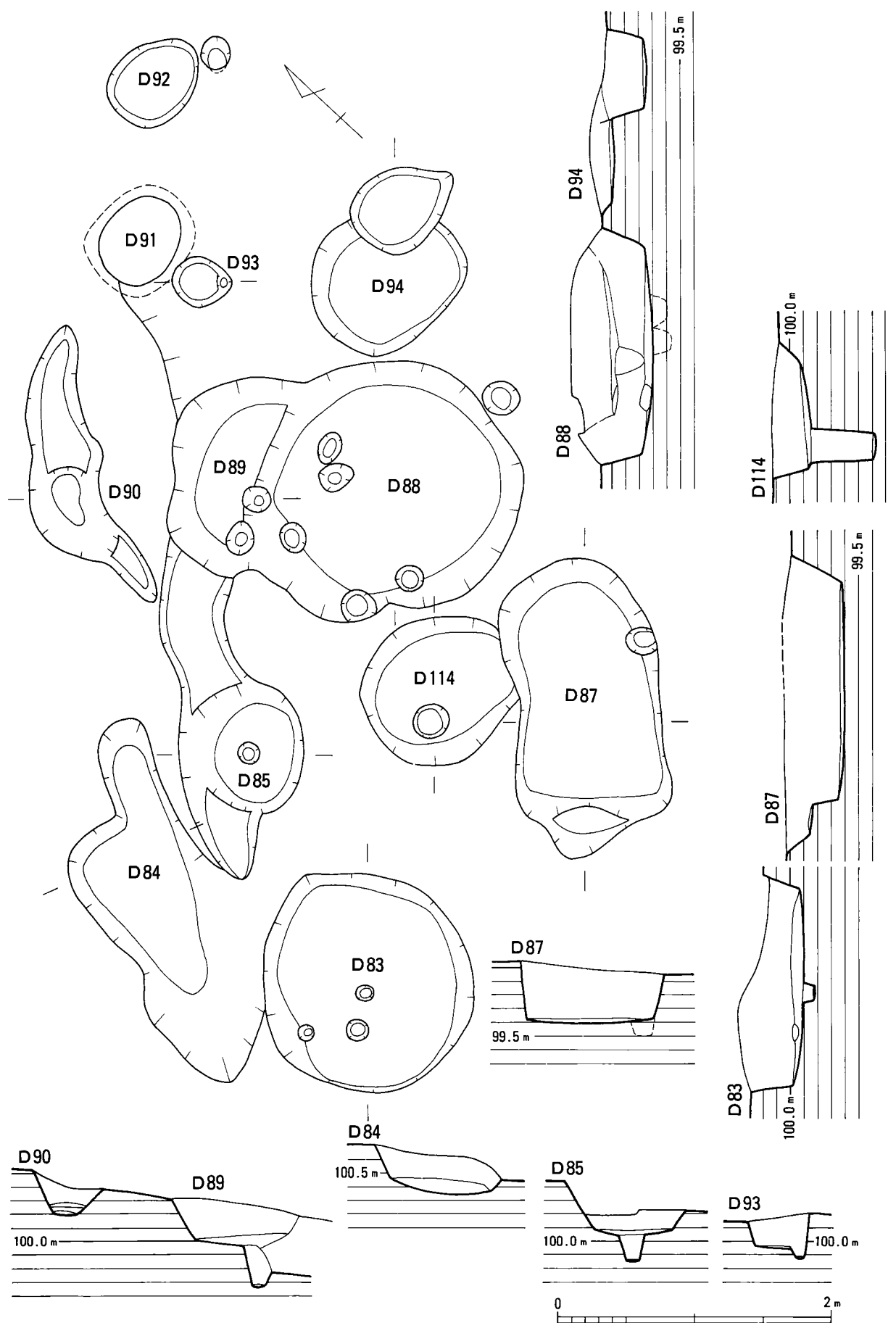
出土遺物

土器（第25図120） 約1/2が残存する前期的な底部。器表は荒れる。ほかに断面三角突帯を2条付す壺肩部の小片などがある。

石製品（図版13、第40図12） 灰白色～黄白色を呈する緻密な安山岩。顕著な使用痕は見えないが、全体にツルツルとなっている。

88号土坑（第23図）

87号土坑の北に隣接する。後述する89号土坑と重複するが、明瞭に区別して調査できなかった。平面形はほぼ円形となり、上端は径1.9～2m、床面で1.5～1.7mを測る、本遺跡で最大規模の



第23図 土坑実測図7 (1/40)

円形土坑である。深さは最大で0.6mを測る。

出土遺物

土器（第25図121） 平底で、底部側縁をくびれさせる底部で、外面がよく焼けて赤く変色する。

石製品（図版10、第32図2） 凝灰質頁岩製の石庖丁の残片。わずかに残る背は明瞭な面をもつ。図の孔上部および左端付近は薄く剥離するほか、孔直下の窪みは本来のものである。また、図下面孔付近は荒割り段階で薄くなったようで、仕上げの研磨がおよばない。穿孔はとても丁寧になされる。1に示した15・16号土坑出土石庖丁に石材や背の形態、中央付近に研磨がおよばない点など非常によく似ていて、あるいは同一個体かも知れない。

89号土坑（第23図）

88号土坑と重複し、一部を確認したのみである。想定される規模は床面で1.2m前後であろう。深さは約0.4mで、壁体は摺鉢状に立ち上がる。図示した柱穴が中央に近く位置するものであろう。

出土遺物

土器（第25図122～124） 122は大きな上げ底となり、体部が浅く立ち上がるために側縁のくびれは小さい。123も薄手上げ底の小型の底部。124は平底でやや厚手の底部。内面の傷は製作時のシワである。

石製品（図版10・11、第31図12・第34図4・第36図18） 第31図12はサヌカイト製の打製石鏃で完存する。重量は0.9g。細部の調整は粗雑で、図下面は縁辺にのみ行う。第34図4は砥石と同じ図に組み込んでいるが、明確に砥石として使用されたものではない。図下面は本来の表面のようであるが、他は赤紫に近く発色する破面である。下面も触ると滑らかではあるが、決して砥石として使用されたものではない。図に示した面に鋭利な条線が数本入り、右上に磨り減ったような部分が一部にあるものの、他例のようにツルツルした面ではない。砂岩製。第36図18は淡い小豆色を呈する風化安山岩で、石質は緻密である。触るとざらつき、明瞭な使用痕はない。103.1gを測る。

90号土坑（第23図）

89号土坑の北西に隣接する。土坑としたが、小規模な溝状遺構とした方が妥当であろう。

91号土坑（第23・24図）

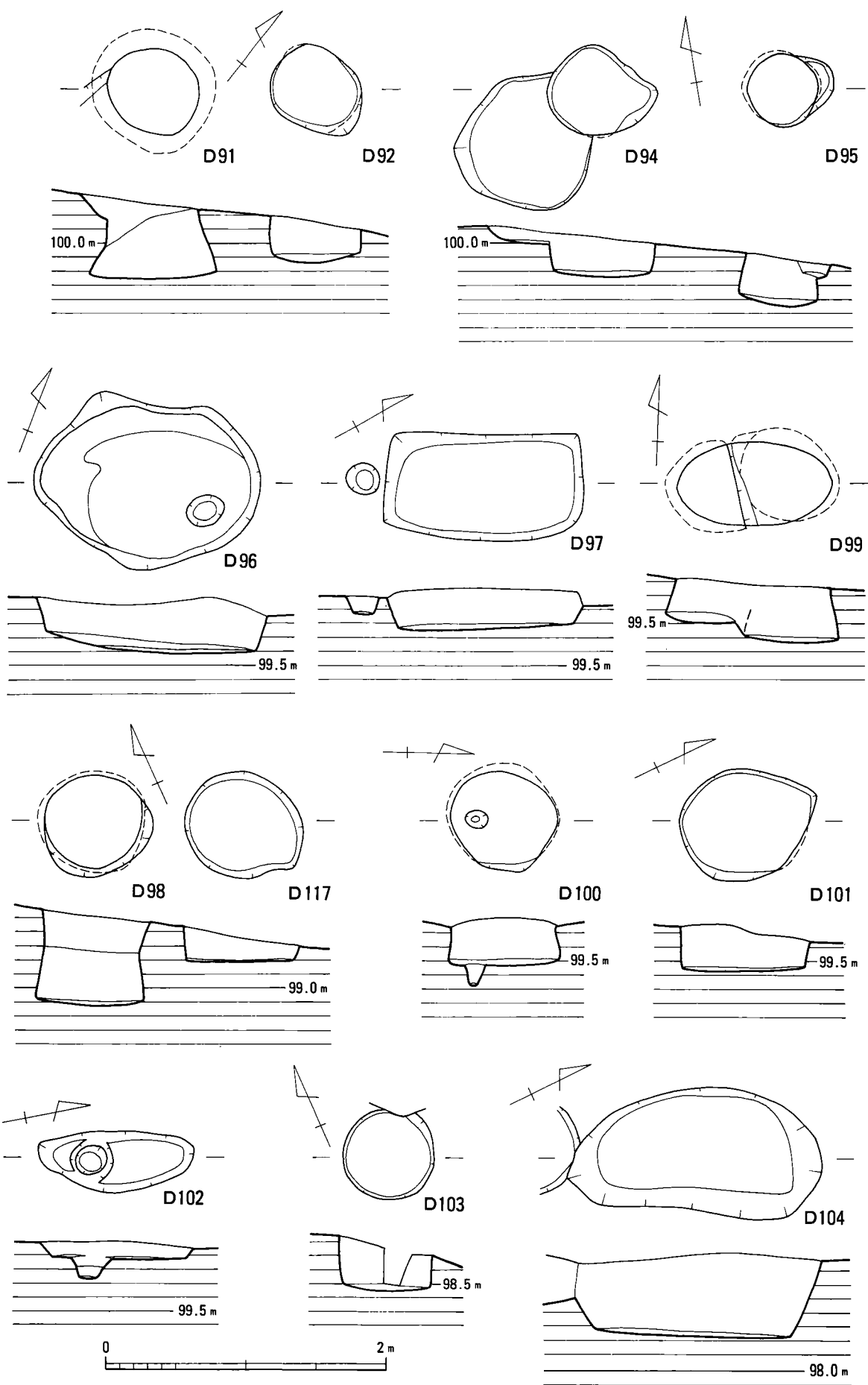
89号土坑の北に位置する。口径0.6～0.7m、底径0.9m弱、深さ0.6mの規模を有する。図に見るように断面は袋状を呈する。

出土遺物

土器（図版9、第25図125～127） 125は如意形を呈するものの外反が弱い甕の口縁部片。口端部に面をもつようである。126は1/2の残片で、よく焼けて赤変する。127もよく焼ける。ほかに肩部に2条の断面三角突帯を付す壺肩部片などもある。

92号土坑（第23・24図）

91号土坑に隣接する。平面形はやや不整な円形を呈し、底径はほぼ0.6m、深さは0.3m強を測る。壁体の形状はほぼ直立するが、一部でオーバーハングする部分もあり、本来は袋状を呈していたとしてよからう。



第24図 土坑実測図8 (1/40)

出土遺物

石製品（図版13、第40図40） 灰白色多孔質の安山岩で、手触りが非常にざらつく。はっきりとした使用痕は見えない。

93号土坑（第23・24図）

91号土坑に隣接する。平面形はほぼ円形で、底径は0.3m、深さ0.3m弱の規模である。床面壁際に小ピットがある。

出土遺物

土器（図版9、第25図128～133） 128は壺肩部小片。残存部上端に3条の篋描沈線がわずかに見え、三角突帯の下方に貝殻腹縁を用いた山形文が見えるただ、器表がひどく荒れていて文様帯の細部は不明である。129～133は底部。いずれも器表が荒れるが、133は外面に篋磨きが残る。

94号土坑（第23・24図）

88号土坑の北東に隣接する。2基の土坑が重複するようであるが細部は不明で、深い方の遺構を94号土坑としている。平面形は不整形であるが、本来は底径0.5mほどの円形であったと思われる。深さは0.4m弱である。

出土遺物

土器（第25図134） 図示部が完周する底部で、側縁の強い横撫では見えない。器表荒れるが、外面には刷毛目がかすかに見える。

95号土坑（第24図）

94号土坑の東に近接する。断面袋状を呈する土坑で、底径0.55m、深さ0.4mの規模である。

出土遺物

土器（第25図135・136） 135は薄く、内底面の平坦化を意図した底部。136は図示部が完周する。高杯様の土器で、器表が非常に荒れる。

石製品（図版13、第37図20） 灰白色多孔質の安山岩で、明らかな使用痕は見えない。風化もあまり進行せず、硬質である。

96号土坑（第24図）

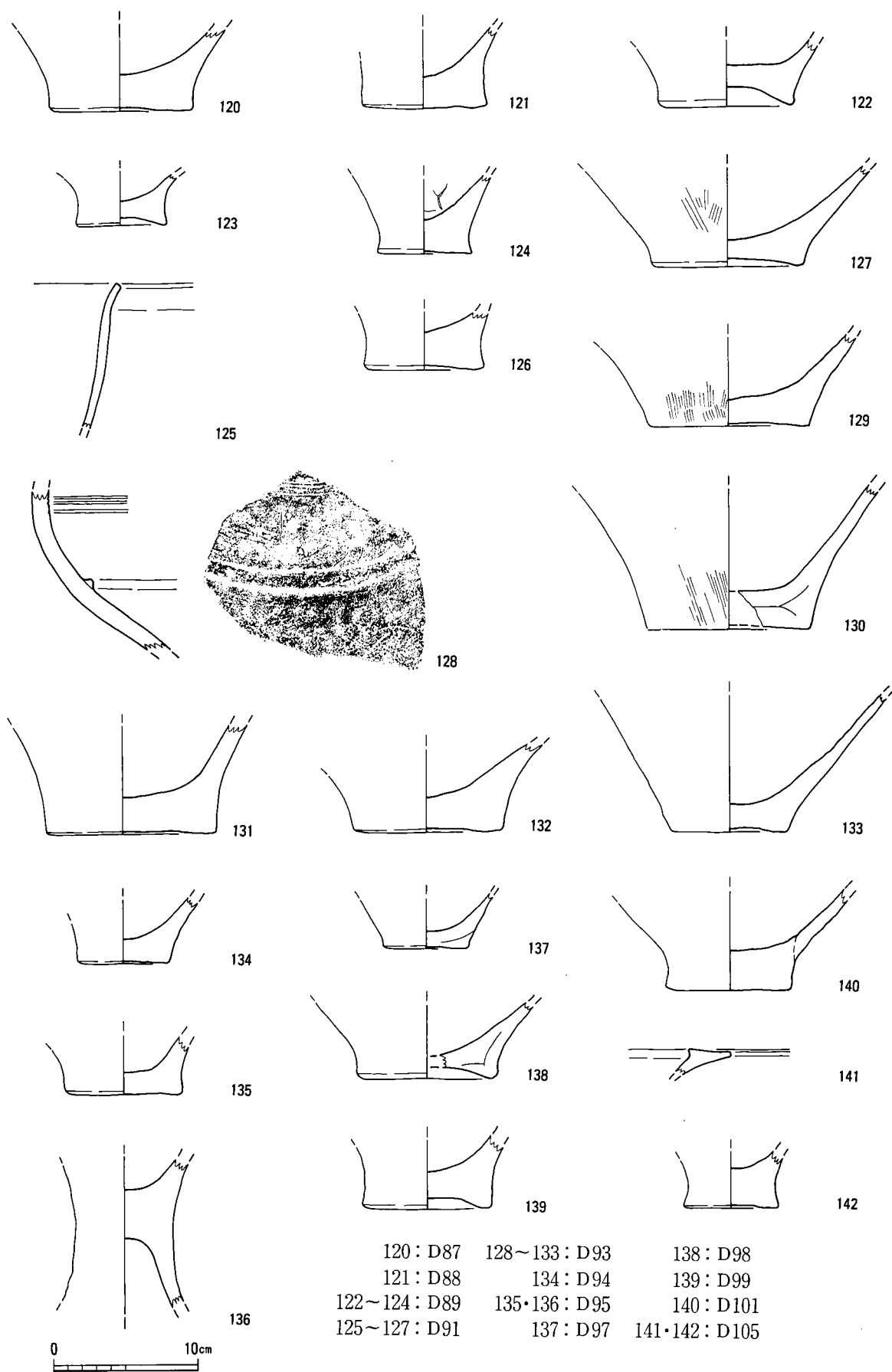
95号土坑の北に位置する。平面形は上端規模で長軸1.6m、短軸長1.2mほどの不整長円形を呈し、深さは0.4mを測る。東側に偏して柱穴が配され、その深さは0.1mほどである。

97号土坑（第24図）

96号土坑の北西に近接する。平面形は整った長方形を呈し、上端規模は1.4×0.7m、深さは0.3mを測る。南西小口部で、中軸に沿って配されたとも思われる柱穴が存在するが、この土坑周辺では柱穴が疎であることから何らかの関連を有していた可能性もある。

出土遺物

土器（第25図137） ほぼ1/2が残存する底部。非常によく焼けている。



第25図 土坑出土土器実測図6 (1/4)

98号土坑（第24図）

2号住居跡の東に位置する。床面はほぼ直径0.7mの円形を呈し、深さは最大で0.8mを測る。図に見るように断面形は下半でよく袋状を呈する。

出土遺物

土器（第25図138） 薄手厚底の底部片で、1/4が残存する。これもよく焼ける。

石製品（図版12、第35図6） 淡灰色の安山岩を使用している。図上下両面の中央付近にはかすかに敲打したような痕跡があり、その左上方および上側面の2箇所に非常に研磨された部分がある。また、下および右先端付近にも研磨したらしい部分がある。なお、図右下の斜辺となる部分は本来の形状を保つようである。

99号土坑（第24図）

4・5号住居跡の西に群集する土坑群の中にある。検出時は長軸長1.1m、幅0.6mの長円形を呈していたが、発掘の結果、小型土坑2基が重複していたことが判明した。東側の土坑は若干掘りすぎたが底径0.6mほど、深さ0.4m、西側土坑は同0.6m、0.3mの規模である。

出土遺物

土器（第25図139） 完周する底部で、これもよく焼ける。高台状を呈する。

100号土坑（第24図）

99号土坑の北に近接する。床面は径0.75m、深さ0.3mの規模を有し、断面形は袋状を呈する。南に偏した床面に径0.15m、深さ0.15mの小ピットが配される。

101号土坑（第24図）

100号土坑の東に隣接する。平面形がやや乱れるが、本来は底径0.7mの円形を呈していたと思われる。深さは0.3mが残存する。断面形は直立する部分が多いが、一部オーバーハングする部分があつて、これも本来は袋状を呈していたことが想定される。

出土遺物

土器（第25図140） 円盤状の底部で、図示部は完周する。器表荒れ、内面はほとんどが剥離。

石製品（図版12、第36図11） 灰黄色多孔質の風化安山岩の丸石。形状は整うが、使用痕は見えない。重量は125.2g。

102号土坑（第24図）

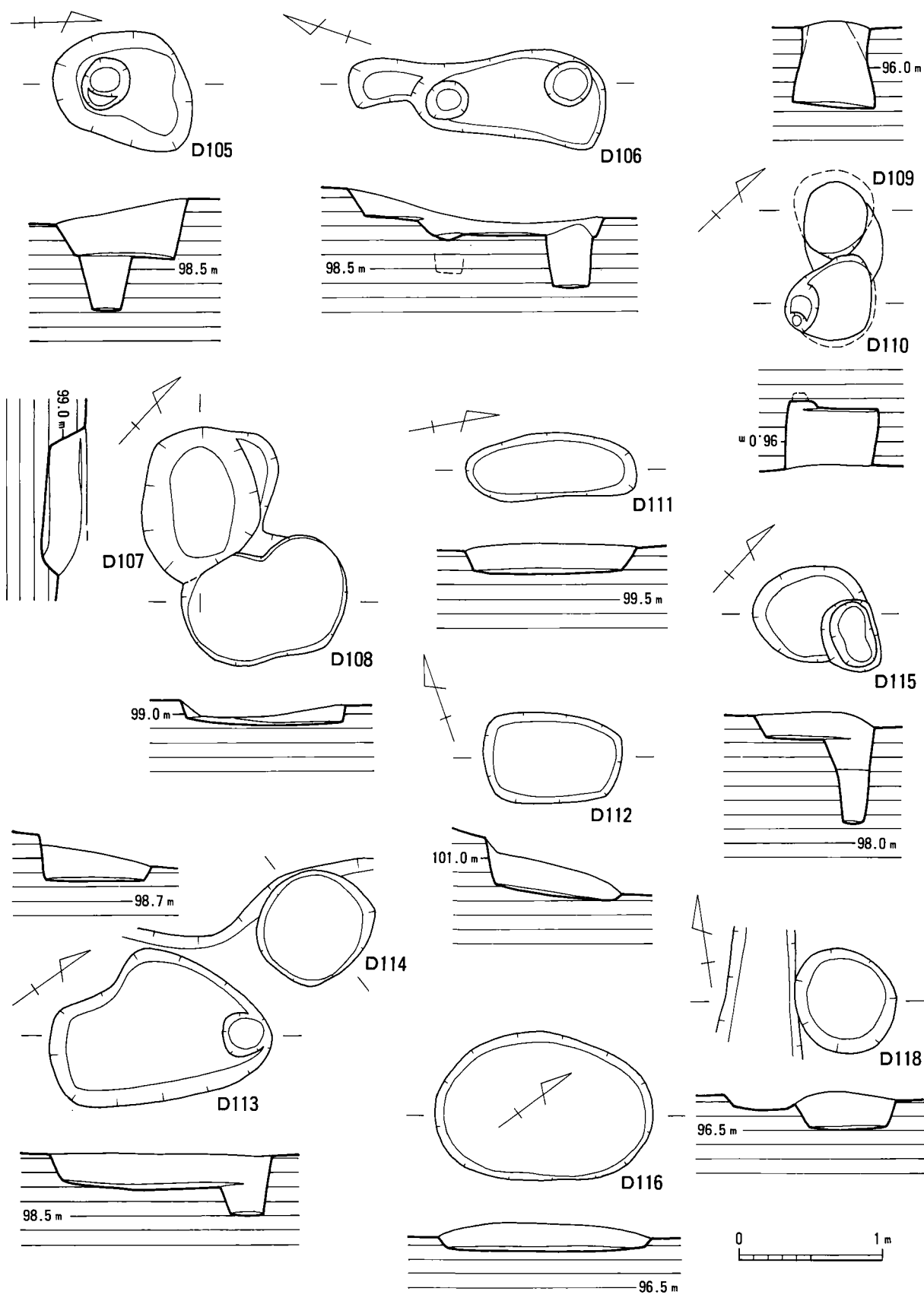
100号土坑の西に位置する小規模な溝状の遺構。上端規模で長軸長1.1m、幅0.45m、深さ0.1m強である。溝底にピットがある。

103号土坑（第24図）

調査区中央付近の2号溝状遺構の北東に近接する。床面は0.6mの円形を呈し、深さは0.4mを測る。壁体はほぼ直に立ち上がる。

出土遺物

土器 図示していないが、口端部を欠くが如意形口縁に復原でき、頸部に微細な篋描沈線を1条



第26図 土坑実測図9 (1/40)

付す甕の残片がある。

石製品（図版13、第38図30・第39図35） 第38図30は灰白色の風化安山岩、石質は緻密。触るとざらつくが、表面は比較的滑らかとなる。形状不整で、使用痕も見えない。第39図35はやはり灰白色～灰黄色の多孔質風化安山岩で、特に使用痕といったものは見えない。触るとざらつく。

104号土坑（第24図）

103号土坑の北に隣接する。平面形は長方形に近く、上端規模は長軸長1.8m、幅0.9m、下端は同1.4m、0.7m、深さ0.6mを測る。

105号土坑（第26図）

104号土坑の北西に位置する。軸長0.8～1mの不整形を呈し、深さは0.4mを測る。南端の底に土坑の大きさに比して大振りの柱穴があり、その口径は0.3～0.4m、深さは0.4mを測る。

出土遺物

土器（第25図141・142） 141は鋤先状口縁の小片。まだ肥大化せず、先端部が薄くなり、上面が外傾する。142は完周する底部。

106号土坑（第26図）

105号土坑の北東に位置する不整形土坑。

出土遺物

石製品（図版9、第37図25） 淡灰色多孔質の風化安山岩で、表面の風化が進む。図下面が浅く窪んでいるが、使用痕との確信は持てない。

107号土坑

4号住居跡の炉跡を想定した土坑。

108号土坑（第26図）

107号土坑と一部で重複するが、調査時に先後は確認できなかった。平面形は長円形に近く、軸長は0.8～1.2mほどである。深さは0.1mと浅い。

出土遺物

土器（図版9、第27図143・144） 143の注記は「D106・108」とあるが、「106」は「107」の誤記としてここで紹介する。比較的薄手で、内定面を平らにつくる底部。144は108号土坑出土。先に比して厚手となる。

109号土坑（第26図）

調査区南東辺中央付近、15・16号土坑の北に近接して位置する。調査時には次の110号土坑ともに「柱穴」として「P109」・「P110」と呼称していたが、本報告に際して変更した。

床面は径0.5～0.6mの円形を呈し、深さは0.6mを測る。断面は下半でよく袋状を残す。

110号土坑（第26図）

109号土坑に接する。平面形はおむすび形に近く、径0.6mを測る。深さは0.4m強である。床面南西隅に浅い柱穴が配される。

111号土坑 (第26図)

4・5号住居跡西の一群中にある。平面形は長円形を呈し、上端で長軸長1.2m、幅0.45m、深さ0.2mを測る。床面はほぼ水平となる。

出土遺物

土器 (図版10、第27図145～147) 145は肩部に断面三角突帯2条を付す壺で、小片化して数点が残る。突帯下位の文様帯に貝殻腹縁を使用しての渦巻き文を刻む。

146は如意形というよりはく字形に近く外反する甕。体部中位および口縁部外面が煤け、体部下位が赤く焼けている。147は口縁部が如意形に外反するもので、頸部に篋描沈線を刻む。

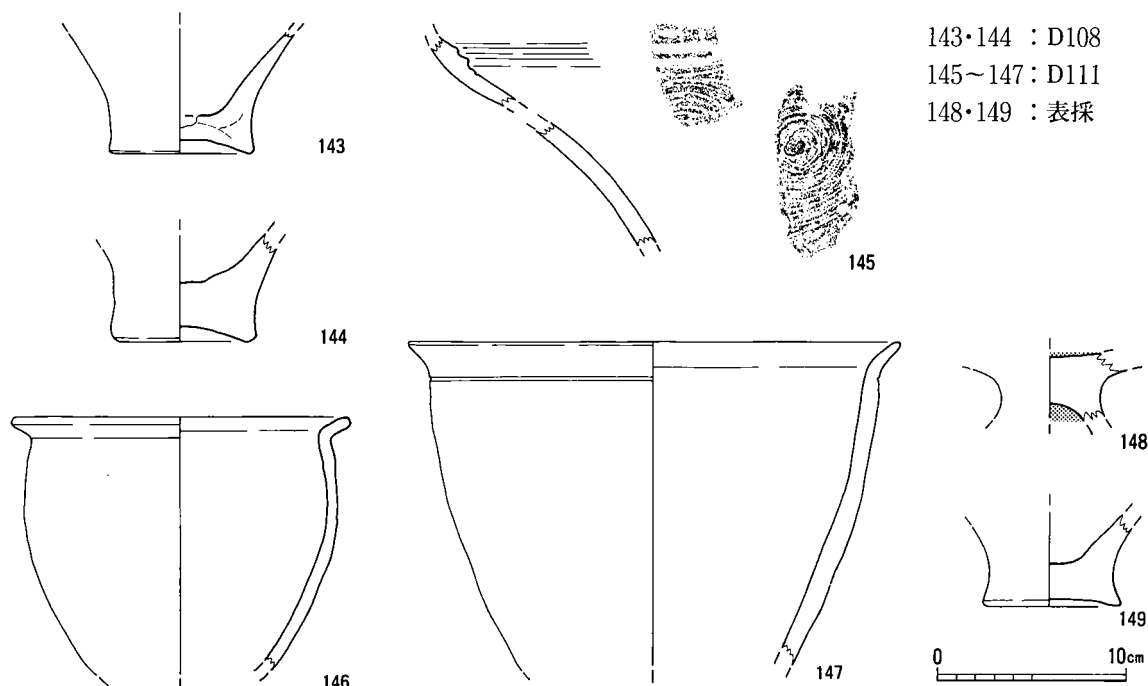
石製品 (図版12、第35図4) 灰白色の風化安山岩を使用した凹石で、下半を欠損する。器表全体が脆弱となって軟質な感を受けるが、図上下両面の中央付近が使用されて緩く窪む。

112号土坑 (第26図)

調査区西辺中央付近、発掘区境に単独で位置する。小型長方形の土坑で、上端で長さ0.95m、幅0.6mを測る。床面は地山が高位となる西側で高く、その深さは0.3mである。

113号土坑 (第26図)

調査区中央付近の2号溝状遺構の北端付近に位置する。実測は不整形となるが、本来は長方形を呈していたものと思われる。その場合の規模は上端で長軸長1.5m、幅0.8mほどとなり、深さは



第27図 土坑出土土器実測図7 (1/4)

0.3m強を測る。なお、北東小口部に比較的大型の柱穴がある。

114号土坑 (第26図)

113号土坑の北に近接する。平面形は辺長0.8mの隅丸方形に近く、深さは0.3m強を測る。

115号土坑 (第26図)

114号土坑の北東に位置する。図面上は二段掘りとなるが、柱穴と重複したものであろう。土坑部分は径0.7～0.8mの扁円形を呈し、深さは0.2mを測る。

116号土坑 (第26図)

調査区南隅付近、10号土坑の北に位置する。平面長円形の比較的大型の土坑で、上端規模は長軸長1.5m、短軸長1m強、深さ0.2mである。

117号土坑 (第24図)

2号住居跡の東、98号土坑に接して位置する。発掘時のミスと思われるが、平面形はやや乱れる。底径約0.7m、深さ0.25mの規模である。

118号土坑 (第26図)

調査区北辺中央付近、75号土坑の南に位置する。平面形はやや歪な円形で、上端径0.7m、底径0.5m強、深さ0.3mを測る。

119号土坑 (図第5図)

1号住居跡の肩に位置するが、これも先後関係は確認できていない。平面形は長円形に近く、床面で長軸長0.5m、短軸長0.4m、深さ0.2mを測る。

(3) その他の遺構と遺物

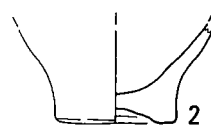
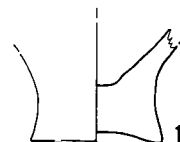
この調査では多くの土坑・柱穴などのほかに不整形の落ち込みや溝状遺構を検出した。そのすべてを網羅的に紹介できないが、いくつかの溝・柱穴について出土遺物を紹介する。

2号溝状遺構

調査区中央付近で検出した、長さ10m余、最大幅3m弱の不整形に近い遺構。深さは概ね数cmといったもので、溝というよりは窪みに堆積した包含層といった感じである。

出土遺物 (第28図1)

図示部が完周する底部で、上げ底で、かつ内底面は平らを意識するようである。非常によく焼けている。

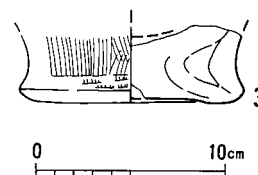


3号溝状遺構

5号住居跡の西側、等高線に平行する溝で、残存する長さ4m、幅0.5m、深さ0.3mを測る。

出土遺物 (第28図2・3)

2は底部が高台状を呈するもので、中央付近の器肉が非常に薄くなっていて、3は約1/4の残片。



第28図 溝状遺構
出土土器実測図(1/4)

P2

調査区南隅付近、3号土坑の北に近接する。上端径0.3m、深さ0.3mほどの通常の柱穴。

出土遺物

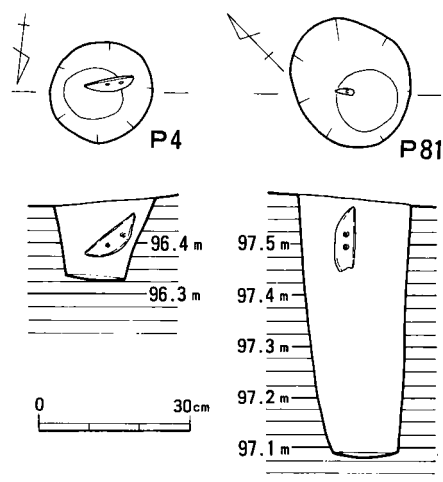
土器 (第30図4) 如意形口縁を有する甕の小片。器表が荒れる。

P4 (図版6、第29図)

調査区東南隅近くに位置する柱穴。上端で径0.2mの何の変哲もない遺構である。深さは0.15m。

出土遺物

石製品 (図版10、第32図8) 図のような偶然に生じたとは思えない状態で石庖丁が出土した。灰紫色砂岩製で、左右の先端の一部を欠く。現状で幅12.7cm、高さ5.9cm、厚さ0.7cmを測る。背は右側孔の上方付近から右側では表裏両面から研磨、左側では片面からなされる。刃部付近には明瞭な稜線が入り、刃部にはほとんど使用痕が認められない。穿孔のはじめ敲打を行い、後に回転を利用したようである。また、図に示した面では全面に粗い条痕が残るが、図下面では上半で縦方向の同様な条痕が残るものの、下半ではそ



第29図 柱穴実測図 (1/15)

れを消すように丁寧な研磨がなされる。

P6

調査区南隅近く、10号土坑の東に隣接する。長軸長0.6m、短軸長0.4mの長円形に近い柱穴で、深さは約0.3mを測る。

出土遺物

土器（第30図5） 口端部を小さく外方へ折り曲げ、外面が曲線を描き、内面に稜線をもつもので、断面三角突帯を付す。器表荒れるが、内面は篋磨きで調整されるようである。

P7

調査区南隅近く、13号土坑の西に隣接する。長軸長約1m、幅0.4m、深さ0.2mを測る。平面形は隅丸長方形を呈し、柱穴と呼称するが、土坑としたほうがより適当である。

出土遺物

石製品（図版12、第36図5） 黄白色を呈する多孔質風化安山岩の小石で、形状は整うが、明瞭な使用痕は見えない。直径4cm弱、厚さ2cm強で、重量は30gを測る。

P28

調査区南隅付近、49号土坑の西に位置する。一辺長0.45～0.5mの長方形に近い平面形を有し、深さは0.3mほどである。

出土遺物

土器（第30図2） 如意形口縁をもつ甕の小片で、頸部に2条に篋描沈線を刻む。

P48

調査区東辺中央付近、17号土坑の北に近接する。直径0.2m、深さ0.4mほどの規模である。

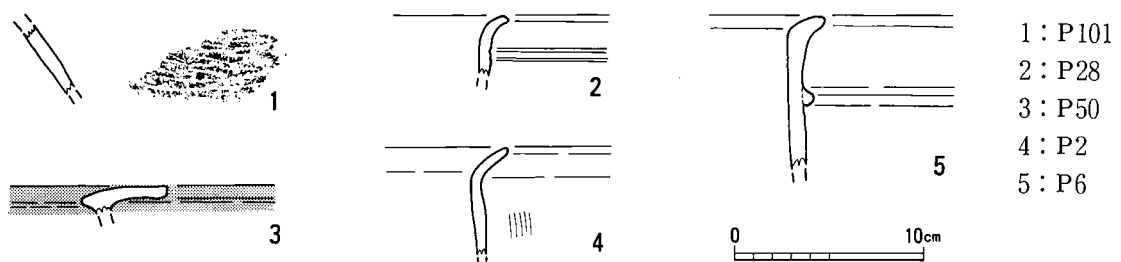
出土遺物

石製品（図版10、第31図10） サヌカイト製の打製石鏃。完存するが、器形・細部調整ともに粗略な製品である。重量は1.6g。

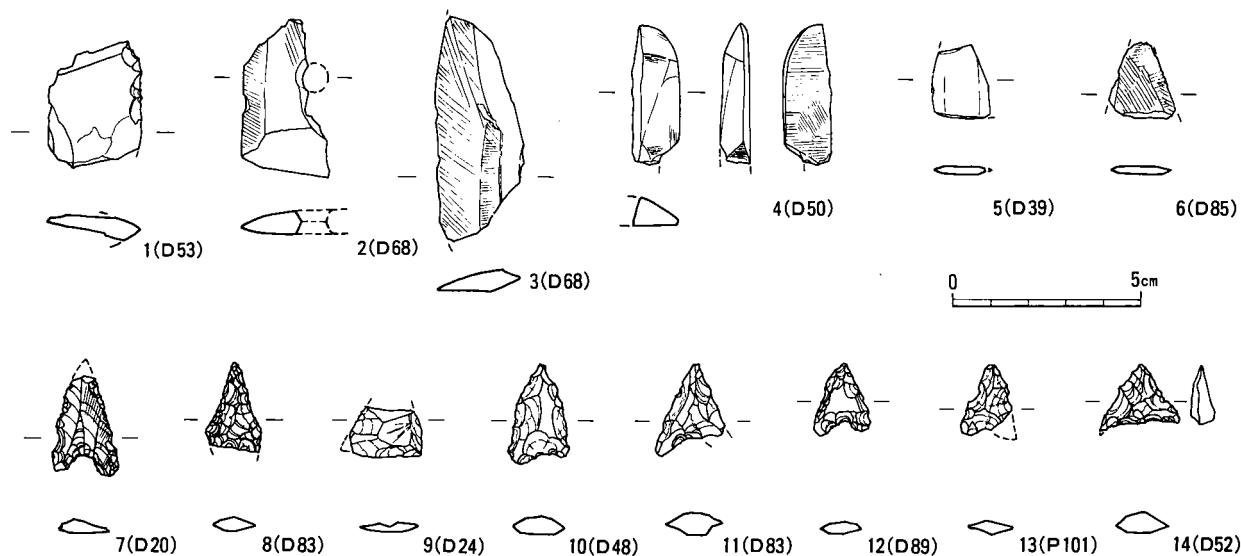
P50

調査区東辺の中央付近、耕作時の地境に位置する。直径0.3m、深さ0.4mの柱穴。

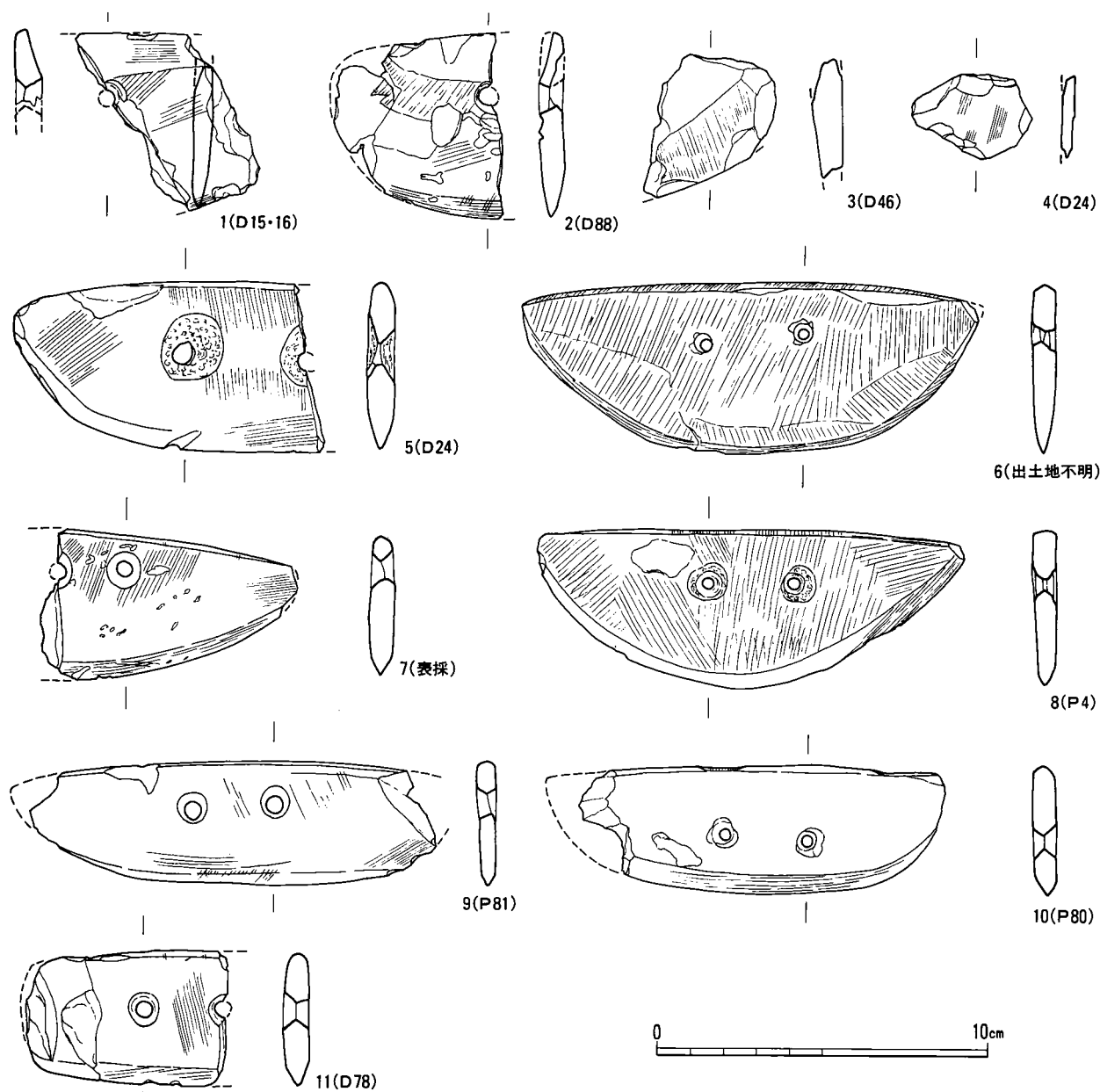
出土遺物



第30図 柱穴出土土器実測図（1/4）



第31図 土坑等出土石製品実測図1 (1/2)



第32図 土坑等出土石製品実測図2 (1/2)

土器（第30図3） 鋤先状口縁の小片。発達して上面が山形に彎曲する。なお、内外面に赤色顔料が塗布される。

P 62

調査区東辺中央付近、38号土坑の南に隣接する。直径0.2m余、深さ0.2mほどの柱穴である。

出土遺物

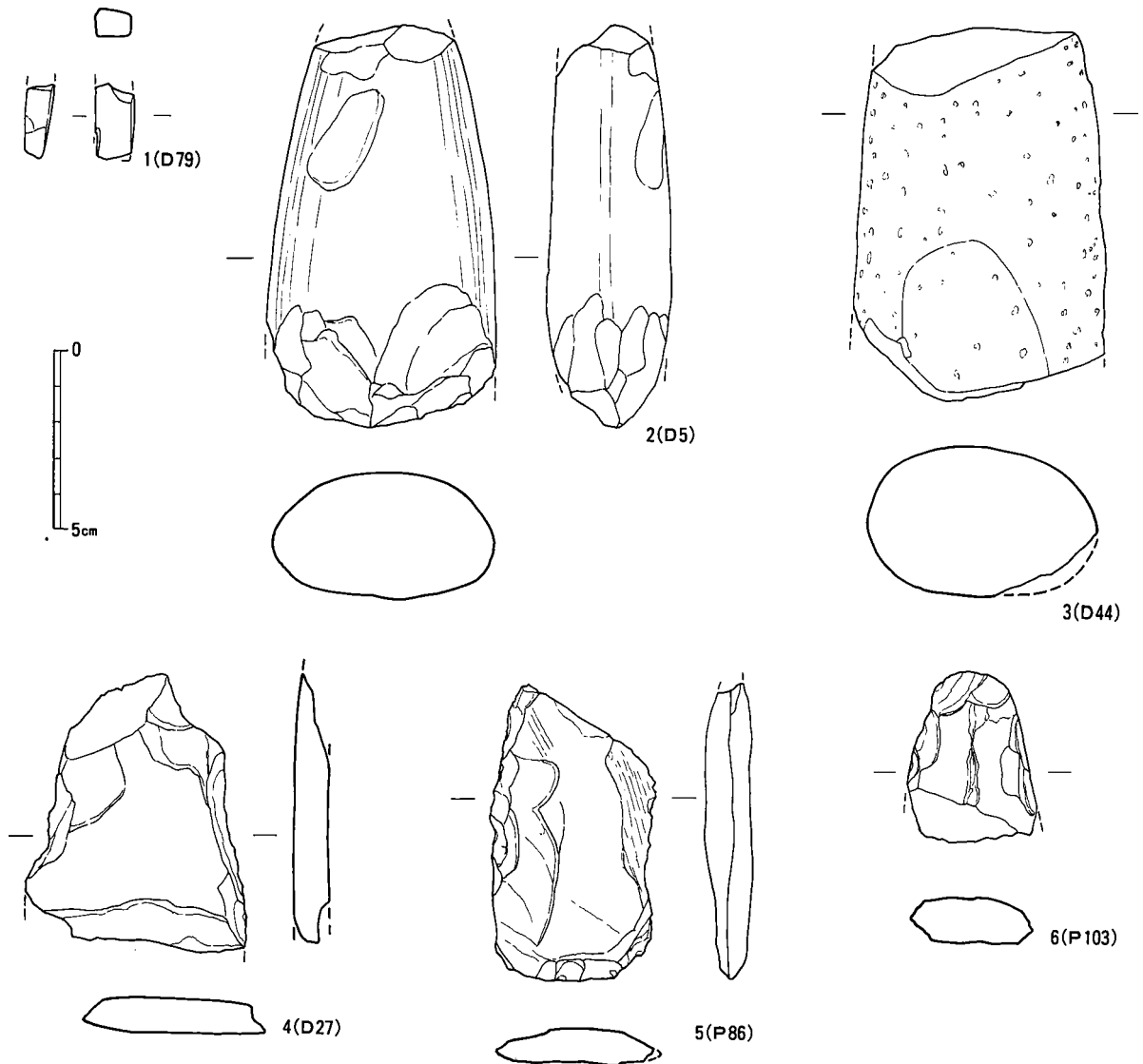
石製品（図版13、第39図36） 製品ではないようであるが、本遺跡では非常に珍しいので図示する。灰褐色を呈する玄武岩で、加工痕といったものは見られない。母岩であろうか。

P 66

調査区東辺中央付近、P50の北西に位置する。直径0.2m、深さ0.3mほどの規模である。

出土遺物

石製品（図版14、第41図2） 黄白色を呈する珪化木の剥片で、風化著しい。破損部を見ると内部は飴色（透明感のある茶褐色）となっている。剥離角はかなり鋭角である。



第33図 土坑等出土石製品実測図3 (1/2)

P80

調査区北辺中央付近、75号土坑の南に近く位置する柱穴。大きさは上端で直径0.25m、深さ0.2mほどの規模である。

出土遺物

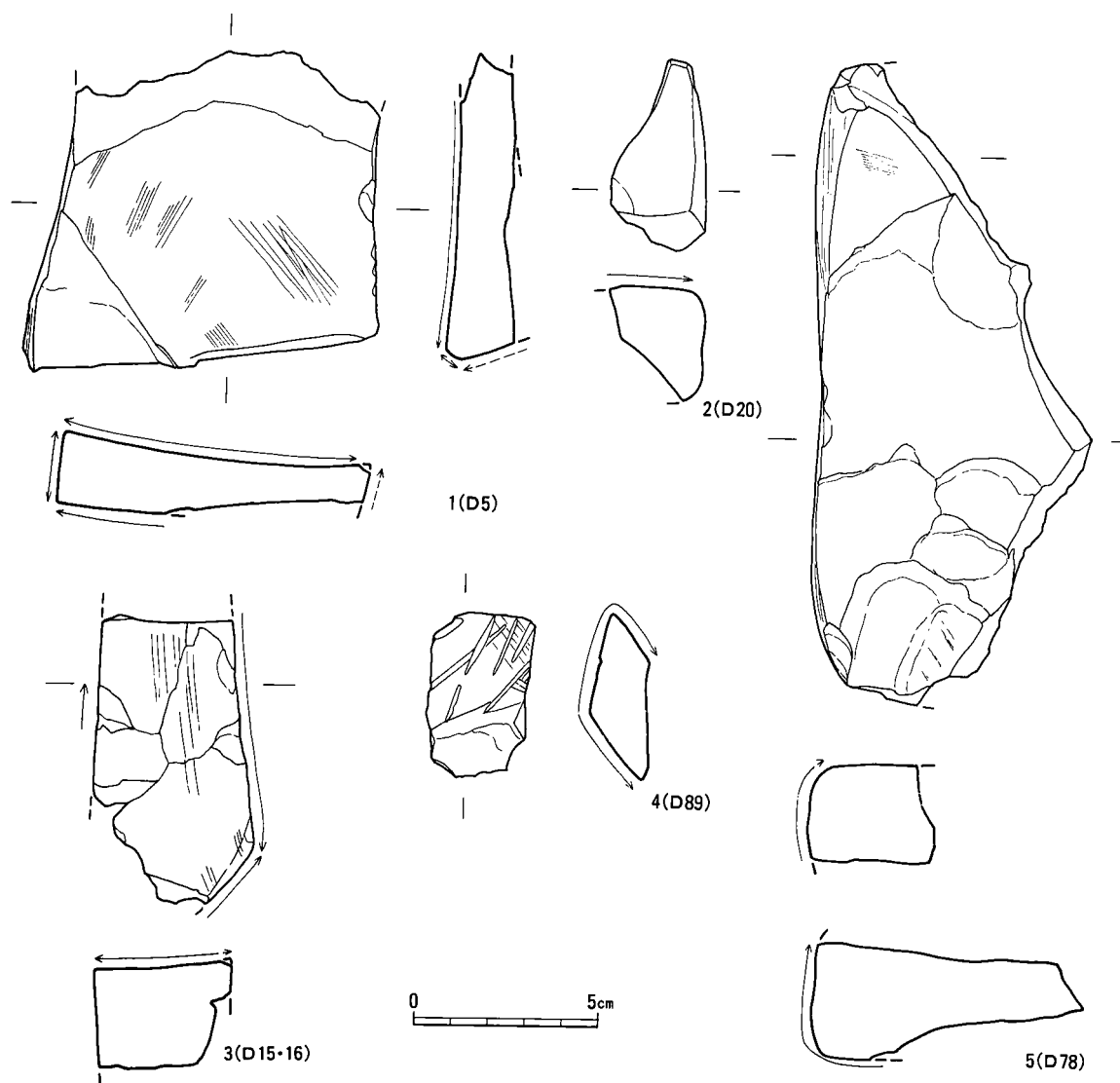
石製品（図版11、第32図10） 出土状態については確認できていない。赤紫色凝灰質砂岩製で、左端を欠く。背は部分的に面取りされたような部分があるが、概ね丸く作られる。刃部の稜線は明瞭。穿孔はやはり敲打と回転を併用する。仕上げの研磨は全体に丁寧になされるようである。

P81（図版6、第29図）

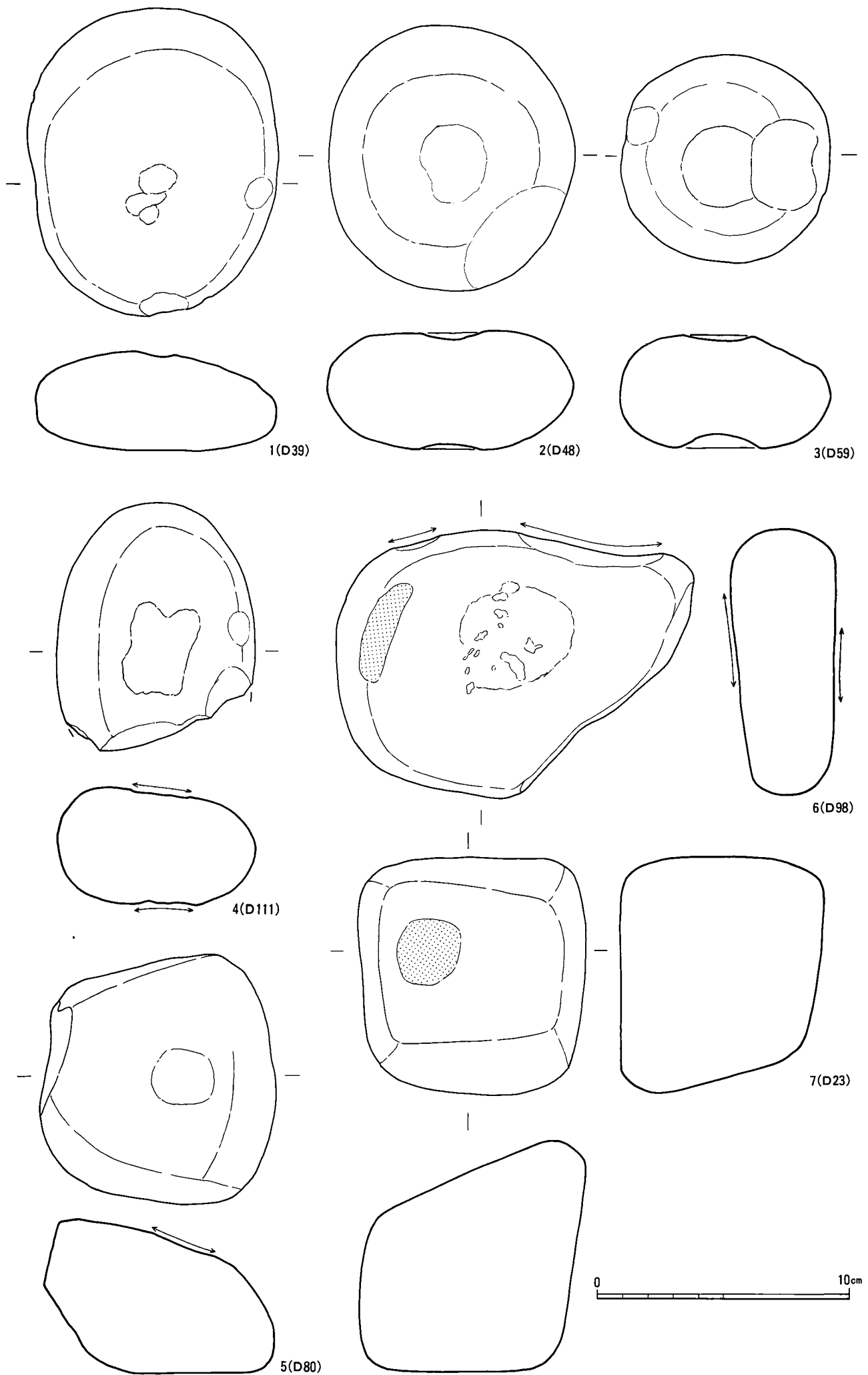
先のP80の南西、一段高い位置にある。柱穴は上端径0.25mほどの不整円形を呈し、深さは0.5m近かった。これも埋土等に特異なものは観察できなかった。

出土遺物

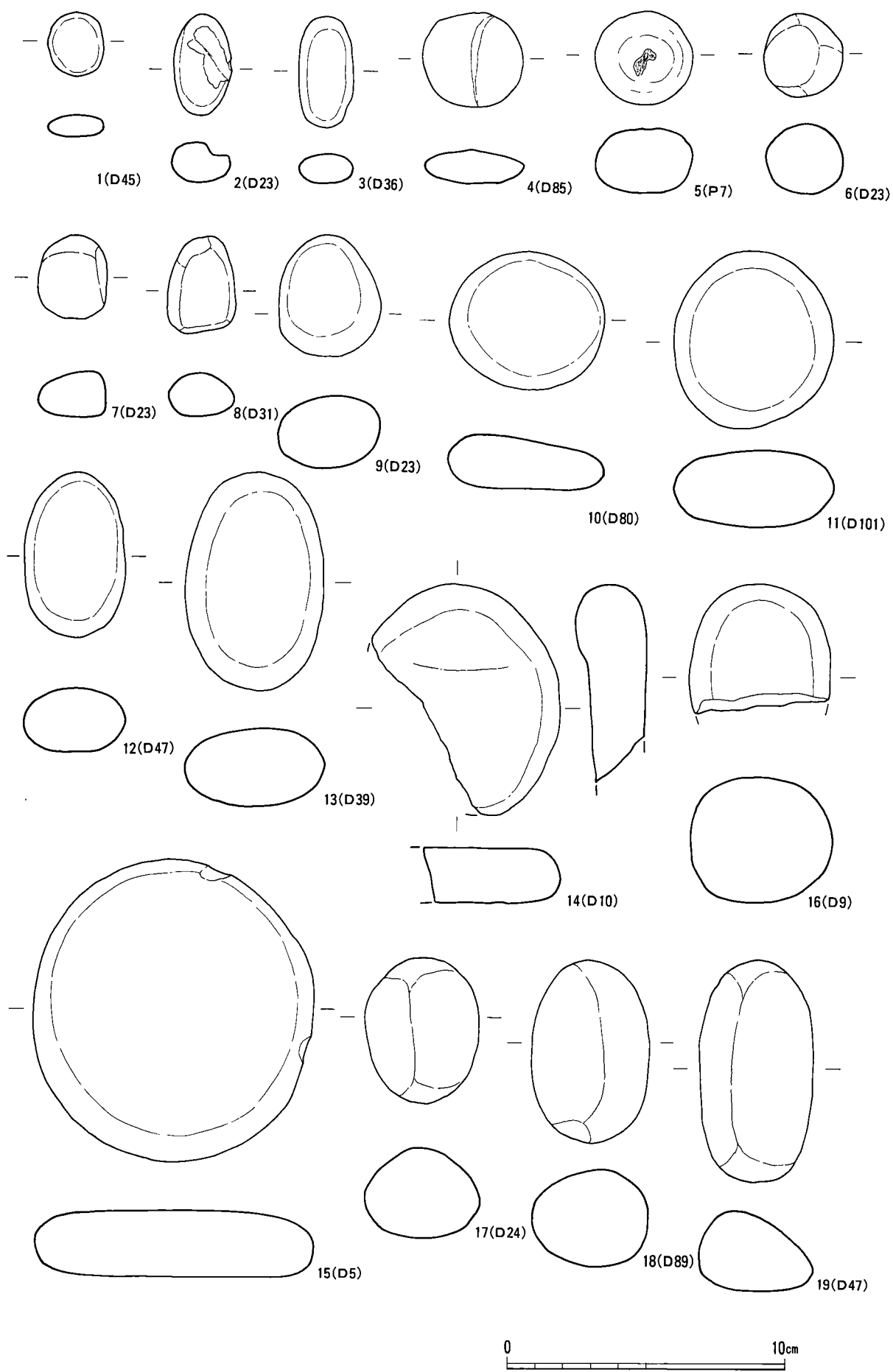
石製品（図版11、第32図9） 図のような状態で石庖丁が出土した。明灰色の細粒砂岩製石庖丁で、実測図の左端は発掘時の破損、右端は古い欠損である。背は丸く作られ、刃部は明瞭な稜をも



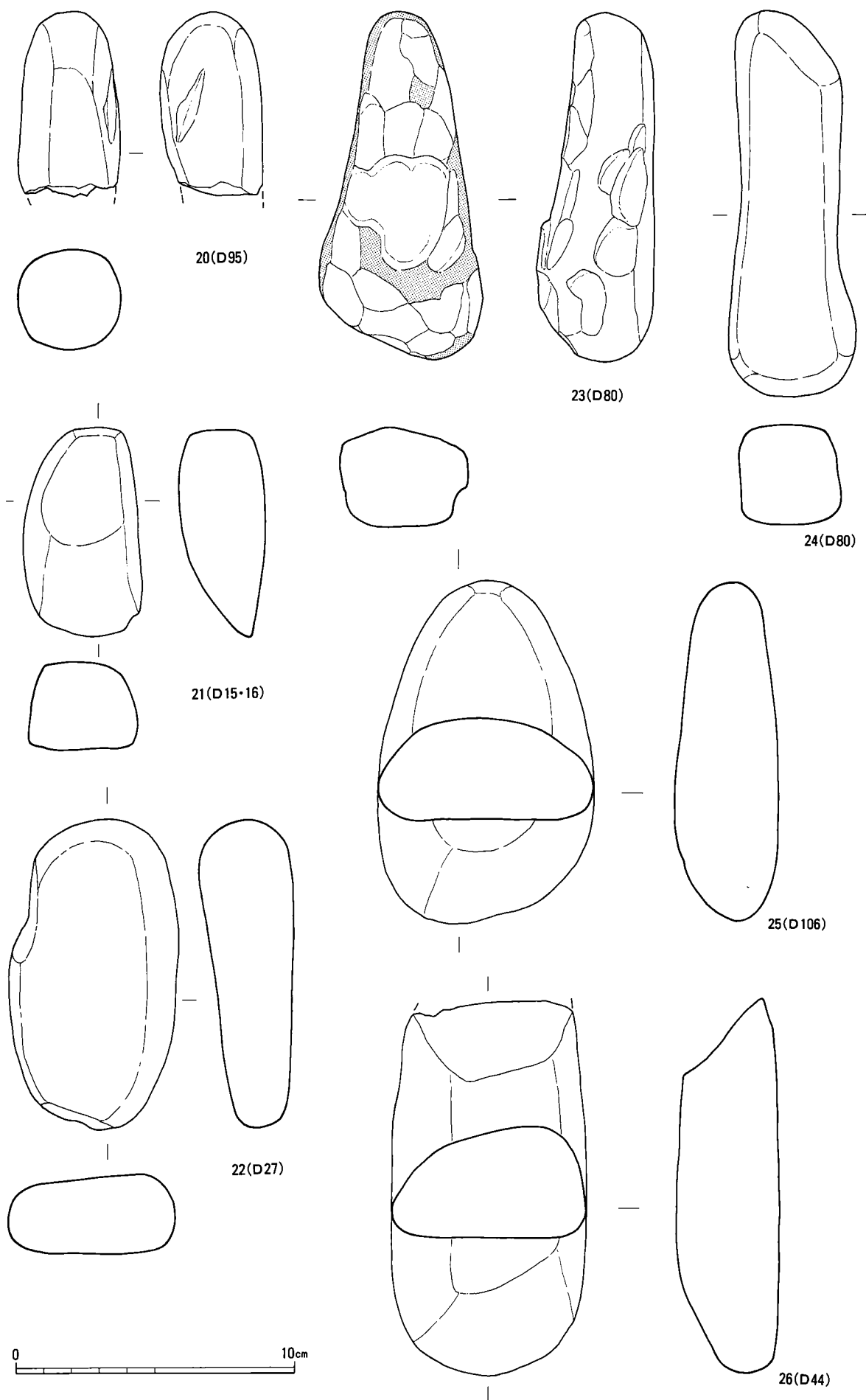
第34図 土坑等出土石製品実測図4（1/2）



第35図 土坑等出土石製品実測図5 (1/2)



第36図 土坑等出土石製品実測図6 (1/2)



第37図 土坑等出土石製品実測図7 (1/2)

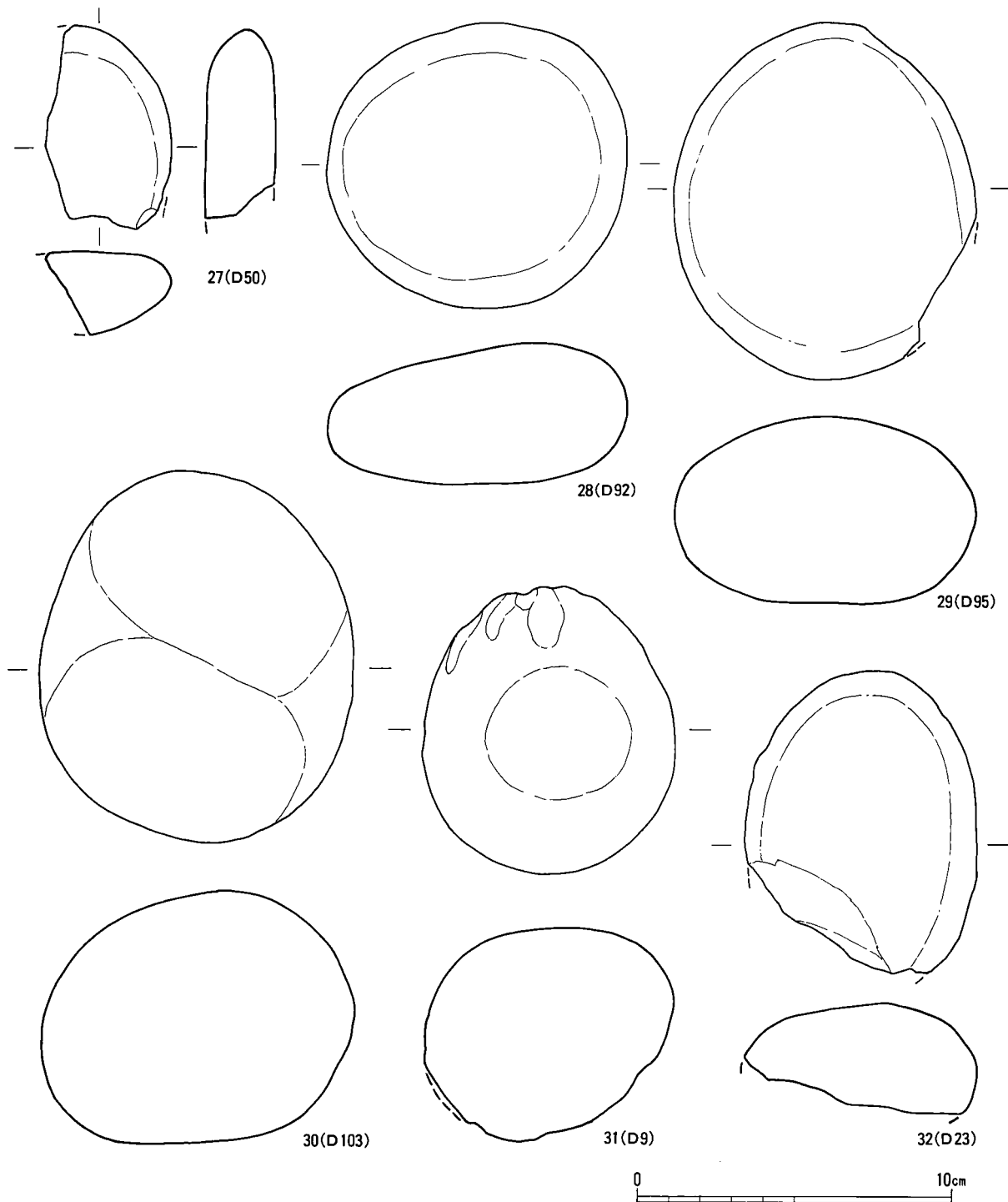
つ。孔は大きく、すべて回転を利用してなされる。仕上げの研磨も丁寧で、全体に作りがよい。

P86

P81の南、44号土坑に隣接する。上端径0.4m、深さ0.2mの規模である。

出土遺物

石製品（図版11、第33図5） 灰味の強い緑色を呈する小型の扁平打製石斧で、基部を欠く。これも細部調整は非常に粗雑である。



第38図 土坑等出土石製品実測図8 (1/2)

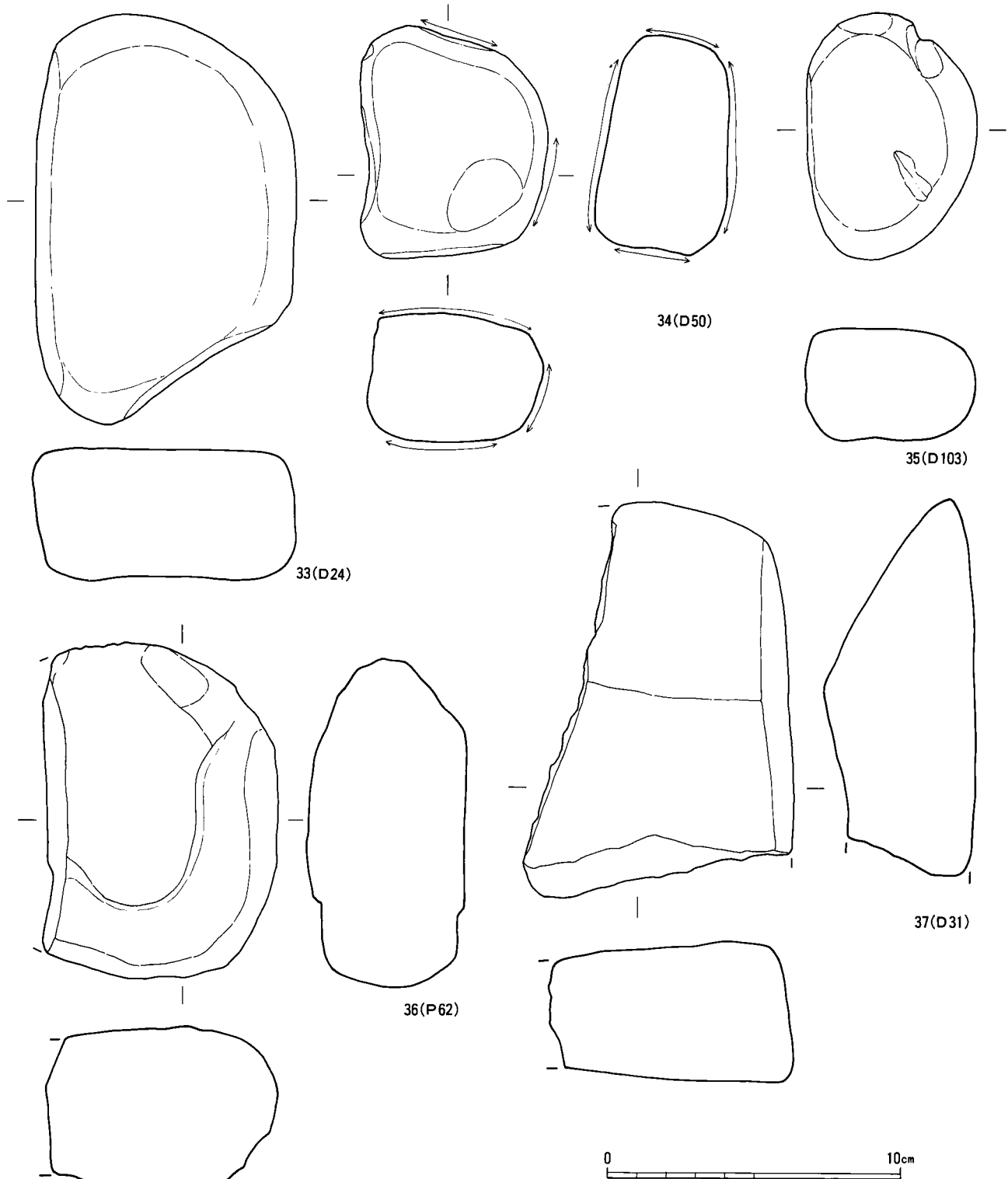
P101

調査区中央付近、2号溝状遺構の北端付近に位置する。上端径0.3m、深さ0.2m強の規模である。

出土遺物

土器（第31図1） 貝殻膜縁を押圧した無軸羽状文を有する壺の小片。器表荒れる。

石製品（図版10、第31図13） サヌカイト製の打製石鏃で、右逆刺の大部分と左逆刺の先端を欠損する。細部調整は粗雑であるが、左右両辺の中央付近には割り込みが施される。



第39図 土坑等出土石製品実測図9（1/2）

P103

調査区北東隅付近、70号土坑の西に隣接する。上端径0.3～0.4m、深さ0.3m近い規模を有する。

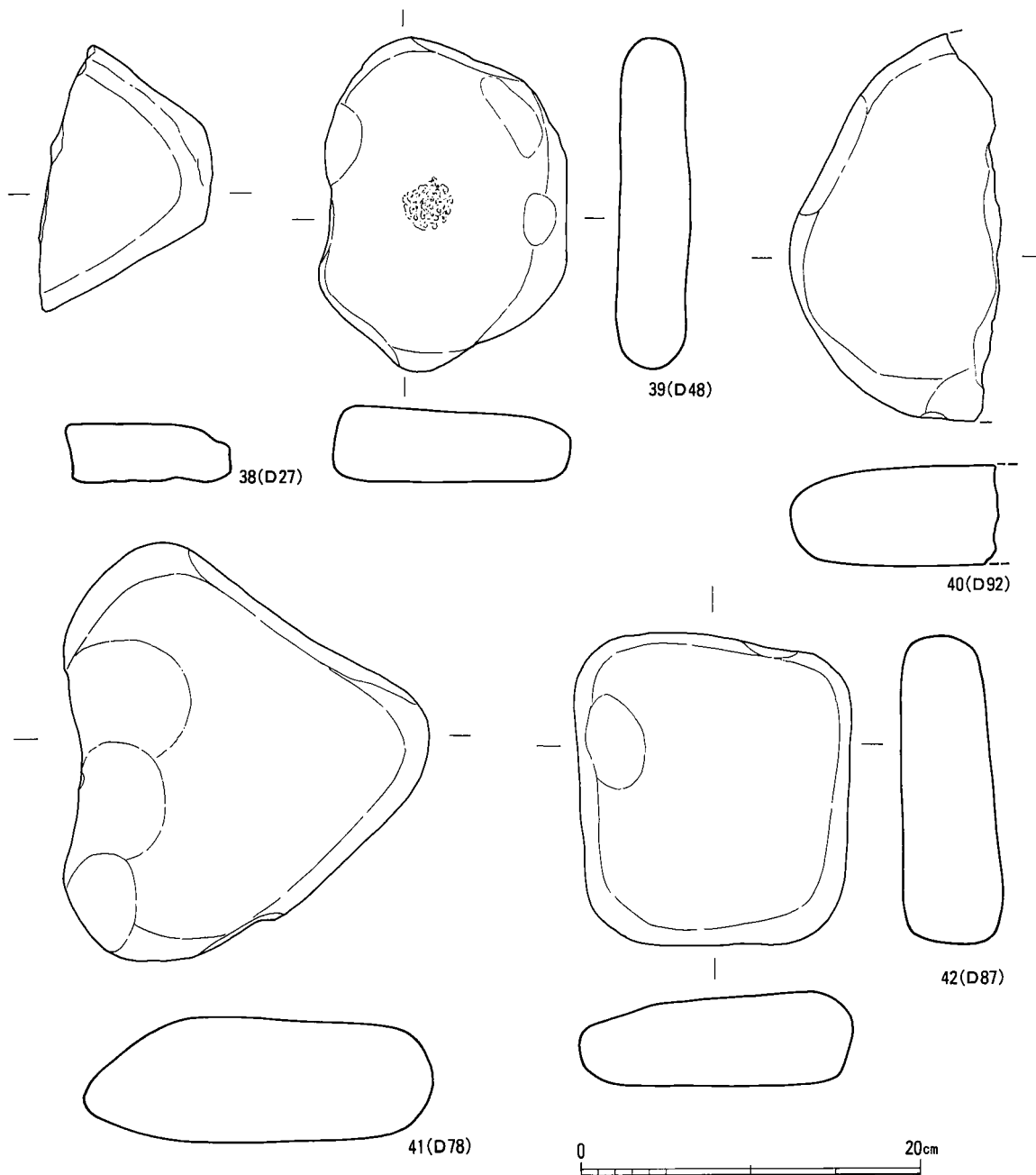
出土遺物

石製品（図版11、第33図6） 淡灰緑色緑泥変岩製の扁平打製石斧基部片。

表採資料等

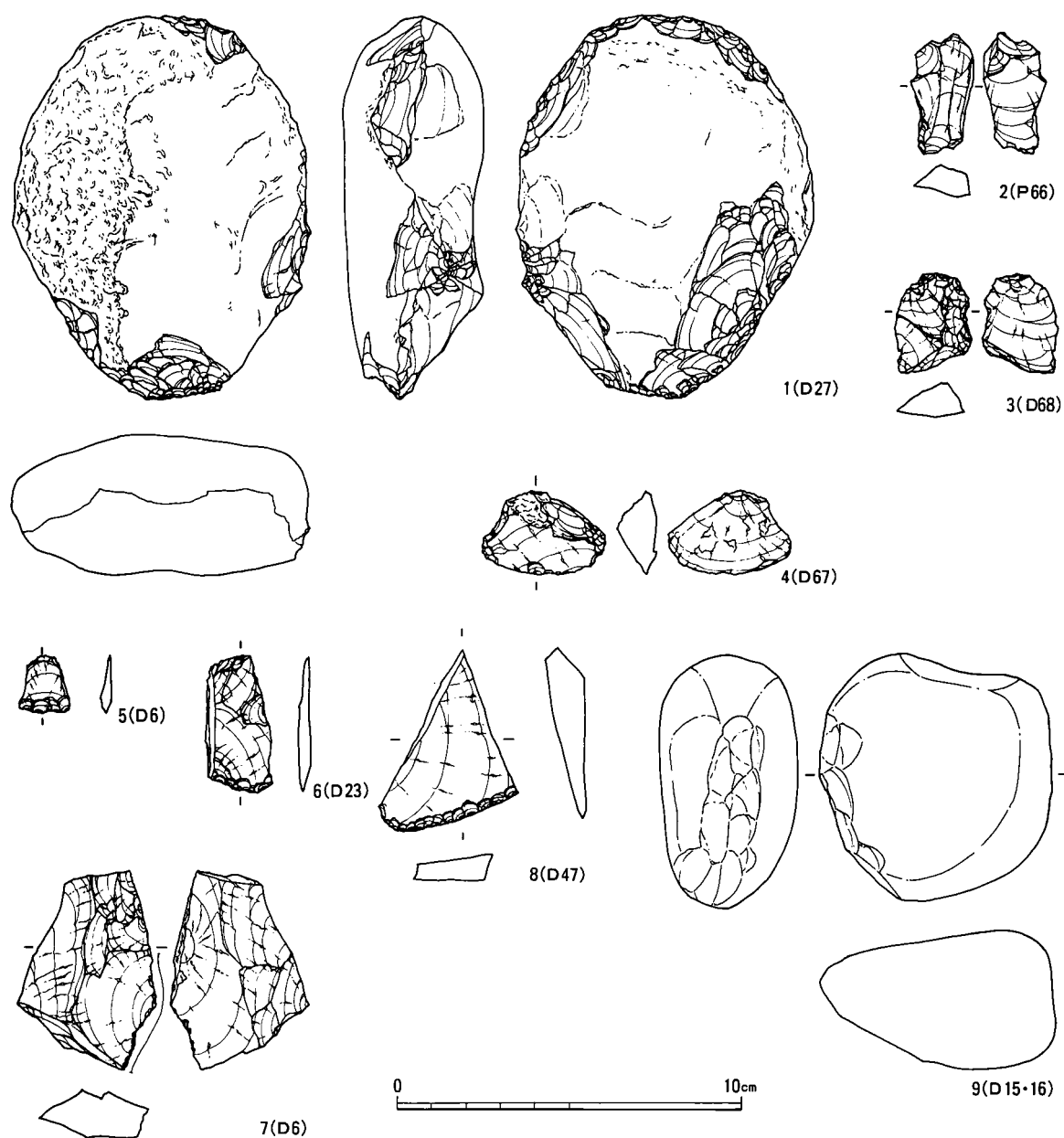
土器（第27図148・149） 148は高杯であろうか。上面および脚内部が黒色に塗られるもの。
149は完周する底部で、内定面を平らに作るもの。

石製品（図版10、第32図6・7） 6は灰黄色を呈する細粒砂岩製石庖丁で、図右端の一部を欠



第40図 土坑等出土石製品実測図10（1/4）

くほかはの完存する。出土地の記録がなく、ここで紹介する。残存の幅13.6cm、高さ5.2cm、最大の厚さ0.7cmを測る。背は表裏から研磨されて、中央付近で明瞭な稜を作る。背から身にかけても多くで稜をもつが、部分的に丸くなる部分もある。孔は小さく、外周に小さな敲打痕が残るが、表面のみで内部は回転穿孔される。身の全面に粗い研磨痕が残るが、大部分が表裏でほぼ逆方向となっている。7は表面に小さな窪みが多く現れる赤紫色頁岩製で、表採品である。背は丸味をもち、刃部の稜もごく弱い。穿孔は回転を利用してなされる。仕上げの研磨は非常に丁寧で、微細な条痕が部分的に見えるのみである。



第41図 土坑等出土石製品実測図11 (1/2)

Ⅳ おわりに

報告に見るように削平が著しいものの、個性ある弥生遺跡であることが判明した。今回の調査では集落の一部を検出し、北に位置する北垣古墳群中では弥生中期の祭祀土坑とされる遺構や、同終末期頃と推測される石棺墓群（一部は方形周溝を伴う）などが発見されている。両者は一部で関連性が認められるが、なお羽熊遺跡の墓域や北垣古墳群中の石棺墓群を造営した人々の居住域は不明で、周辺には広域に遺跡の存在が予想される。

1) 集落の時期

住居跡からの出土遺物は決して豊富ではないが、出土土器の多くが中期前半～中葉を中心とするものである。中で、3号住居跡出土の甕は、発達した口縁部の形態や突帯の位置から判断して後出的で中期後半に属する。

土坑では93号土坑・20号土坑が前期的な遺物を出土するが、後者は中に厚底の中期的な遺物も混入することから中期初頭頃に比定できる。また78号土坑出土土器は先の3号住居跡と同様の特徴を有し、遺跡の終焉を示している。全体にまとまった資料に乏しいが、図示した範囲ではなお遠賀川式の形態を保つ有文の壺、口端部外面に粘土帯を付して水平な面を形成する甕あるいは厚底・上げ底の甕底部が目立ち、典型的な鋤先状口縁はほとんどない。したがって、遺跡は中期初頭に開始され、同後半には廃絶したようである。といっても、北垣古墳群中の墓域を考慮すれば、本遺跡から遠くない位置に移動したと考えられる。また、開始期は前期末へ遡る可能性を否定できない。

2) いわゆる「貯蔵穴」について

今回の調査で検出した主要な遺構は袋状土坑と呼称した、いわゆる「貯蔵穴」である。ほぼ38基がそれと思われる形状を呈するが、削平などの理由からそれと確認できないものも考慮すれば50基近く存在するものと思われる。当然ながら、調査区外に想定されるものも含めれば倍する規模の遺構が想定される。ここでの特徴はその規模である。底径規模が最大のものでも1mを越えるものはなく、0.9m台のものも4基に過ぎない。この規模の特異さは周辺の例を見れば明瞭である。若干の例を記してみよう。本遺跡の北7kmの低丘陵上にある竹並遺跡では92基の中、底径1m未満の例はわずかに2基である。その東の微高地上の鬼熊遺跡では57基中の4基が1m未満で、そのいずれもが径0.8m以上である。祓川下流の川の上・神手遺跡（両者は道路で画されるが、本来は祓川右岸の段丘上に連続する遺跡）では62基の中、底径1mに満たないものは7基、中の4基が0.8m以上であった。残りの3基は0.6～0.8mの規模である。京都郡内最大の弥生遺跡である下稗田遺跡では1、850基ほどの袋状堅穴を調査するが、底径1m未満のものはわずかに27基で、そのうち15基は径0.9m以上、5基が0.8～0.9mの規模であった。この羽熊遺跡の袋状土坑の存在が際立っていることが納得できよう。

貯蔵穴の使用法としては中国の古典などを引用して食糧－コメ・マメ・ドングリ類の貯蔵がなされたものとされている。小都市横隈山遺跡から出土した稲束や宗像市石丸遺跡から出土した甕に納

められた靱などの例はまさしく貯蔵穴の使用法を窺わせるものであるが、排水性を優先したために壊れやすい土壤に占地することとなり、結果として耐久性の欠如は避けがたいものであったようである。往々にして密集し、発掘時に殆どが廃棄された状態で検出される事実がその短命を物語っている。当地では多くが花崗岩パイラン土（いわゆる真砂土）に、本遺跡ではクサリ礫を含む赤土（洪積層）に掘削されていた。

それはさておき、本遺跡で小規模な袋状土坑のみが営まれたことの理由は何であろうか。先述した下稗田遺跡の例では、例えばⅠ－Ⅱ地区の貯蔵穴571基の中、短期の所属時期が比定される遺構300余基ではMサイズとされる底径1.5～2.5mのものが各時期を通じて優位にある。また、時期ごとに規模についての有意な差異は看取できない。これは一例であるが、先に引用した既報告の遺跡では、前期～中期中葉（一部後半）にかけての例が報告されるが、やはり規模と所属時期との間には関連性は窺えない。したがって、彼我の差異はその使用法、ひいては貯蔵する内容物にあったと推測されるが、その詳細については判断する材料をもたない。一つの仮説はドングリなど堅果類のアク抜きに利用されたとするものである。調査時に土坑の床面近くに粘土層が薄く堆積する例を多く確認している。本遺跡の地山は透水性の低い土質であり、注水すれば水さらしの用をなすと思われる。また、58号土坑で検出した礫群は、重石として利用されていた状況を否定するものではない。今後、やはり国道496号線改良工事に伴ってに計画されている犀川町弓馬場遺跡の調査内容に注目したい。



第42図 調査風景スナップ

遺構 番号	位置	規 模 (m)			備 考	遺構 番号	位置	規 模 (m)			備 考
		口 径	底 径	深 さ				口 径	底 径	深 さ	
1	C1					61	E4				
2	C1	0.65~0.7	0.55~0.6	0.2		62	F4	0.9	0.8	0.1	(袋状)
3	C1	0.65~0.75	0.75	0.25	袋状	63	D4		(0.5)	0.55	扁円状、袋状
4	C1					64	E3	0.8	0.55~0.65	0.7	
5	D1	0.75	0.8	0.45	袋状	65	E3				
6	D1	0.7	0.9	0.5	袋状	66	E3				
7	D1					67	E3		0.5~0.6	0.15	長円形
8	D1					68	E3				不整形
9	D1	0.7~0.75	0.8	0.45	袋状	69	F4	0.7~0.9	0.5~0.8	0.2	隅丸三角形
10	D2					70	F4				道路状
11	D1	0.65	0.55	0.2		71	D3				柱穴
12	D1	0.9	0.7	0.45	袋状	72	D4	0.6	0.5	0.2	
13	D1	0.75	0.65	0.65	袋状、13⇔14	73	D4				柱穴
14	D1	0.6	0.6	(0.60)	袋状、13⇔14	74	E3	0.5~0.8	0.4~0.6	0.6	円形
15	D2	0.65	0.6	0.7	袋状	75	D5				焼面有り
16	D2	0.65	0.75~0.8	0.85	袋状、15⇔16	76	D3				不整形
17	D2					77	D3				浅い方形
18	D2					78	C5				グリッド
19					欠番	79	C2	0.65	0.8	0.6	袋状
20	B1					80	B3	0.7~0.8	0.85~0.95	0.7	袋状
21	B2					81	B3	0.85	0.9	0.65	袋状
22	B2					82	B3		0.7~0.8	0.2	不整形円形、床ビット
23	B2	0.75	0.9	0.65	袋状、24と接する	83	B3	1.5~1.6	1.3~1.5	0.5	円形
24	B2	0.65	0.6	0.65	袋状	84	B3				不整形(溝状)
25					欠番	85	B3	0.9	0.6~0.7	0.15	床ビット
26					欠番	86	C2	0.6	0.5	0.3	円形
27	A2					87	B3	2.2×1.1	0.6×1	0.4	長方形
28	A2	0.6	0.55	0.25	袋状	88	B3				柱穴
29	A3	0.6	0.8	0.6		89	B3				柱穴
30					欠番	90	B3				溝状
31					欠番	91	B3	0.6~0.7	0.85	0.6	袋状
32	B2	0.45	0.5	0.5	袋状	92	B3	0.65	0.6	0.35	袋状
33	B2					93	B3	0.4	0.3	0.25	
34	D2	0.45	0.5	0.5	袋状	94	B3	0.6~0.8	0.5~0.6	0.4	浅い土坑と重複
35	D3	0.6	0.5	0.3		95	B3	0.5	0.55	0.4	袋状
36	D2					96	B4	1.2~1.6		0.4	不整形長円形
37	D2					97	B4	1.4×0.7	1.25×0.6	0.3	長方形
38	E1					98	C3	0.65	0.7	0.8	袋状
39	D3	0.65	0.7	0.7	袋状	99E	B4		0.6	0.4	袋状、2基重複
40	D3					99W			0.6	0.3	
41	D3					100	B4	0.7	0.75	0.3	袋状、床に小柱穴1
42	D3					101	C4	0.8	0.7	0.3	
43	D3	0.6~0.7	0.6~0.75	0.3	扁円状、袋状	102	C4				溝状
44	D3	0.55	0.65	0.55	袋状	103	C3	0.65	0.6	0.4	
45	D4	0.6	0.65	0.4	袋状	104	C3	1.8×0.9	1.4×0.7	0.6	不整形長方形
46	D4	0.7	0.7	0.5	袋状	105	C3				不整形
47	D3	0.75	0.75	0.65	袋状	106	C3				不整形
48	D3				不整形、浅い	107	C4				4号住居跡の炉
49	C2	0.7	0.7	0.55	袋状	108	C4	0.8~1.2	0.7~1.15	0.1	
50	D4	1.45	0.8	1.4		109	D2	0.5	0.6	0.6	袋状
51	D4	0.5	0.45	0.45		110	D2	0.6	0.6	0.45	不整、袋状、床隅にビット
52	D3					111	C4	1.2~4.5	1.05~3.5	0.2	長円形
53	D3					112	C4	0.95×0.6	0.85×0.5	0.3	
54	E3	0.8	0.8	0.3	袋状	113	C3	1.5×0.8	1.3×0.6	0.25	(長方形)
55	E3	0.7~0.8	0.7~0.8	0.5	袋状	114	C3	0.8	0.7	0.35	隅丸方形
56	E3	0.7	0.7	0.3	袋状	115	C3	0.7~0.8	0.5~0.6	0.2	扁円形
57	E3		0.6	0.2		116	D2	1.05~1.5	0.9~1.4	0.2	長円形
58	F3	0.8	0.9	0.4	袋状	117	C3	0.8	0.7	0.25	円形
59	F4	0.7	0.6	0.2	袋状	118	D4	0.7	0.55	0.7	円形
60	F4	1.3	1.1~1.2	0.1	袋状	119	B3	0.6~0.8	0.4~0.5	0.2	長円形

第1表 羽熊遺跡検出土坑一覧

図 版



1. 上空から北（節丸地区）を望む



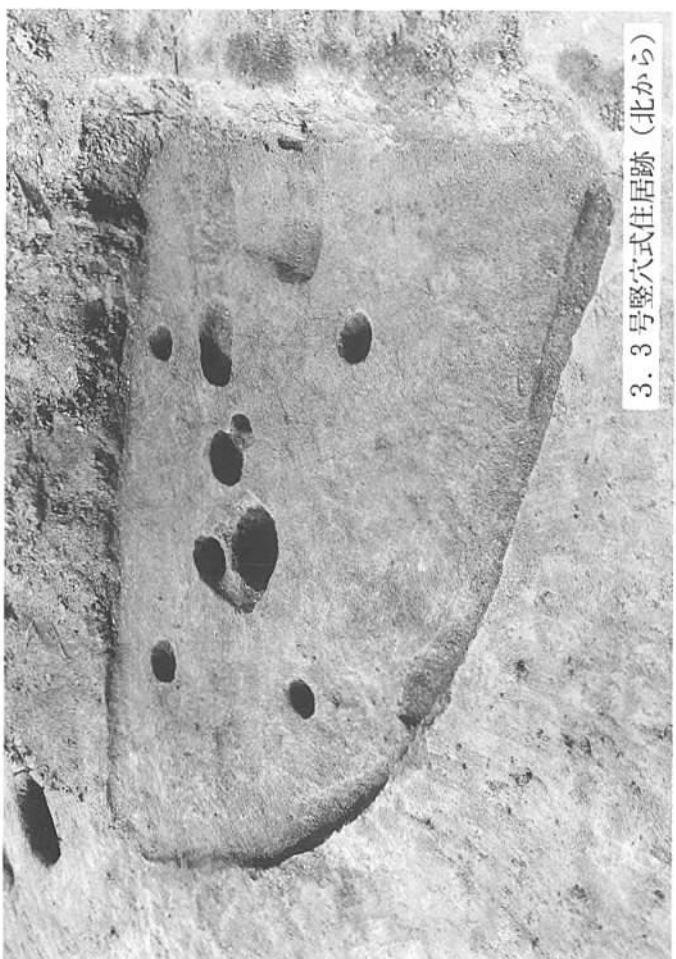
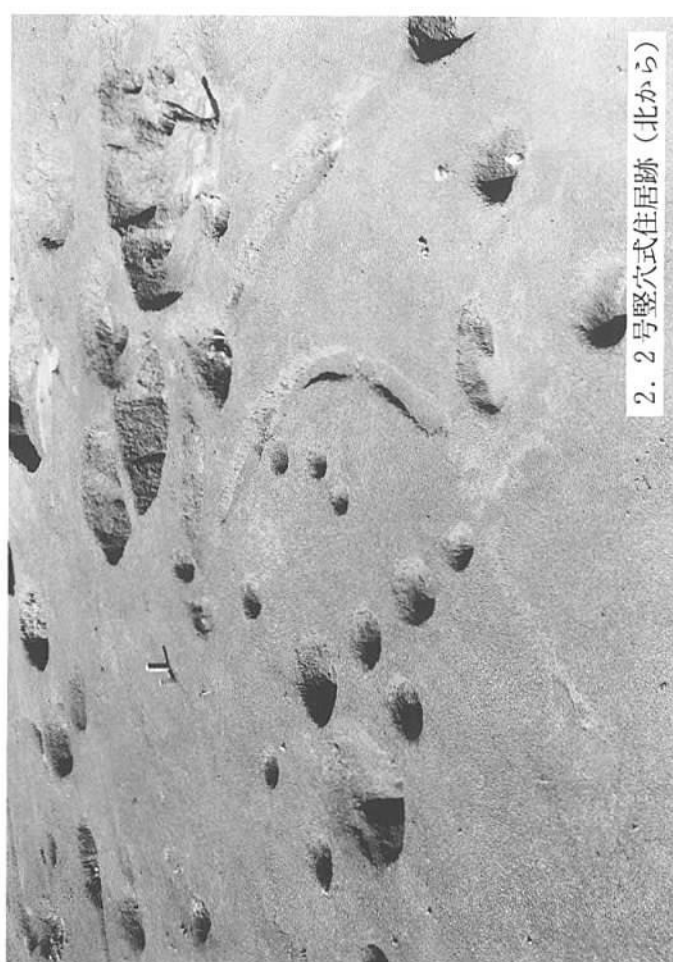
2. 上空から東（祓川）を望む

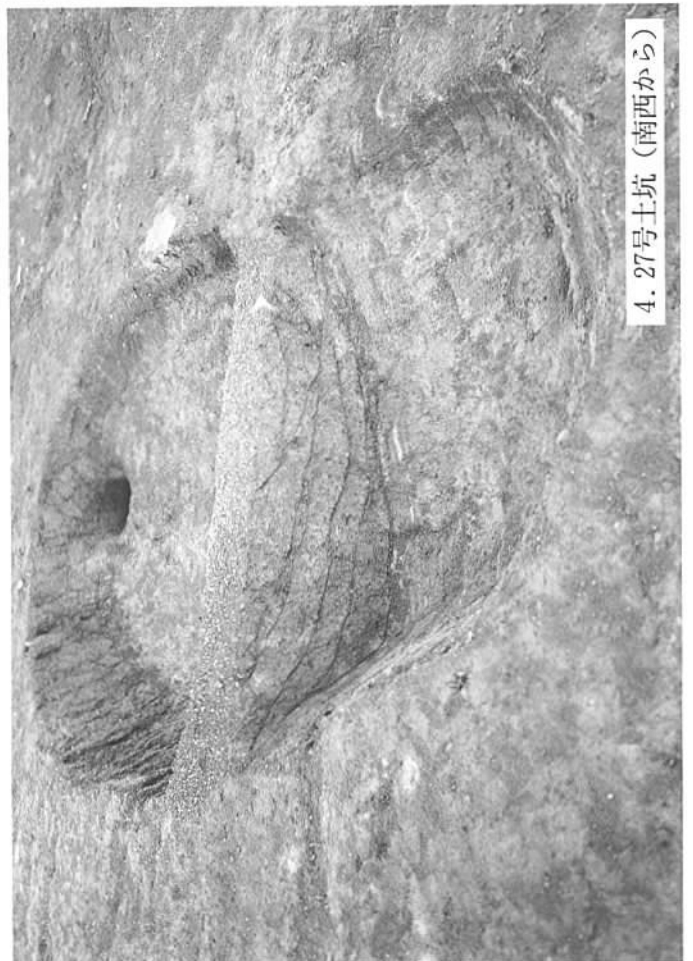
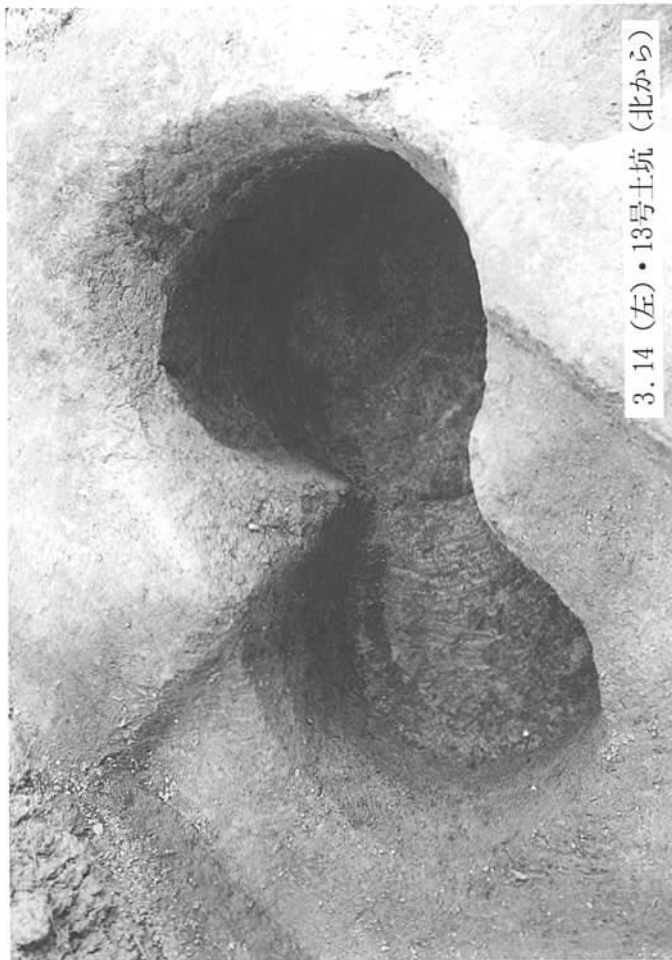
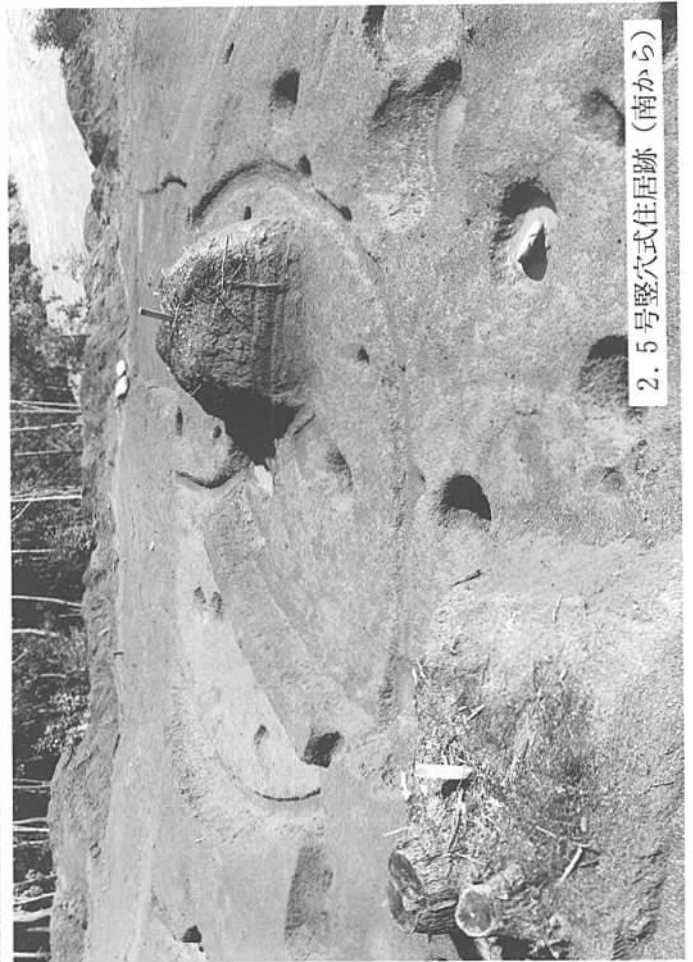


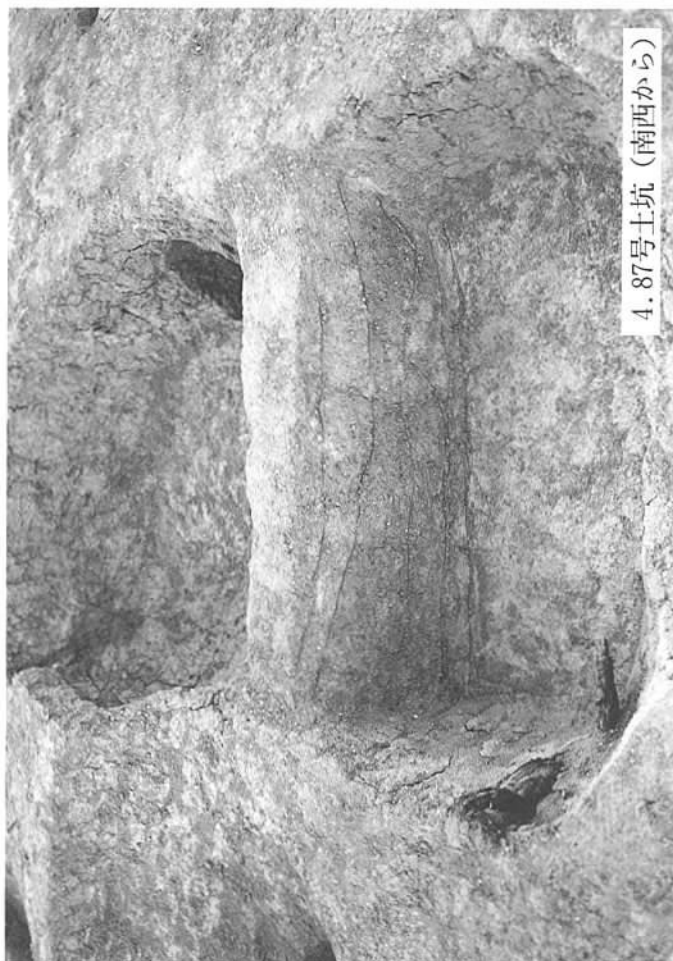
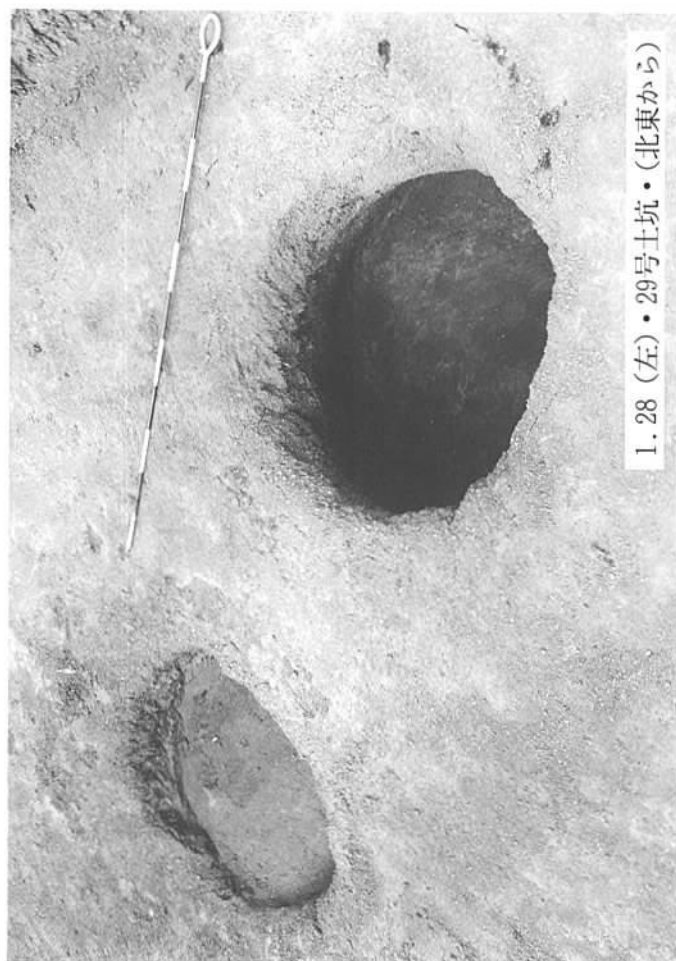
1. 全景（西上空から）



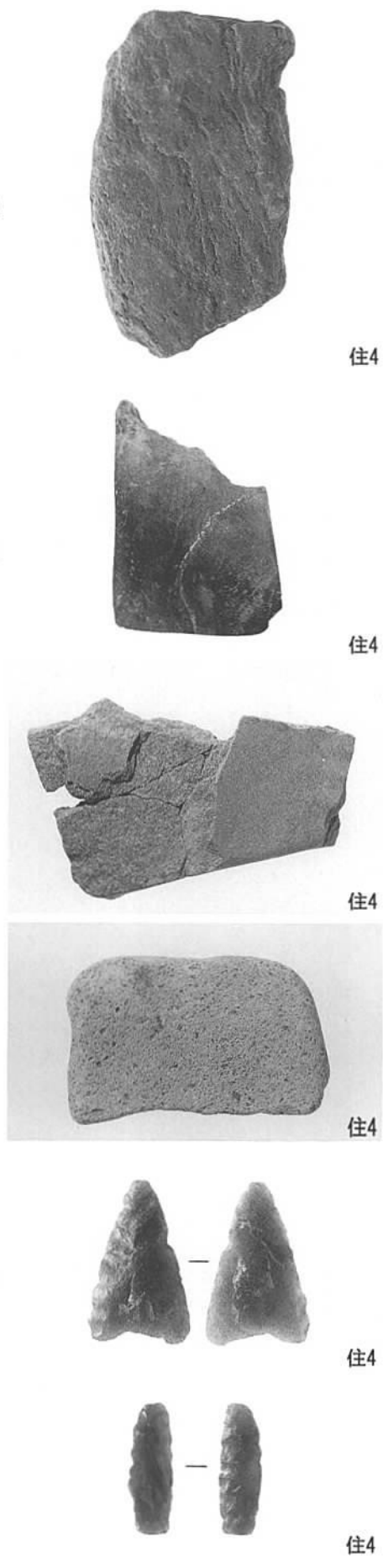
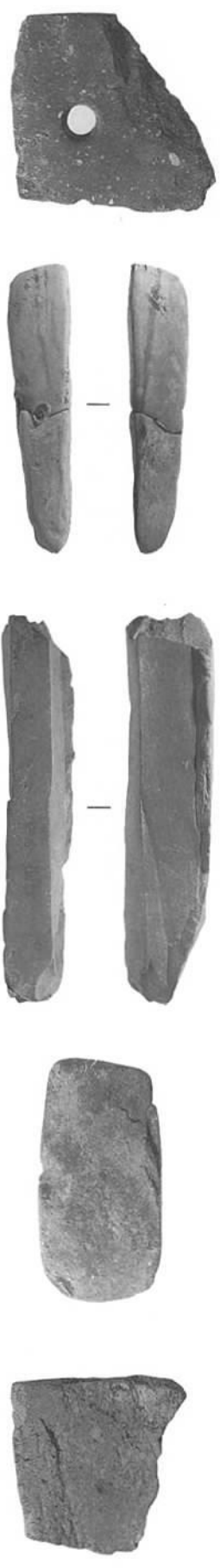
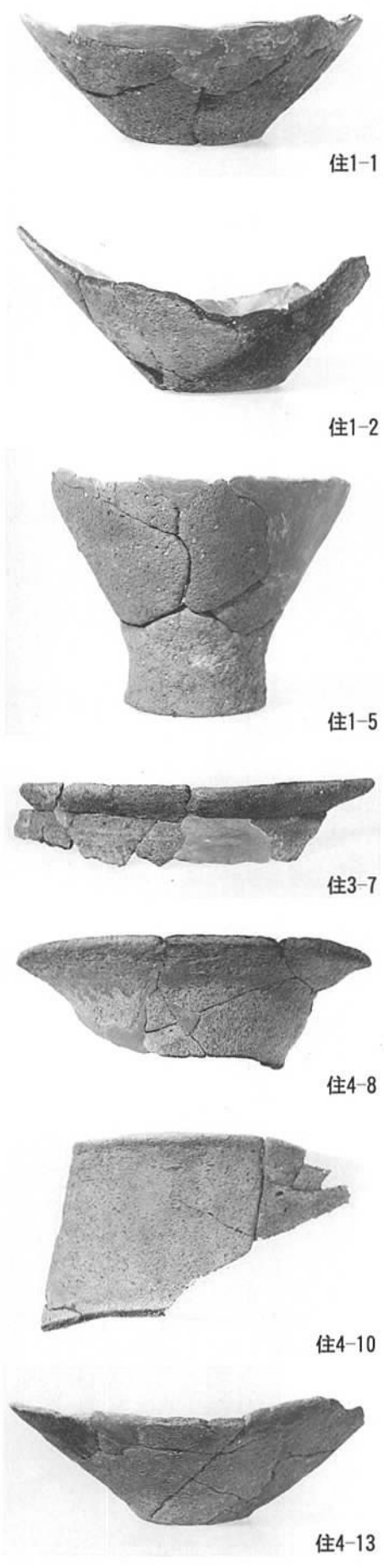
2. 住居跡群全景（西上空から）



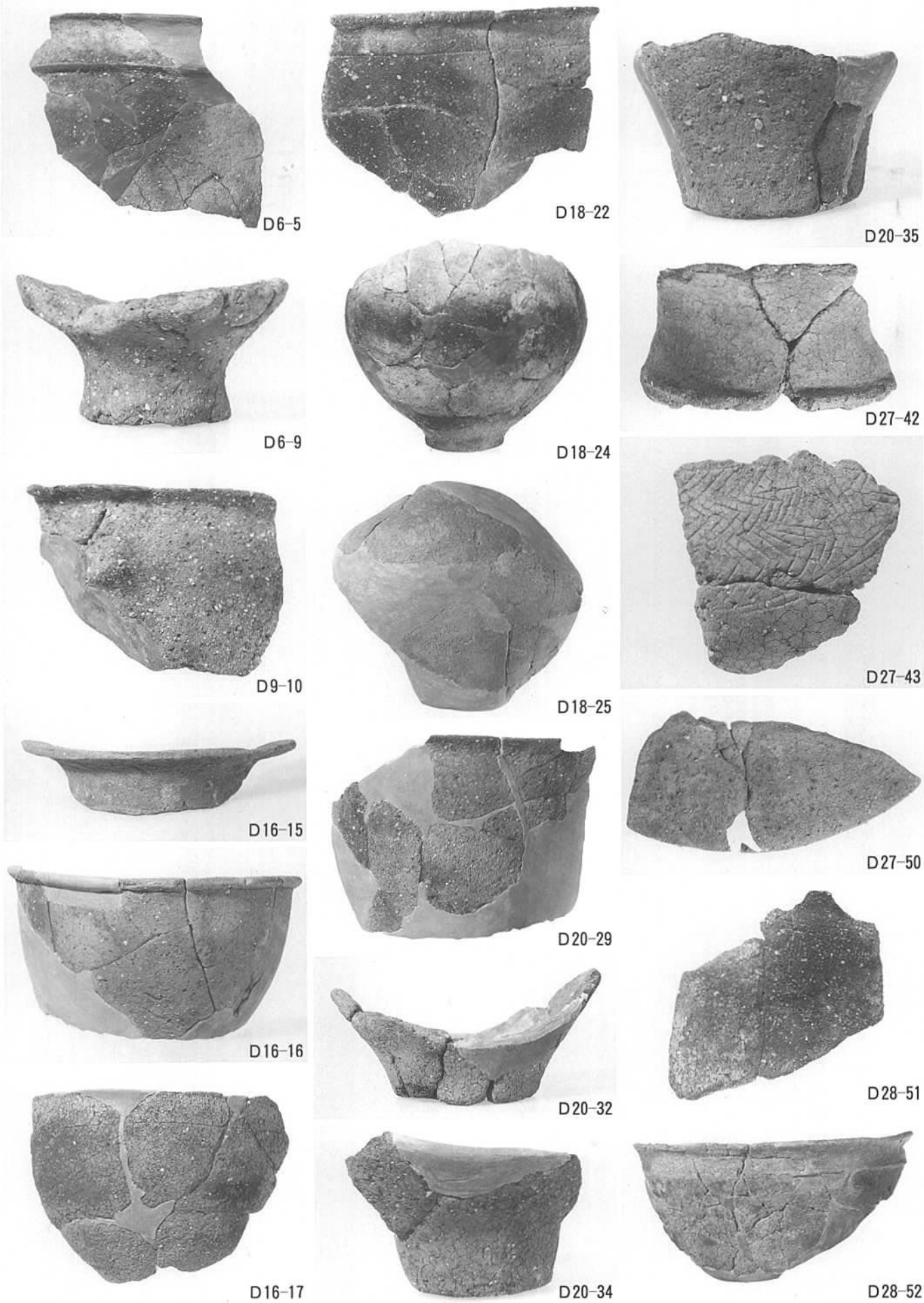




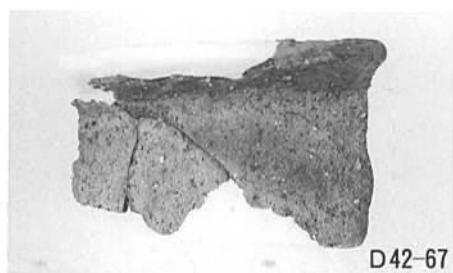




出土遺物 1 (住居跡)



出土遺物 2 (土坑出土土器 ; D6・9・16・18・20・27・28)



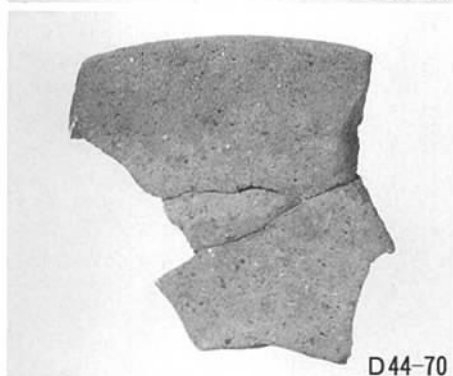
D42-67



D54-99



D83-118



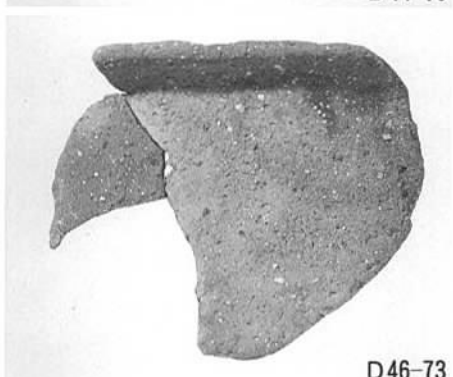
D44-70



D57-101



D91-125



D46-73



D68-103



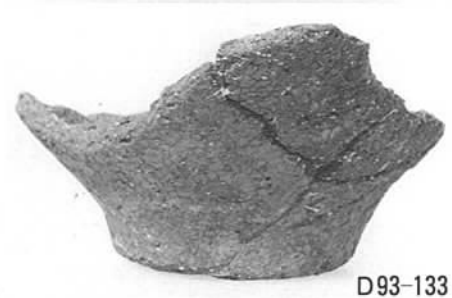
D93-129



D47-75



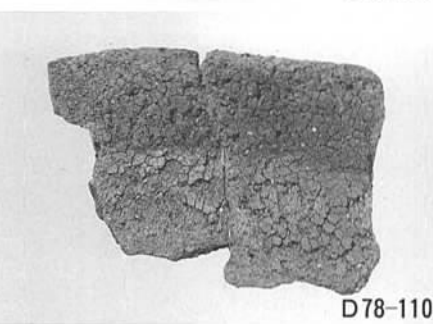
D75-107



D93-133



D47-80



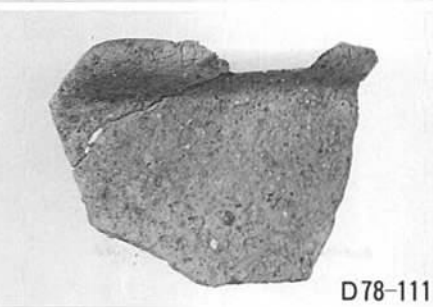
D78-110



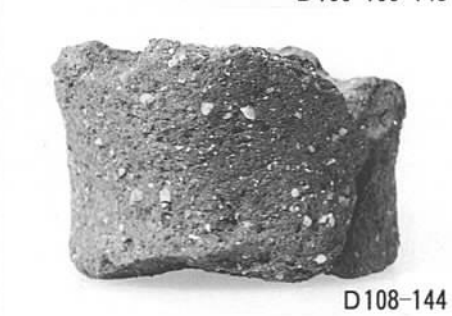
D106-108-143



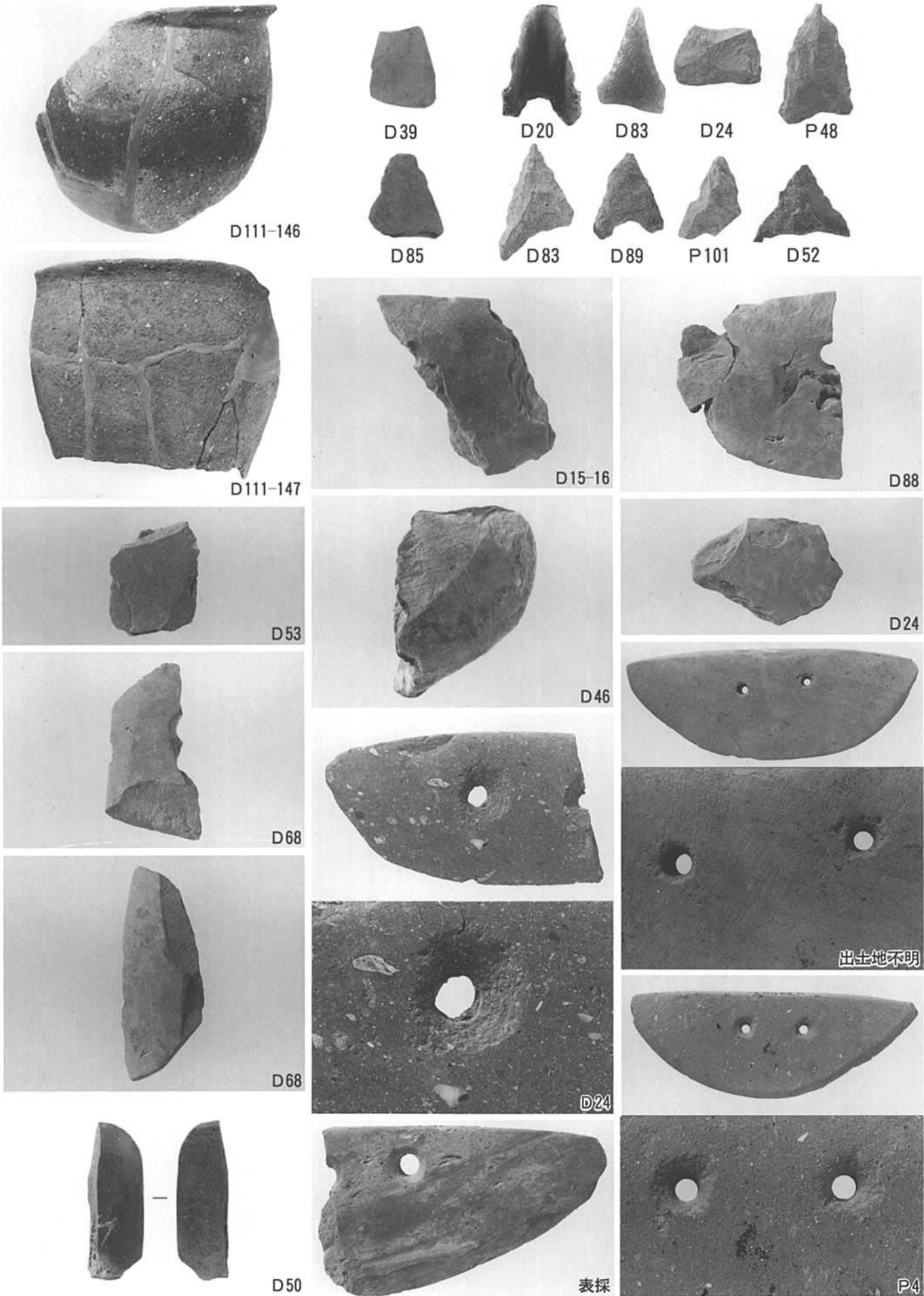
D47-76



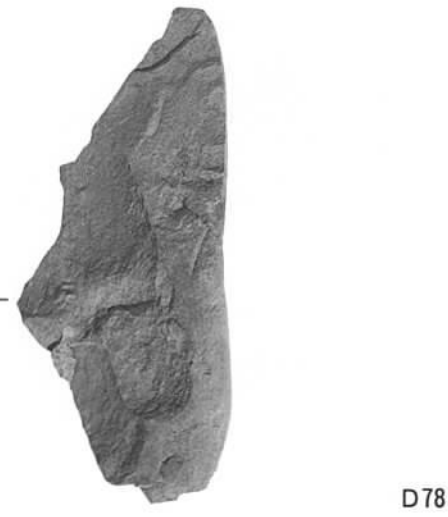
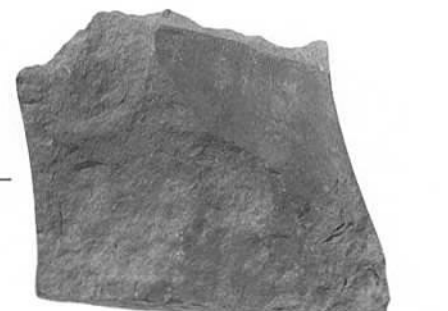
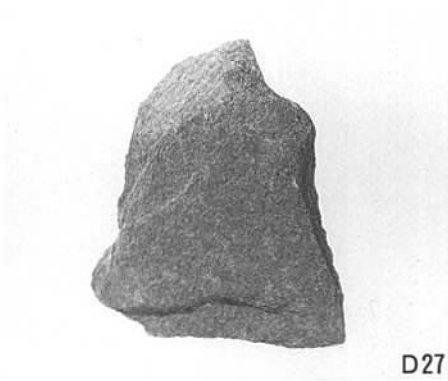
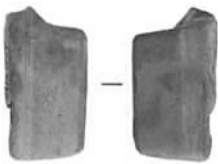
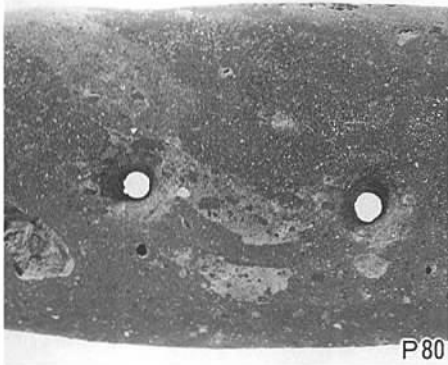
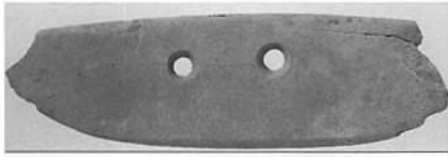
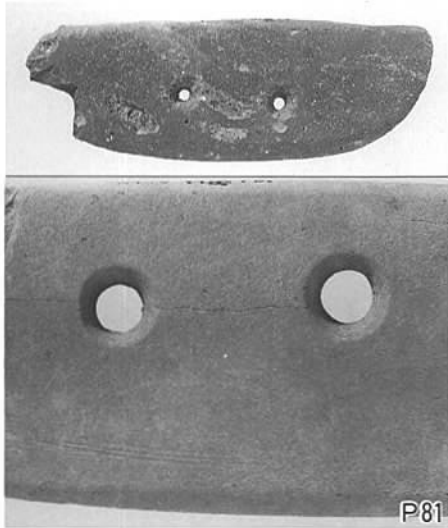
D78-111



D108-144



出土遺物 4 (土坑出土土器 ; D111、石製品 ; 石庖丁)



D44

D27

P86

P103

P80

D5

D78

D15·16

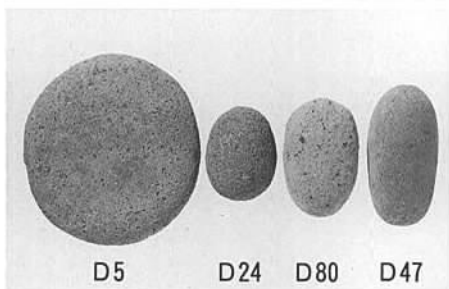
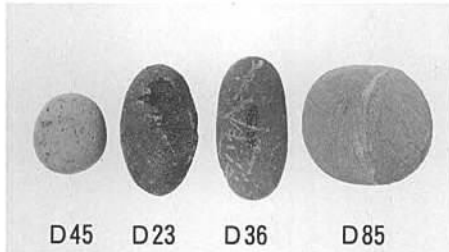
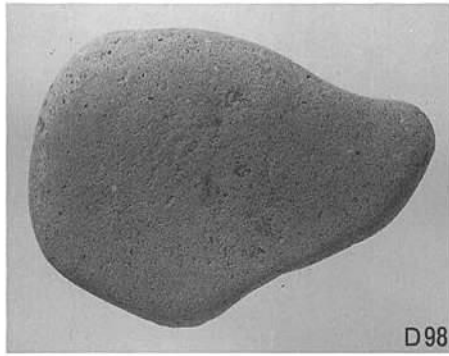
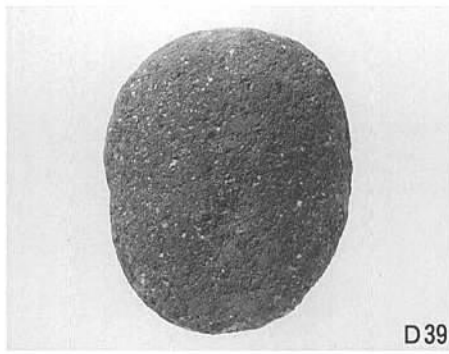
D89

D79

D5

D78

出土遺物 5 (石製品; 石庖丁・石斧・砥石)



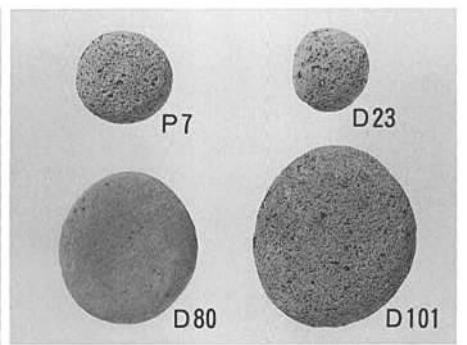
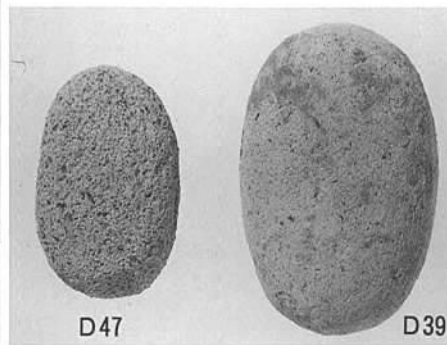
D48



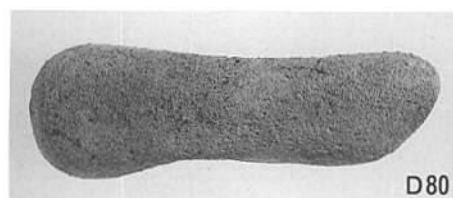
D59



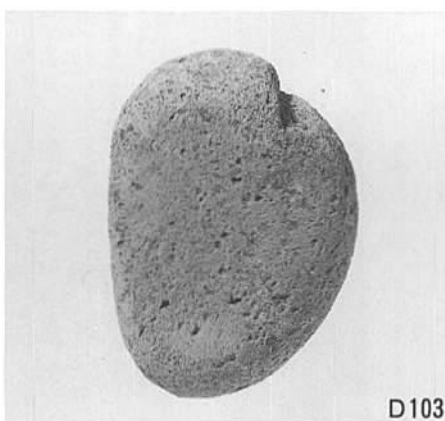
D111



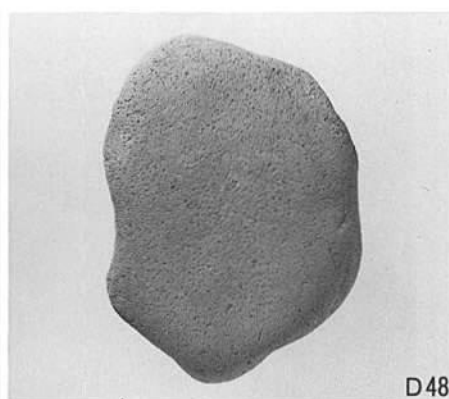
D80



D80



D103



D48



D92



P62



D92



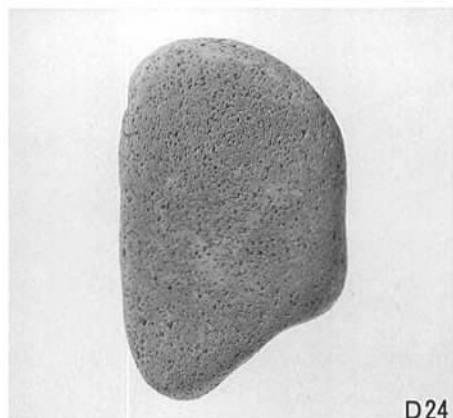
D95



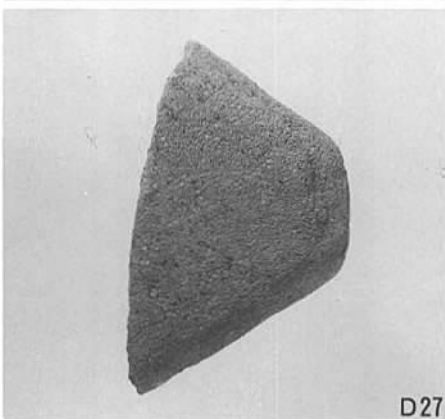
D31



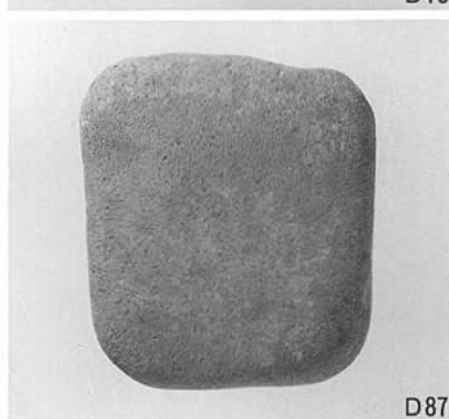
D78



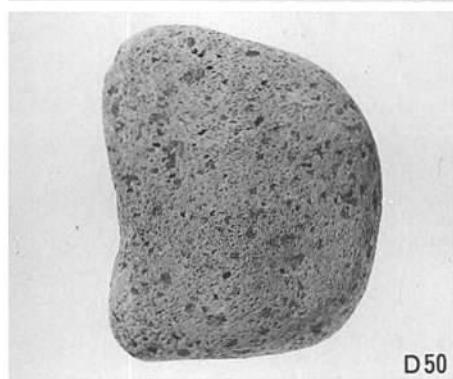
D24



D27

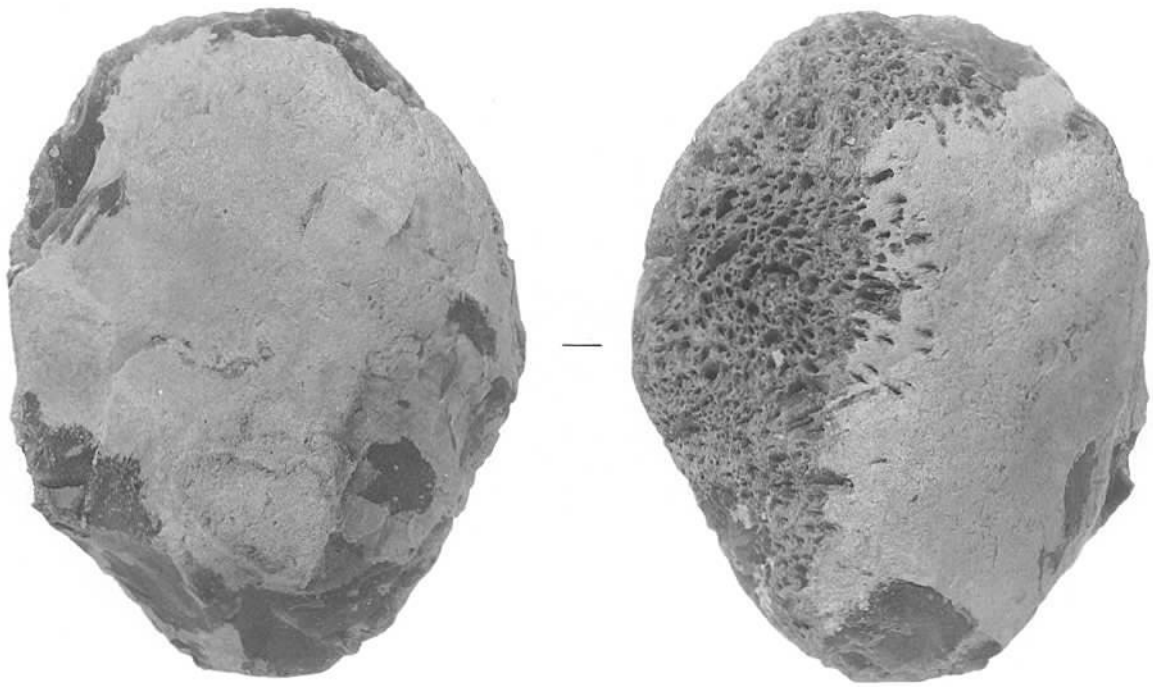


D87

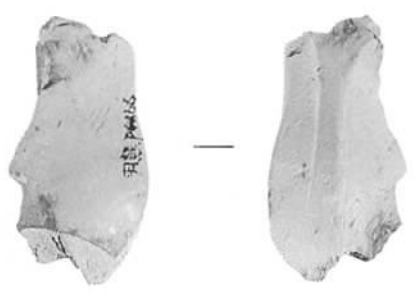


D50

出土遺物7（石製品；その他）



D27



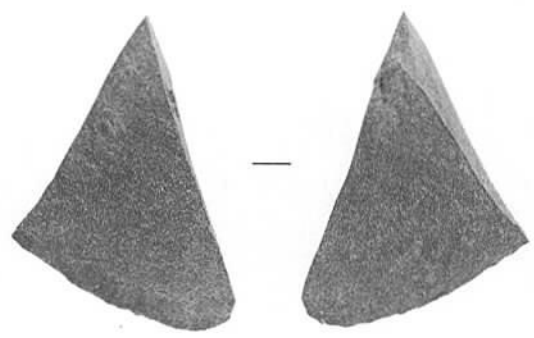
P66



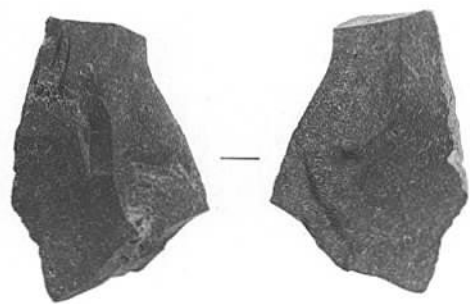
D68



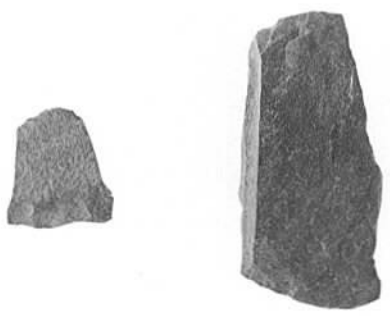
D67



D47



D6



D6 D23

出土遺物 8 (石製品 ; その他打製石器)

報告書抄録

ふりがな	はぐまいせき
書 名	羽熊遺跡
副 書 名	国道496号線関係埋蔵文化財調査報告
巻 次	1
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書
シリーズ番号	第144集
編 著 者 名	飛野博文
編 集 機 関	福岡県教育委員会
所 在 地	☎812-8577 福岡県福岡市博多区東公園7-7 ☎092- 651- 1111
発行年月日	西暦2000年3月31日

ふりがな 所在遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コード		北 緯	東 緯	調査期間	調査面積	調 査 原 因
		市町村	遺跡番号					
はぐまい 羽 熊	ふくおかけんみやこぐんとよつまち 福岡県京都郡豊津町 おおあざせつまる 大字節丸36-1番地ほか	406244	920203	3 3 度 3 8 分 1 9 秒	1 3 0 度 5 8 分 1 8 秒	1994.7.18 ~ 1994.9.1	約1,500m ²	国道496号線 道路改良工事

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
羽 熊	集 落	弥生時代	住居跡・土坑（貯蔵穴）	土器・石製品	小型貯蔵穴

印 刷 金丸印刷株式会社 福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6-46-1

福 岡 県 行 政 資 料	
分類番号 J H	所属コード 2133051
登録年度 11	登録番号 4